比叡山宗教サミット25周年記念

世界宗教者

THE INTERRELIGIOUS GATHERING OF PRAYER FOR WORLD PEACE

平和の祈りの集い

テーマ：**自然災害の猛威と宗教者の役割**

－3･11大震災と原発事故への反省と実践－

主催／比叡山宗教サミット25周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」実行委員会

比叡山宗教サミット25周年記念

世界宗教者
平和の祈りの集い

THE INTERRELIGIOUS GATHERING
OF PRAYER FOR WORLD PEACE

日時：2012年8月3日（金）・4日（土）
場所：国立京都国際会館・比叡山

主催
比叡山宗教サミット25周年記念
「世界宗教者平和の祈りの集い」
実行委員会

2012.8.3

開会式典 OPENING CEREMONY

開式の辞を述べる
小林祖承実行委員会総務部長

阿純孝実行委員会委員長による開会挨拶

世界各地での自然災害及び紛争の犠牲者に黙祷を捧げる各宗教代表者

会場となった京都国際会館の参加者

歓迎挨拶を述べる田中恆清実行委員会副委員長

海外宗教者代表

日本宗教者代表

交歓する宗教者たち

2012.8.3

メッセージ | MESSAGE FROM ABROAD

世界仏教徒連盟会長のメッセージを
披露するパロップ・タイアリー
世界仏教徒連盟事務総長

ローマ教皇のメッセージを披露する
ピエル・ルイジ・チェラータ ローマ教皇庁
諸宗教対話評議会名誉局長

サウジアラビア王国イスラーム問題・
寄進・宣教・指導大臣のメッセージを
披露するアブドゥラー・アルレヘダン
サウジアラビア王国イスラーム問題・
寄進・宣教・指導大臣顧問

記念講演 | MEMORIAL LECTURE

哲学者：**梅原　猛氏**

テーマ：**自然災害と人間の文明**

演　題：**「草木国土悉皆成仏」という思想**

「自然災害と人間の文明」のテーマのもと「『草木国土悉皆成仏』という思想」を演題に記念講演を行う哲学者の梅原猛氏

人類は、原子力エネルギーという悪魔と手を結んで、
この文明を作ってきたのではないだろうか。
日本は、科学文明の被害を二度受けた。
ひとつはヒロシマ、ナガサキである。
もうひとつはフクシマである。
この二度の体験を持つ我々は、人類に先立って、
脱原発の方向に進まなくてならない。

2012.8.3

テーマ

被災者に宗教者は
如何に向き合ってきたか

コーディネーターをつとめる杉谷義純世界宗教者平和会議日本委員会理事長・天台宗宗機顧問

パネリストたち

シンポジウム
SYMPOSIUM

シリアからの声 REPORT FROM SYRIA

閉式 CLOSING CEREMONY

シリアを抑圧する悪の手から自由に。
流血を停めるために支援と祈りを……。

マー・グレゴリオス・イブラヒム　シリア正教アレッポ大主教

シリアでの犠牲者に黙祷を捧げる宗教者たち

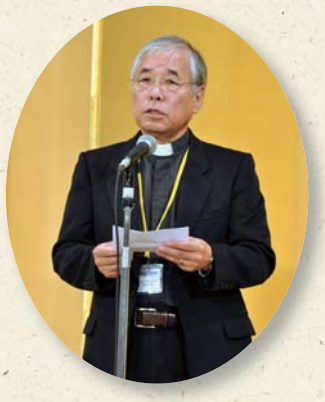
開会式典の閉会挨拶を行う
渡邊実行委員会副委員長

2012.8.3

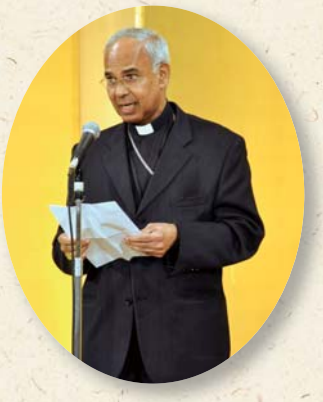
交歓レセプション WELCOMING RECEPTION

開会の辞を述べる根本昌廣実行委員会接遇部長

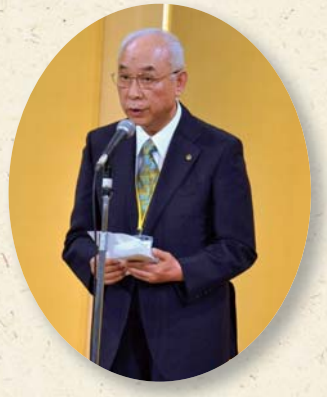
ビック・ボーティパラー師から半田孝淳実行委員会名誉顧問(天台座主)に仏像が贈呈された



献杯は渡邉純幸実行委員会名誉顧問



祝辞を述べるジョセフ・チェノットゥローマ教皇庁大使



岡野聖法実行委員会顧問による歓迎挨拶

2012.8.4

フォーラム
FORUM

テーマ

原発事故が提起した
エネルギー問題と宗教者の立場

開式の辞を述べる黒住宗道実行委員会会議部長

原発と宗教者の立場を討議したフォーラムは大きな関心を集めた

パネリストたち

コーディネーターは吉澤健吉京都新聞総合研究所特別理事がつとめた

2012.8.4

鎮魂の祈り……

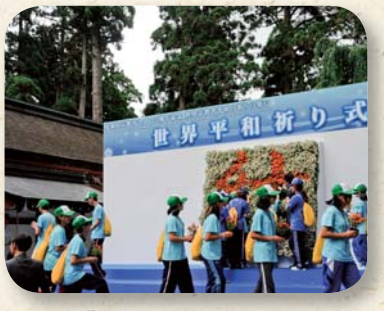
入場する青少年たち

入場する各宗教代表者たち

開式の辞と総合司会は
山田歌師がつとめた

平和の鐘にあわせて黙祷を捧げる各宗教代表者

午後3時30分に平和の鐘が打ち鳴らされた

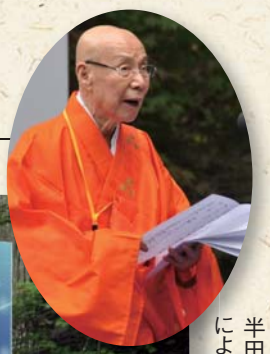


青少年により壇上に「結」の花文字が作られた

開会挨拶を行う徳増公明
実行委員会顧問

平和の祈り式典 | CEREMONY

比叡山から平和を……!!



半田孝淳実行委員会名誉顧問（天台座主）による主催者代表挨拶

「比叡山メッセージ2012」の発表。朗読するのは芳村正徳実行委員会名誉顧問。「核燃料から生じる危険な廃棄物の安全な処理方法が、未だ見出せない現実一つをとっても、原発を稼働し続けることは宗教的、倫理的に許されることではない。われわれ宗教者は、このことに強く警鐘を鳴らす責任があったことを、率直に反省するものである」

仏教代表による平和の祈り

キリスト教代表による平和の祈り

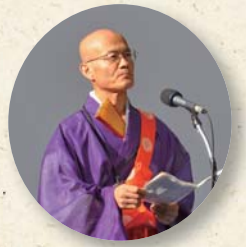
イスラーム代表による平和の祈り

新日本宗教団体連合会による平和の祈り

教派神道連合会による平和の祈り

神道による平和の祈り

諸宗教による平和の祈り



武覚超実行委員による閉会の辞

30周年でまたお会いしましょう!

学誠中国佛教協会副会長より半田孝淳実行委員会名誉顧問(天台座主)に「佛」の軸が贈られた

シリア代表の特別発表を受けて緊急に記者会見が開かれた

閉会後、半田孝淳実行委員会名誉顧問(天台座主)を囲んで、今回の祈りの集いを喜び合い、再会を約す各国宗教代表者たち

閉会後の記者会見

最終の事務局会議で打ち合わせを行うスタッフ

トピックス
TOPICS

REPORT

世界宗教者平和の祈りの集い

テーマ

自然災害の猛威と宗教者の役割

― 3・11大震災と原発事故への反省と実践 ―

発刊にあたって

神仏のご加護と関係者各位のご尽力により、比叡山宗教サミット二十五周年「世界宗教者平和の祈りの集い」を開催できましたこと、今までここに到るまでの関係者のご努力を含めまして厚く御礼申し上げます。

また、二十五周年を迎えるに当り、世界中から遠路にもかかわりませずおいでいただきました各位に、深く感謝申し上げます。

さて、二十五周年を迎えようとする矢先、平成二十三年三月十一日東日本大震災が発生し、自然の猛威を如実に知ることになりました。

このように自然がもたらした災害は、日本ばかりでなく世界各地において発生しております。そこで、これを機に「自然災害の猛威と宗教者の役割」をテーマに、自然災害に対して宗教者はいかに取り組んで来たか、また宗教者はどのように対処すべきかについて、宗教者同士が意見交換をすることにより、次の自然災害に対する備えにもなったと存じます。

また、二十五周年を開催するにあたり、日本を代表する哲学者梅原猛先生をお迎えして「自然災害と人間の文明」をテーマに記念講演をいただきました。その中で人類のエネルギーを原子力発電に依存することについて明確に反対の意見を示されましたことは、今回の集いに大きな影響を与えたものと存じます。

産業革命以来、永々と築き上げて来た文明は、その利便性において優れ、人間生活は格段に豊かになりま

した。ではありますが、この大震災による福島原発事故を機に、文明のあり方が問われております。

そこで「三・一一大震災と原発事故への反省と実践」ということばをサブテーマとしてご討議をいただきました。

これは現代社会がかかえている大問題であります。今回、宗教者の皆様が脱原発の方向性を示されたことで、二十五周年の集いが歴史的な意義を持つことになりました。

私たちが生存しているこの地球は、宇宙に存在する無数の星のたった一つに過ぎませんが、この地球こそ、生命を育む星であります。したがって、生命と生命は綿密につながって、地球の自然に支えられています。

私たち一人ひとりの行為が生命全体に影響を及ぼします。

最近その地球の自然が破壊されようとしております。私たちは今、我欲を超えた叡智をもってこの問題に対処せねばなりません。

今回、宗教者が集う意義もここにありました。

最後に、今回お世話になった皆様、また、遠路ご参加いただいた皆様に心より御礼を申し上げます。ありがとうございました。

二〇一二年十一月二十日

比叡山宗教サミット二十五周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」実行委員会委員長

天台宗宗務総長　**阿　純孝**

比叡山宗教サミット25周年記念

世界宗教者平和の祈りの集い

目次

カラーグラビア …… 2

発刊にあたって …… 14

開催趣意書 …… 18

比叡山メッセージ2012 …… 20

開催に寄せて ◎ 天台座主 半田孝淳 …… 22

日程 …… 24

メッセージ …… 27

◎ 世界仏教徒連盟会長 パン・ワナメティー

◎ローマ教皇 ベネディクト十六世
◎サウジアラビア王国イスラーム問題・寄進・宣教・指導大臣
シェイク・サーレフ・ビン・アブドルアジーズ・ビン・ムハンマド・アール・アルシェイク

33 **記念講演**◎哲学者 梅原 猛
自然災害と人間の文明 ――「草木国土悉皆成仏」という思想 ――

43 **シンポジウム**◎被災者に宗教者は如何に向き合ってきたか

60 **緊急報告** シリアにおける平和へのロードマップ

63 **フォーラム**◎原発事故が提起したエネルギー問題と宗教者の立場

87 **平和の祈り式典**◎主催者代表あいさつ／平和の祈り登壇者名簿

93 **資料**◎実行委員会名簿／新聞報道記事

開催趣意書

テーマ「自然災害の猛威と宗教者の役割」

―三・一一大震災と原発事故への反省と実践―

一九八七年八月、世界の宗教指導者は比叡山上に集い、宗教サミットを開催し、平和を祈り、人々と共に平和のために働くことを誓いました。それから二十五年、私達は時代の問題に取り組み、常に宗教者の役割を問い続けてきました。そして本年八月比叡山宗教サミット二十五周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」を「自然災害の猛威と宗教者の役割」をテーマに開催いたします。

自然災害が近年世界各地で猛威を振るっています。チリ、トルコ、中国、ニュージーランド、イタリアなどで大地震が発生、多くの犠牲者が出ました。また二〇〇四年のスマトラ沖地震では、インドネシアを始め周辺諸国に大津波が押し寄せ、死者二十八万三千人以上という未曾有の大惨事となりました。さらには、アメリカのハリケーン、アフリカ東部の「アフリカの角（つの）」と呼ばれる地域の干ばつ、タイの洪水などが記憶に新しいところであり、その被害に呻吟している人々が少なくありません。

さらに日本においても、二〇一一年三月十一日、マグニチュード九・〇という日本の観測史上最大の地震が発生しました。それに伴う想像を絶する巨大津波が震源地域の太平洋沿岸を襲い、三十もの市町村が壊滅的被害を蒙り、死者・行方不明者は二万人にも及ぶほどでした。

私達に恵みをもたらす自然が、突如として大災害を引き起こすという冷厳な事実の前に、人間がいかに無力であるか改めて思い知らされました。そして、いつの間にか自然に対する畏怖の念が、薄らいでいたことを私達は気づかされたのです。

さらに、今回の東日本大震災による津波は、追い打ちをかけるように福島原子力発電所の全電源を奪い、

冷却装置の不全をもたらしました。その結果大量の放射能が外部に拡散するという大事故が起こり、今なお収束したとは言い難い状況です。その原因を究明すると、人間の奢りと怠慢が引き起こしたものと断ぜざるを得ません。

日本災害史上最大の地震被害に加えて、この原子力発電所の事故は人々を恐怖の底に陥れました。すなわち、自然災害に人間の過失による災害が重なった複合災害ともいわれ、被害はより大きく、又より長く震災地域以外の人々までも苦しみ続けているのであります。

近代文明の象徴ともいえる科学技術の発展は、人々に大きな恵みをもたらしました。やがて、大量生産・大量消費の社会構造を生み、私達は物質的豊かさを手に入れることができました。しかし、それに満足することなく、人間の欲望はますます肥大化し、その充足を目指す一方で数々の矛盾を抱えることになりました。南北の経済格差、資源の枯渇、生態系の破壊、地球温暖化などの諸問題です。そして、私達はこれらの問題解決のため、安易に新しい技術の利用に活路を見出そうとしました。

原子力発電を例に挙げれば、地球温暖化防止が叫ばれる中、「CO2を排出しないクリーン、かつ安全で最も安いエネルギー」という大義名分のもとに、国際的な枠組みの中で次々と導入されていきました。しかし、チェルノブイリやスリーマイル島の原子力発電所の事故について、その原因のみならず、被害者の問題等について検証結果を十分共有してきたとはいえません。にもかかわらず、机上の安全対策を鵜呑みにした、いわゆる安全神話が一人歩きしていったなかで、福島原発事故が発生したのです。

近年の自然災害の多発、特に日本の大震災に誘発された複合災害は、あくまでも物質的豊かさの中に幸福を求める現代文明の在り方に、警鐘を鳴らしているように思われてなりません。すなわち、人間社会全体の在り方をそのライフスタイルを含めて、真剣に問い直さなければならないところにきています。

一瞬にして日々の平穏な生活を根こそぎ奪い去る自然災害の猛威は、戦争と同様に平和を破壊する大きな要因であります。そこで私達は自然災害による人々の苦しみに対して宗教者はどのように行動してきたかをお互いに検証し、さらには自然災害の被害を増長させたり人類の未来に危機を招きかねない、人間の営為に対し宗教者の立場と責任を明確にしていきたいと考えます。

比叡山メッセージ2012

二〇一二年八月三、四日、比叡山宗教サミット二十五周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」に参加するため比叡山山上に結集したわれわれは、平和を願う世界のすべての人々に心からのメッセージを送りたいと思う。

人類は有史以来、大自然の豊かな恩恵によって生命を維持し、さらにより利便性に富み快適な生活環境を手に入れるため、様々な工夫をこらしてきた。そのことは、やがて科学技術の飛躍的発展をもたらし、物質中心の近代文明が人々の生活を覆い尽くすこととなった。その結果、自然の恵みを享受するという姿勢から、自然を利用し、また改造して、より一層人間の生活を豊かにしたいという、飽くなき欲望を充足させる道をひたすら求め続けることになった。

そのようなとき、世界各地で自然災害が頻発、その甚大な被害の前に人々は為すすべもなく、呆然と立ち尽くす外なかったのが実状であろう。すなわち、科学技術が生んだ知見によって自然災害を防ぎ得るどころか、かつて日本の物理学者、寺田寅彦（一八七八～一九三五）が指摘したように、文明が進むほど自然の猛威による被害はその激烈さの度を増すという、冷厳なる事実を突きつけられたからである。その結果、ややもすれば自然を収奪し、思うままに利用しようとしてきたことが、いかに傲慢なことであるかに気付かされたといっても過言ではない。

特に昨年三月十一日の東日本を襲った大地震と大津波によって引き起こされた福島第一原子力発電所の放射能漏洩事故は、チェルノブイリやスリーマイル島の原発事故について謙虚に学ぶ姿勢が余りにも乏しく、科学技術のもたらす安全性を過信した結果である。われわれは、技術の進歩の成果を無条件に受け入れるのではなく、その選択に深い倫理性が求められていることを知るべきである。

古代ギリシャ神話が物語るように、人類に火を与えたプロメテウスに、ゼウスは生きながら内臓を鷲に喰らわせるという罰を与えた、という。それは、すでに文明が人類に幸せをもたらすばかりではなく、厄災を内包するということを示唆しているのではないだろうか。

核燃料から生じる危険な廃棄物の安全な処理方法が、未だ見出せない現実一つをとっても、原発を稼働し続けることは宗教的、倫理的に許されることではない。われわれ宗教者は、このことに強く警鐘を鳴らす責任があったことを、率直に反省するものである。

あらゆる宗教は、欲望の充足が幸福をもたらすのではなく、まず日々の生活の中に平安を祈り、共に生かされて生きることを神仏に感謝することを説く。今や人類は物質文明に押しつぶされそうになっている現実に目を開き、誤りのない道を選ぶ岐路に立たされていることを知るべきであろう。

一方、自然災害が発生するたびに、自らの生命をも顧みず救援活動に従事する人々の崇高さ、黙々とボランティア活動を続ける人々の気高さ、また直接被災地に駆けつけることは叶わぬまでも、物心両面にわたって支援し続ける人々の心の温かさに、人類の未来を見る。われわれ宗教者も、災害発生と同時に、各地で被災者支援に努力を傾注してきたが、甚大な被害を前にして、まだまだ至らぬことを痛感せざるを得ない。

宗教者の重大な使命は、大自然の猛威によって亡くなった方々を弔うことにあると同時に、最愛の家族・友人を一瞬のうちに奪われた人々が、一日も早く平安を取り戻し、安寧に暮らすことができるように祈念し、共に歩み続けることである。ここに集うわれわれは、諸宗教の連携を深めながら、この使命を全うすることを誓うものである。

二〇一二年八月四日

世界宗教者平和の祈りの集い参加者一同

開催に寄せて

比叡山宗教サミット二十五周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」が開催されるにあたり、ひとことご挨拶申し上げます。

今回のテーマは「自然災害の猛威と宗教者の役割」と決められました。

日本におきましては、昨年三月十一日に国難ともいうべき東日本大震災が発生し、マグニチュード九・〇という大地震、また大津波により二万人近い尊い生命が失われました。さらに大津波により、東京電力福島第一原子力発電所が破壊され、大量の放射性物質が漏洩するという重大な原子力事故が引き起こされました。その結果、周辺地域の住民は、住居や仕事を放棄せざるを得ない事態に追い込まれ、長期にわたる避難生活を強いられました。今なお日本全国、また周辺諸国は放射性物質の及ぼす健康被害に脅えています。

有史以来、人類は大自然の豊かな恵みによって生かされると同時に、その猛威に脅かされてきました。その猛威を克服すべく、科学技術の発展に力を傾注してきたのが人類の歴史であると申してもよいでしょう。

大地震、大津波は人智では止めることのできない、いわゆる仏教でいう「諸行無常の理」ではあります。しかし、今回の原発事故は、人間のあくなき欲望を満たそうと突き進むあまり、大自然に対する畏敬の念を軽んじたことが根本にあるように思われてなりません。

我々宗教者の重大な使命は、大自然の猛威によって亡くなった方々の霊を鎮めることにあることは申すまでもありませんが、同時に「亡くなった人の分まで生きる」と決意した人々に寄り添い、共に生きることでありましょう。

ここに比叡山宗教サミット二十五周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」にあたり、ここ比叡山山上に集われた世界の宗教指導者と共に、世界平和が訪れ人類の救済がなされるよう真剣な祈りを通じて、平和のために働く決意を新たにするものであります。

二〇一二年八月四日

天台座主　大僧正　**半田孝淳**

第1日目【8月3日(金)】

時間	日程	内容
11:00	開場・受付 (於:国立京都国際会館)	
13:00	オープニング	
13:15	開会式典	・開会の辞　実行委員会総務部長　小林祖承師 ・世界各地の自然災害及び紛争の犠牲者への祈り ・開会挨拶　実行委員会委員長　阿　純孝師 ・歓迎挨拶　実行委員会副委員長　田中恆清師 ・海外招待者紹介 ・海外代表メッセージ 世界仏教徒連盟会長メッセージ 代読　世界仏教徒連盟事務総長　パロップ・タイアリー氏 ローマ教皇メッセージ 代読　ローマ教皇庁諸宗教対話評議会名誉局長　ピエル・ルイジ・チェラータ師 サウジアラビア王国 イスラーム問題・寄進・宣教・指導大臣メッセージ 代読　サウジアラビア王国 イスラーム問題・寄進・宣教・指導大臣顧問 アブドゥラー・アルレヘダン師
14:00	休憩	
14:10	記念講演	テーマ　「自然災害と人間の文明」 演　題　「『草木国土悉皆成仏』という思想」 講演者　梅原　猛氏(哲学者)
15:10	休憩	
15:30	シンポジウム	テーマ　「被災者に宗教者は如何に向き合ってきたか」 特別ゲスト　アルベルト・クワトルッチ氏 (聖エジディオ共同体事務総長)……(イタリア) パネリスト　プラティープ・ウンソンタム・秦女史 (プラティープ財団創設者・事務総長)……(タイ) パネリスト　学誠法師 (中国佛教協会副会長)……(中国) パネリスト　ユスフ・ユルドゥルム氏 (キムセヨクム副理事長)……(トルコ) パネリスト　千葉博男師 (宮城県宗教法人連絡協議会副会長・竹駒神社宮司)……(日本) コーディネーター　世界宗教者平和会議日本委員会理事長・天台宗宗機顧問　杉谷義純師 ・シリアからの緊急報告　「シリアにおける平和へのロードマップ」 シリア正教アレッポ大主教　マー・グレゴリオス・イビラヒム師
17:00	閉会	・閉会挨拶　実行委員会副委員長　渡邊恭位師 ・閉会の辞　実行委員会総務部長　小林祖承師

18:00 19:30	交歓レセプション (於:グランドプリンス ホテル京都)	・開会の辞　実行委員会接遇部長　根本昌廣師 ・主催者挨拶　実行委員会顧問　岡野聖法師 ・祝辞　ローマ教皇庁大使　ジョセフ・チェノットゥ師 ・乾杯　実行委員会名誉顧問　渡邊純幸師 ・閉会の辞　実行委員会接遇部長　根本昌廣師

日程
SCHEDULE

第2日目【8月4日(土)】

時間	日程	内容
9:00	開場 (於：国立京都国際会館)	
9:30

MESSAGE FROM ABROAD

メッセージ

パン・ウナメティー世界仏教徒連盟会長

ローマ教皇ベネディクト十六世

サウジアラビア王国　イスラーム問題・寄進・宣教・指導大臣

シェイク・サーレフ・ビン・アブドルアジーズ・ビン・ムハンマド・アール・アルシェイク

世界仏教徒連盟会長メッセージ

世界仏教徒連盟会長
パン・ワナメティー

世界仏教徒連盟を代表し、比叡山宗教サミット二十五周年を記念した「世界宗教者平和の祈りの集い」のために、世界中からここにお集まり頂いた宗教指導者の皆さまに、祝辞を述べさせて頂きたいと思います。この八月の集いは、人類の利益や幸福のために行動する世界各地の宗教同士の協力や団結だけでなく、私たちが住んでいる、まさにこの地球がいかに脆弱であるかという現実に対する広い認識やそれを明かす力をも示すものです。

私たちは、自然災害には、それを防ぐ人間の能力を超えたものもあるという現実を認識しています。しかし、自然災害の多くは人間が作り出したもので、この地球の脆弱さや大切な人間の命を思うなら、自分たちの力で最小限に抑えたり、完全になくすことができます。人類の歴史が始まってからずっと、発展という名において、限られた天然資源が破壊され、かけがえのない人命が失われてきたのを目の当たりにしてきました。自分たちを文明人と呼ぶ私たちの行動は野蛮であると証明されているのです。私たちの文化は、自分たちの未来や創造物、すなわちこれからの世代を忘れてしまうほど、自己中心的になり過ぎています。私たちは、災禍の原因を、自分たちの欲望、嫌悪、身勝手さ以外のあらゆる物のせいにしています。

人類の生息場所である地球は一つしかないということ、そして、これまで私たちは、この唯一の生息場所を、意識的であれ無意識であれ、直接的であれ間接的であれ、破壊してきたということをどうか思い出してください。この世界の救済は、わたしたちの最重要課題です。この脆弱な地球を救うには決して遅過ぎるわけではないと、皆がわかっています。

二千五百年前、仏教の創始者であるブッダは、全世界的な人類の願いを明示し、皆に次のことを熟考・黙想するよう勧めました。それは、「生きたいと願う全ての者は、死を望まない。全ての者が幸福を望み、苦痛を嫌悪する。生きたいと願う全ての者が、死を望まず、幸福を望み、苦痛を嫌悪するので、もし誰かが殺生をすれば、それは愉快なことでも、心地よいことでもない。もし私が別の命を奪えば、それは他者にとって、愉快なことでも、心地よいことでもない。したがって、私にとって不愉快で好ましくないことは、他者にとっても不愉快で好ましくないのである」。

計り知れない危機に直面して人類が困窮している時には、人種、宗教、文化の分断などはなくなり、祖父母、父母、夫婦、兄弟姉妹、子供、赤ん坊、人々などの区別だけになります。まるで自分の愛する家族や友人のような人々です。だからこそ、宗教指導者として、平和のメッセージ、警告のメッセージを広げるために、この世界的な認識を共有しましょう。まず私たち自身の認識、習慣、教義から始めて、どんな方法であれ、行動しようではないですか。

三宝の祝福により、全人類が導かれ、守られるよう願っております。

佛暦二五五五年八月九日（西暦二〇一二年）

ローマ教皇メッセージ

ローマ教皇
ベネディクト16世

私の前任者である福者ヨハネ・パウロⅡ世の推進により、一九八六年にアッシジで開かれた歴史的会合の精神を受け継ぐ、比叡山宗教サミット二十五周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」のためにお集まりの方々、ならびに宗教指導者の皆様に、ご挨拶できることを嬉しく思います。

宗教指導者が平和運動に参加することは非常に大切なことであり、皆様のご努力のおかげで、比叡山宗教サミットが異なる宗教をもつ人々の間の対話に有効に貢献する、主要な年次行事になってきたことを知って喜ばしく思っています。比叡山宗教サミット、ならびに自然災害に対する宗教指導者の対応について討議するシンポジウムの成果は、より強い連帯と相互扶助をもたらすものと確信しています。

キリスト教的世界観では、苦難を抱えている人々に向けられる愛は主の慈悲の表れです。主はこの世を非常に愛しておられたからこそ、一人息子であるイエス・キリストをこの世に遣わされたのです。それゆえ、昨年に日本の東北地方で起きた地震と津波、そして日本国民全体にとってのその後の痛ましい結果に思いが及んでしまいます。苦悩のなかにいる全ての人に希望を与え、支援し、助言し、慰めるために宗教指導者が有効な役割を果たしたことを知って心強く思いました。この悲劇的な出来事はまた、宗教が異なる人々が人のために互いにいかに協力できるかを明らかにするものでもあります。

こうした気持ちを抱きながら、善意と友情の印として、集まられた全ての皆様に溢れんばかりの主の恵みが注がれることをお祈りしています。

サウジアラビア王国イスラーム問題・寄進・宣教・指導大臣メッセージ

サウジアラビア王国イスラーム問題・寄進・宣教・指導大臣

シェイク・サーレフ・ビン・アブドルアジーズ・ビン・ムハンマド・アール・アルシェイク

慈愛あまねく慈悲深き神（アラビア語ではアッラー）の御名において。万有の主である神に称讃あれ。そして神の使徒である預言者ムハンマド、そして全ての預言者と使徒の上に祝福と平安あれ。

まず、比叡山宗教サミット二十五周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」の実行委員長殿に、深い敬意と謝意を表したいと思います。今日の世界において、あらゆる宗教の信者達に対し、寛容さと平和を広めるという、真の宗教の役割を活性化することを目的とした本会議ですが、宗教界の指導者達が一堂に会するこのような場を提供して下さった日本政府と国民の皆様に、心より御礼を申し上げます。

今日の私たちの世界では、グローバリゼーションや国際交流の発展および相互依存性の高まりを悪用したテロ組織や利益集団といった、国の枠組みを超える要因からますます大きな影響を受けるようになりました。しかも彼らは、人々を戦争や紛争に駆り立て、政治的・経済的な恩恵を享受するために、宗教を口実に使います。したがって、宗教者間の対話を継続することは大変重要なのです。

信仰を持つ者は、持たない者よりも、暴力に対峙し排除する力があり、そして平和、共存、文化交流を、国内外のコミュニティに伝える力があることは間違いありません。

イスラームの教えとその歴史を持って、イスラーム教徒は世界の安定、治安、そして平和に再び貢献いたします。預言者ムハンマドは、普遍的な人類へのメッセージとともに遣わされました。そして、このメッセージは、ある特定の人種や肌の色に向けられたものではなく、すべての人類を導くためのものなのです。神の言葉によれば、「われは只万有への慈悲として、あなた（ムハンマド）を遣わしただけである」（預言者章一〇七節）。唯一の神を崇拝し、全ての人類に向けた平和および平和的共存のメッセージを人々に伝える方法を説くために、神はコーラン（クルアーン）で次のように言っています。「人びとよ、われは一人の男と一人の女からあなたがたを創り、種族と部族に分けた。これはあなたがたを、互いに知り合うようにさせるためである。アッラーの御許で最も貴い者は、あなたがたの中で最も主を畏れる者である。本当にアッラーは、全知にして凡ゆることに通暁なされる」（部屋章一三節）。

イスラームでは、信者達に平和と思いやりの心を説いています。それは安定および繁栄の時や平和な時代に限らず、感情が高ぶり苛立つ行動をとるような厳しい時代にあっても、イスラームは信者達に迫害を避けるようにと説いています。四代目カリフであるアリー・イブン・アビー・ターリブが、彼の軍隊に対して言った言葉ですが、「もし戦いに勝ったのであれば、逃亡者や負傷者を殺してはならない。傷害を負わせたり、秘密をばらしてはならない。許可なく家に押し入り、金銭を略奪してはならない。たとえ自分や自分の主を罵倒する女がいても、その女を拷問してはならない。そ

して神に祈れ。そうすれば神の慈悲を受けることができるであろう」。

イスラーム国家とそれ以外の国の関係は、平和の上に成り立っています。神は、「もし彼らが平和を望むのであれば、あなたもまた平和を望みなさい」と言っています。全能の神は戦争を例外であるとし、「（信者へ）戦いをしむける者（不信心者）に対し（信者は）戦闘を許される。それはかれら（不信心者）が明らかに悪を行うためである。アッラーは、かれら（信者）に勝利を与えるだろう」。イスラームにおける戦争とは公正なものであり、布教を妨げる者に対してのみ行われるものであり、宗教に入ることを人々に強要するためのものではありません。なぜなら全能の神が言うように「宗教には強制があってはならない」からです。イスラームにとっての国際関係は、以下の様ないくつかの基本原則に基づいています。

一　人間としての尊厳

神曰く「われはアーダムの子孫を重んじて海陸にかれらを運び、また種々の良い（暮らし向きのための）ものを支給し、またわれが創造した多くの優れたものの上に、かれらを優越させたのである」（夜の旅章七〇節）。また、このような逸話もある。ユダヤ教徒の葬式が預言者の前を通り過ぎ、預言者は立ち止った。一緒にいた教友たちが「ユダヤ教徒の葬式です」と言うと、預言者は「人間の魂ではないか」と答えた、と。

二　人種や肌の色に関係ない人間の平等

神曰く、「彼こそは、一個の魂（アーダム）からあなたがたを創り、互いに慰安を得るため、その妻を創られた御方であられる」（高壁章一八九節）。また神曰く、「人びとよ、あなたがたの主を畏れなさい。かれはひとつの魂（アーダム）からあなたがたを創り、またその魂から配偶者（イブ）を創り、両人から、無数の男と女を増やし広められた方であられる」（婦人章一節）。

三　自由

全能の神曰く、「宗教には強制があってはならない。正に正しい道は迷誤から明らかに（分別）されている」（雌牛章二五六節）。預言者は、教友の一人がかれの息子たちを強制的にイスラームに入れることを許さなかった。

四　互恵的扱い

全能の神曰く、「あなたがたに戦いを挑む者があれば、アッラーの道のために戦え。だが侵略的であってはならない」（雌牛章一九〇節）。また神曰く、「もしあなたがたが（敵を）罰するなら、あなたがたが悩まされたように罰しなさい。だがあなたがたがもし耐え忍ぶならば、それは耐え忍ぶ者にとって最も善いことである」（蜂蜜章一二六節）。

この教えに従い、アブドッラー・ビン・アブドルアジーズサウジアラビア国王は、二〇〇八年六月にイスラーム、キリスト教、ユダヤ教、およびその他の宗教との対話を呼びかけました。キリスト教、ユダヤ教、

イスラームの指導者達から歓迎されたアブドッラー国王のメッセージは、世界中の緊張が高まって平和への取組みが行き詰まる中で打ち出されたものでした。アブドッラー国王の取組みはイスラームの基本原則に沿ったもので、まさにイスラーム教徒の平和への願いを反映したものでした。

アブドッラー国王の文化や宗教における対話への取組みは、以下の主要な原則に基づいています。

A 人種隔離を拒否し、人種的優越性という考えを捨てること。全ての人々は平等であり、同様の人権を享受するものである。すなわち、他の人種、肌の色、性別による優位性を主張しないということである。

B 民族的及び人間のコミュニティにおける多様性および差異は自然なことであり、その違いの中での協力や理解へと通じるべきである。

C 人間のコミュニティの違いや多様性は、その起源や宗教によって、全能の神が定められたものである。したがって、知恵と理性の持ち主は、その違いを超えてお互いに敬意を払い、人類としての幸福を得る為に共通点を見出すべく、努力する必要がある。

D 物質に溢れ、民族的価値観の分断に苦しむこの世界において、社会及び自然がもたらす共通の問題に対峙するには、効果的な解決策の発見に繋がりうる経験を共有することで、これらの問題を軽減させよう。

このような協力を呼びかけるアブドッラー国王の取組みは、世界各国の指導者達から歓迎された。国連は二〇〇八年十一月に平和の文化に関する高官級の会議を開催し、国王の取組みについて議論した。同会議には、百九十カ国および世界的指導者六十名が参加し、文化や宗教間の対話が世界平和の実現に重要であることが強調された。

過去数年に渡り、インドネシアやハイチ、米国、そして日本といった国々で、多くの自然災害が起きました。これらは全て、人間の責任であります。人類は環境を汚染し、自然の法則や規則を守りませんでした。

宗教機関やそのメンバー達は立ち上がり、これらの災害に対峙し解決するという大きな責任があります。政府や国際機関から建設的かつ誠意ある協力を得ることにより、環境破壊を阻止し、主が創られた法則や規則を人間が守るようにしなければなりません。

最後に平和と友好の国、日本におけるこの宗教サミットのご成功を心より祈念するとともに、人類の幸福のための宗教的対話をこれからも継続していくことを、強く願っております。

MEMORIAL LECTURE

記念講演

哲学者＝梅原　猛氏

テーマ＝自然災害と人間の文明

演　題＝「草木国土悉皆成仏」という思想

8月3日(金)14時10分～15時10分

国立京都国際会館

テーマ＝自然災害と人間の文明

◎記念講演「草木国土悉皆成仏（そうもくこくどしっかいじょうぶつ）」という思想

哲学者 梅原　猛氏

哲学者 梅原　猛氏

大正14年（1925）仙台市生まれ。京都大学文学部哲学科卒。立命館大学教授、京都市立芸術大学学長、国際日本文化研究センター初代所長などを経て、現在、同センター顧問。日本ペンクラブ会長も務めた。平成11年（1999）文化勲章受章。

今回、二十五周年となる比叡山宗教サミットで私が記念講演をさせていただくのは、私の八十七年の生涯において最も光栄なことと思っております。

まず、昨年の三・一一東日本大震災のことからお話したいと思います。

私は愛知県で育ち、京都で学びましたが、ふるさとは仙台です。そして母の故郷は最も大震災が激しかった石巻です。それゆえこの震災で私は深い衝撃を受けました。昨年4月、日本政府の「東日本大震災復興構想会議」の名誉議長に選ばれ、震災からの復興について激しい議論を行いました。また被災地を訪れ、惨状をこの目でつぶさに見ました。

そこで、私の口から出た言葉は「これは文明災である」というものでした。確かに地震、津波は天災です。しかし、今回の震災は、天災ばかりではなく、原発は絶対安全だと言い続けた日本政府および東京電力の引き起こした人災でもあります。ところが全くの天災、人災とも言い切れません。これは文明による災害なのです。

現代の先進国の多くは発電を多かれ少なかれ原子力発電に頼っています。依存度の高いのはフランス、アメリカ、日本ですが、ほとんどの先進国が原子力発電に頼っています。それゆえ、文

明による災害であるということを感じざるを得ませんでした。

私は、今回の災害を目の当たりにして、原子力エネルギーに相当程度頼っているこの現代文明を考え直さなくてはならないのではないかと思っております。

産業革命以来、人間は新しいエネルギーを開発してきました。まず石炭、次に石油という化石燃料によって、現代の科学技術文明は発展してきました。石炭、石油という、自然の恩恵、つまり太陽と水の恩恵で生み出された動植物の化石からできたエネルギーが産業革命を進める力となったのです。その後、新しいエネルギー革命が起こりました。それが原子力です。原子力は、人類が全く思いもかけなかった新しいエネルギーでした。日本の首相としてすばらしい仕事をされた中曽根元首相は「原子力を取り入れないと日本は先進国の仲間入りはできない」と主張されました。そして原発は日本でもつくられるようになったのです。

この原子力エネルギーは、幸福をもたらす女神でしょうか、それとも災いをもたらす悪魔でしょうか。

原子力が戦争に利用された時、原爆や水爆を生み出しました。その被害を受けた唯一の国が日本です。原爆の被害によって、日本は平和憲法を守る平和国家によみがえりました。これは大きな歴史的事件です。原爆の災いについて全人類が深く認識したと思います。ところが、原子力の平和的利用である原発の災いについてはわかりませんでした。スリーマイル島やチェルノブイリの原発事故が起こっても、まだ日本は「原発は安全だ」と言い続けました。ところが今回の福島の原発事故はスリーマイル島やチェルノブイリよりも更に深い災いをもたらしました。

原子力は本当に人間に幸いをもたらすものか、それとも人間に不幸をもたらすものかということを真剣に考えなくてはならないと思います。

原子力発電は核分裂によってできるものです。私の友人に核融合の研究者がいました。彼は「核融合ができれば、全ての技術の問題が解決されて人類に平和な世界がもたらされる」と信じていました。世界の文明国が核融合研究にどれだけの予算を費やしたかは計り知れません。しかし私は、核融合は太陽を地球につくろうとするような学問だと思います。太陽を地球につくることはできません。核分裂はそれとは違いますが、やはり人間の思い上がりから生まれた科学技術ではないか。ゲーテの言うように、ファウスト博士がメフィストフェレスの手を握ったのではないか、と思うのです。

発生から20年。時間が止まったままのチェルノブイリ「原発城下町」
（提供：毎日新聞社）2006年04月撮影

我々がファウスト博士だとすれば、原子力エネルギーという悪魔と手を結んでこの文明をつくってきたのではないかと考えざるを得ないのです。人類は、地球上に太陽をつくるなどと考えるのではなく、太陽や自然の恩恵を受けながら存続していくという文明に変わらなくてはならないと私は思います。

同時に科学技術というものについて深く考える必要があります。科学技術文明を進める哲学をつくったのはルネ・デカルトであると言わざるを得ない。ルネ・デカルトの国、フランスは最も大きくエネルギーを原子力に依存する国です。そのような科学技術の考え方、デカルトの考え方そのものをここで批判しなくてはならないのではないかと思うのです。

デカルト哲学について詳しく語る時間はありませんが、デカルトは全てを疑って、疑った末に疑うべからざる「我」に達しました。それを表すのが「cogito, ergo sum（我思う、ゆえに我あり）」という言葉です。

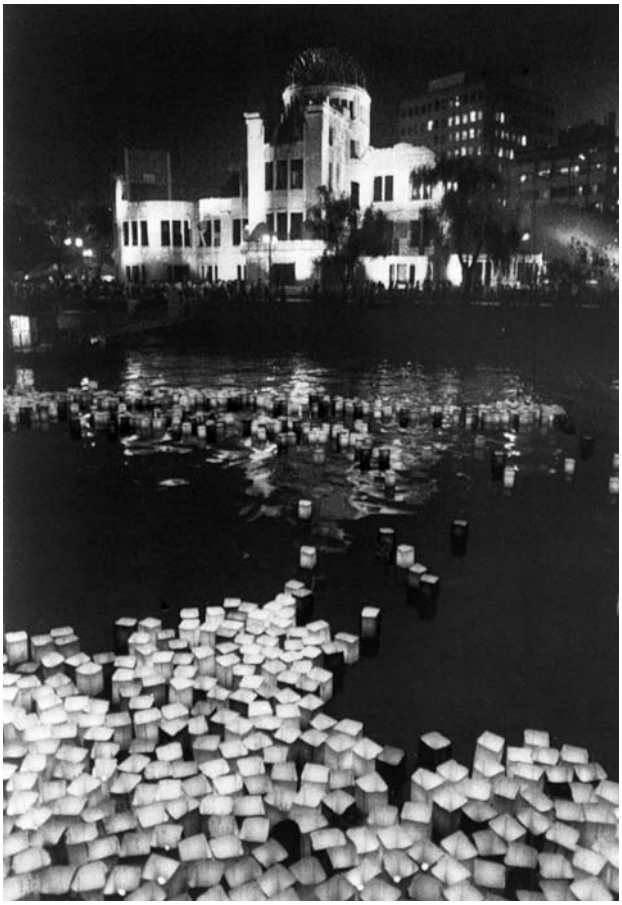
「我」が一番確実なものである。理性的な「我」、疑っている「我」、考えている「我」が確かだ。この「我」の証明の後に神の証明があり、そして今度は「我」に対立する外界の証明がある。それが自然の世界である。自然の世界の法則は数式によって表現される科学的な世界である。その法則を認識することによってその科学的世界は解明される。「我」に対するものは、無機質な、いわゆる数学的法則によって明らかにされる自然世界である。そしてそのような自然の法則を知れば知るほど人間はたやすく自然を支配できるようになる。それまで自然は人間にとって恐るべきものであったが、自然科学によって、自然は容易に人間が支配できるものになり、自然は奴隷のごとく人間に仕えるものになるであろう。このような考え方がデカルトの思想であると私は考えています。

この会場の窓から自然が見えます。その自然は果たして無機的なものでしょうか。自然には生命が溢れています。無数の生き物が自然界に存在します。そういう自然が本当の自然であり、デカルトの言うような自然科学的自然は一種の抽象ではないか。

私は西洋哲学を日本史とともに勉強してきましたが、西洋哲学を批判するのは恐れ多いことと思い、これまであまり口にしませんでした。しかし自然は生きています。自然には生き物がたくさんいる。そういう自然をデカルトは抽象したのではなかろうか。そこから自然科学的世界が生まれ、それによって科学と科学技術が裏づけられた。デカルトはその意味で、近代文明を理論づけた最も偉大な哲学者であります。

人間が自然を支配するための自然科学は著しく発展しました。科学技術もまた著しく発展しました。人間は自然を支配することに成功しました。しかし、現代において自然は悲鳴を上げています。自然破壊、環境破壊が地球の至るところで起こっていて、地球上の生物の多くの種類が毎年絶滅しています。これは現代の文明の運命ではないかと私は思います。

確かにデカルト哲学は科学と科学技術を基礎づけて、それまで支配できなかった自然を見事に支配して、豊かで便利な文明をつくりました。それはすばらしいことであると思います。日本は非西欧国家の中でいち早くそのような文明のすばらしさを認め、採用しました。おそらく非西欧国家の中で日本ほど西洋文明の採用に成功した国はないでしょう。日本が世界第二の経


広島原爆の日。灯ろう流し（提供：毎日新聞社）

済大国になったのはそのような文明のおかげであると感謝せざるを得ません。

しかし日本はこの科学技術文明のマイナス面による被害を二度も受けています。一度目は広島、長崎に落とされた原爆です。二度目は福島で起きた原発事故です。このような二度の経験をした日本はこの際、世界に先立って新しい文明を模索しなくてはならないのではないかと思うのです。私は、日本は脱原爆、脱原発の文明の方向に進まなくてはならないという信念を強くもっています。

西洋はすばらしい科学技術文明を生み出しました。しかしその文明は行き詰まっています。この行き詰まりを解決する思想はどこかにないだろうか。そこには東洋の知恵が必要ではないか。日本の文化の中に現代の科学技術文明の行き詰まりを打開する思想があるのではないか。私はそういうことを五十年来考え続けてきて、今ようやくその答えを出せるのではないかと思うのです。

日本仏教が生んだ思想に「天台本覚思想」というものがあります。天台密教が流行し、比叡山で栄えました。その天台密教の結論が天台本覚思想です。

その思想を端的に表すのが「草木国土悉皆成仏」です。人間は仏性を持っていて、仏になれる。そして人間ばかりではなく、動物も植物も仏性を持っていて成仏できる。鉱物や国のような抽象物もやはり仏性を持っていて成仏できる。そういう思想です。

このような思想は、実はインド仏教にはありません。インド仏教では、仏性を持つのは動物までに限られ、植物に霊性を認めるという考え方はないと思います。中国の仏教にもありません。中国の天台仏教では道教の影響によりそういう思想が一時ありましたが、それは中国仏教の思想の主流にはなりませんでした。

しかし、これが日本仏教思想の主流になったのです。なぜなら、天台密教というのは天台宗と真言宗が合体したものであるからです。そしてこの天台本覚思想が浄土、禅および法華という鎌倉新仏教の共通の前提になりました。つまりそれは浄土教の思想でもあり密教の思想でもあり法華宗の思想でもありま

す。とすれば、日本仏教の中心思想と言ってよいでしょう。

今日は西洋の方もたくさんいらっしゃいますが、日本の仏教といえば禅と思っている人も多いのではないでしょうか。鈴木大拙の著書『禅と日本文化』は西洋の人々によく読まれましたから、日本の仏教は禅であるかのごとく思っておられる方が多いのです。しかし、禅は仏教宗派の一つにすぎず、禅のみで日本文化を説明することはできません。禅はたしかにすばらしい仏教ですが、それが日本仏教の中心思想とは言えません。日本仏教の中心思想は「草木国土悉皆成仏」という言葉で端的に表現される天台本覚思想にあります。私は五十年間仏教を勉強して、そのような結論に達しました。

では、どうして日本において仏教がそのような変質を遂げたのでしょうか。

日本では、狩猟採集文化あるいは漁労採集文化が甚だ発展しました。日本は海に囲まれていて、特に東日本ではサケ、マスが遡上します。これほど豊かな狩猟採集文化は世界にあまり例がありません。豊かな狩猟採集文化によって縄文文化が発展しました。そのうえ、約二千五百年前に日本に伝わった稲作文化が狩猟採集文化と合体することによって日本文化が生まれたと言っても差し支えないでしょう。

稲作文化は自然の恩恵を大きく受けています。農業でもっとも大切なのは熱い太陽と豊かな水です。エジプトで発展した小麦農業文明も、中国で発展した稲作文明も、太陽と水の恩恵を受けています。日本の稲作文明も太陽と水の恩恵を受けています。自然崇拝という点において、日本の稲作文化は狩猟採集文化である縄文文化と相通ずるものがあります。

この縄文文化を育んだのは日本の神道です。日本の神道というのは、明治以来の国家神道のような堅苦しいものではありません。自然への畏れと自然崇拝から生まれた宗教です。そのような時代にもっとも崇拝されたのはヒスイの勾玉です。ヒスイは、白地に緑が混じる石です。それは雪の中から顔を出す緑を象徴していると言われます。とすれば、それは植物の霊と言える。また、勾玉の形は動物をかたどったものであるとも言われています。魚やイノシシの形をしているものなどがあります。とすれば、それは動物の霊とも言える。つまりヒスイの勾玉というのは植物の霊、動物の霊を象徴するものです。日本人は、そのように植物の霊、動物の霊を縄文時代以来崇拝してきたのです。そのような神道が仏教に影響して「草木国土悉皆成仏」

という思想が生まれたのではないかと私は思います。

日本の文化はそのような思想で考えればよく理解できます。たとえば『古今和歌集』は二十巻から成りますが、一巻から六巻までは春夏秋冬の四季を詠んだ歌です。春が二巻、秋が二巻、夏と冬が一巻ずつ。そこでは日本の植物の美しさが謳われている。春は桜、秋はもみじ。いずれも移ろいやすいものです。日本人はそういう移ろいやすいものに深い美を見たのです。『源氏物語』の登場人物は、桐壺、藤壺、葵、紫、夕顔というように、ほとんど植物の名がつけられています。戦前までは日本の女性の名の多くに植物の名がつけられていました。梅子、松子、藤子など。その代表が花子です。

「草木国土悉皆成仏」という思想は俳句にもあります。俳句は必ず自然を詠む、自然の一瞬を鋭くとらえる芸術です。俳句には季語があります。季語の中心はやはり植物です。また、ゲームといえば、西洋ではトランプ、中国ではマージャン、日本では花札です。花札の絵柄は、一月は松、二月は梅というように自然の植物が使われています。ゲームにまで「草木国土悉皆成仏」という思想が広まっているのです。

国歌「君が代」にもまたそういう思想が含まれているかもしれません。「君が代は千代に八千代に　さざれ石の　巌（いわお）となりて　苔（こけ）のむすまで」と。小さい石が岩になる。石が生き物のように成長して大きな岩になる。これは国家主義を謳ったものではなく、日本の「草木国土悉皆成仏」という思想が謳われたものだと考えることもできます。

能は日本の誇る伝統芸能です。能の主人公は、主に救われない霊です。それは人間の霊であることが多いが、キツネや鵺（ぬえ）などの動物であることもあります。これらの動物が天皇を悩ます。ところが、天皇を殺そうとしたこれらの動物も、霊を持っていて救われるという筋です。「西行桜」という能は、桜や柳の木などが霊を持ち、最後には成仏できるという筋です。「草木国土悉皆成仏」という思想が能においてもはっきり語られています。世界の演劇で、人間以外の動物ばかりか植物、自然現象までもが霊を持つというようなものは類がないと私は思います。

欧米では、日本の美術を代表するものとして、かつては葛飾北斎の「富嶽三十六景」が大変有名でした。これが印象派の画家たちにも刺激を与えました。そして今、西欧でもっとも評価される日本の芸術家は伊藤若冲です。若冲の最大の傑作は「動植綵絵（どうしょくさいえ）」です。全三十幅のそれぞれにさまざまな動物と植物が描かれるすばらしい作品です。それは現在は宮内庁所蔵ですが、かつては京都の相国寺という禅寺にありました。相国寺には若冲の「釈迦三尊像」があります。釈迦と阿弥陀と観音の三像です。観世音菩薩は三十三に化身して人を救います。禅宗である臨済宗のもっとも重要な儀式である観音懺法は罪を懺悔する儀式です。その重要儀式に用いられていたのが「釈迦三尊像」とそれを荘厳するために描かれた「動植綵絵」です。

若冲の絵には、全ての生きとし生けるものの滅びゆく生命のありさまが描かれています。生き物の世界は弱肉強食の世界である。そのような世界が表現されている。にもかかわらず、そこに描かれているカエルも蛇も鳥も、みな生の歓喜を叫んでいる。命というものは滅びゆくものであり、世界は弱肉強食であることを認めながら、しかし生というのはすばらしいものであ

ることを高らかにたたえている。それは写生画ではなく、むしろ思想の絵です。仏教思想のあらわれであると言ってもよいでしょう。

そのように考えると、日本の芸術のもっともすばらしいもの、能や若冲の絵は「草木国土悉皆成仏」という思想の産物であると言えると思います。

近代科学技術文明を推し進めたデカルトの考え方は、間違っているとは言い切れないが、世界の中でもっとも確かなものとして人間を置いたことは一種の抽象であり誤謬であると言えるのではないでしょうか。このような抽象的自然を信ずることによって西洋社会は科学技術文明を生み出し、豊かで便利な社会にした。それは西洋の大いなる功績です。このような理性の哲学はヘーゲルにおいて極まりました。近代哲学はデカルトに始まりヘーゲルにおいて大成されました。そのヘーゲルの影響を受けたのがマルクスです。このような思想はやはりどこか間違っているのではないかと思われます。

二十世紀最大の哲学者であると思われるマルティン・ハイデッガーは、このような理性の哲学は実は意志の哲学であり、理性の背後で理性を動かしているのは実は意志であると考えました。また、フリードリヒ・ニーチェは意志の哲学を唱え、その強烈な支配の意志の持ち主を「超人」と呼びました。そしてその哲学は永劫回帰の哲学だと言いました。しかし、それはハイデッガーに言わせれば、近代哲学の理性の背後には意志というものがあり、現代は自然支配の凶暴な意志が世界を支配しているということになります。

この文明を超克するためにはどうすればよいか。ハイデッガ

ーは「存在に帰れ」と唱えます。ソクラテス以前の哲学者であるイオニアの自然哲学者には「存在」というものが認識されていたが、ソクラテス、プラトンによって「存在」は忘れられた。その忘れられた「存在」を復興するのが人類の課題であると言っています。ハイデッガーは「言葉は存在の家である」と言い、言葉の中に新しい人類の救いがあるとしています。彼は、ヘルダーリンの詩の中にそういう新しい人類の救いがあると考えています。

私は、西洋文明の批判においてハイデッガーは正しいと思いますが、ハイデッガーの存在の哲学によっては人類は救われません。「存在」は、ソクラテス以前の哲学者によって認識され、またヘルダーリンというドイツの詩人によって理解されたけれども、そのようなもので人類は救われない。人類存続の危機につながる環境破壊の問題はそれでは解決できない。それを解決するために我々日本人が出すべき知恵はやはり日本の伝統思想の中にある。それが「草木国土悉皆成仏」という思想です。これは人間と自然との共生の思想であると思います。今こそ、自然支配の哲学から自然との共生の哲学に文明は変わっていかねばならないのではないでしょうか。

浄土宗の僧であり、私の中学時代の恩師であります椎尾辨匡師が共生の思想を唱えました。浄土宗を始めた法然は善導という中国の仏教者に依っています。善導は、極楽浄土へともに行くことを唱えましたが、椎尾辨匡は「我々は共に生きようではないか」と唱え、次のような歌を詠んでいます。

「ともいきの　くさ木虫鳥　なごみして　いかしめぐみと
みほとけはのる」

「ひといきも　くさきのいきと　ともなれは　このみさながら　あめつちひろし」

共生するのは人間同士ばかりではない。草木、虫、鳥とも共生する。そういう生を生きようではないかと椎尾辨匡は言うのです。この共生の思想は環境破壊を防ぐために重要な今後の人類の思想になるべきではないかと思います。

浄土宗から出た親鸞は、二種回向というものを唱えました。我々は、念仏を唱えれば阿弥陀様、仏様のおかげで極楽浄土へ行く。それを往相回向といいます。往きのありがたい恵みであるという。しかし、極楽浄土にとどまるわけにはいかず、この世に苦しむ人がいる限り、帰ってこなくてはならない。それを還相回向といいます。阿弥陀様のおかげでまたこの世へ帰ってくるという思想です。これはある意味では生まれ変わり、死に変わりの思想です。

近代科学では、阿弥陀様のところへ行くというのは非科学的であると考えられます。この世に帰ってくるというのはさらに非科学的と考えられるでしょう。しかし私は、往って還ることによってそれは合理的になるのではないかと思います。人間を遺伝子の立場で考えると、遺伝子は生死を繰り返しています。往還によって生まれ変わり、我々はここに生きているのです。つまり、我々の生の中には永遠の昔から共生してきた命があるのです。そしてまた、未来でさまざまな生き物とともに生きなくてはならない、そういう命があるのです。

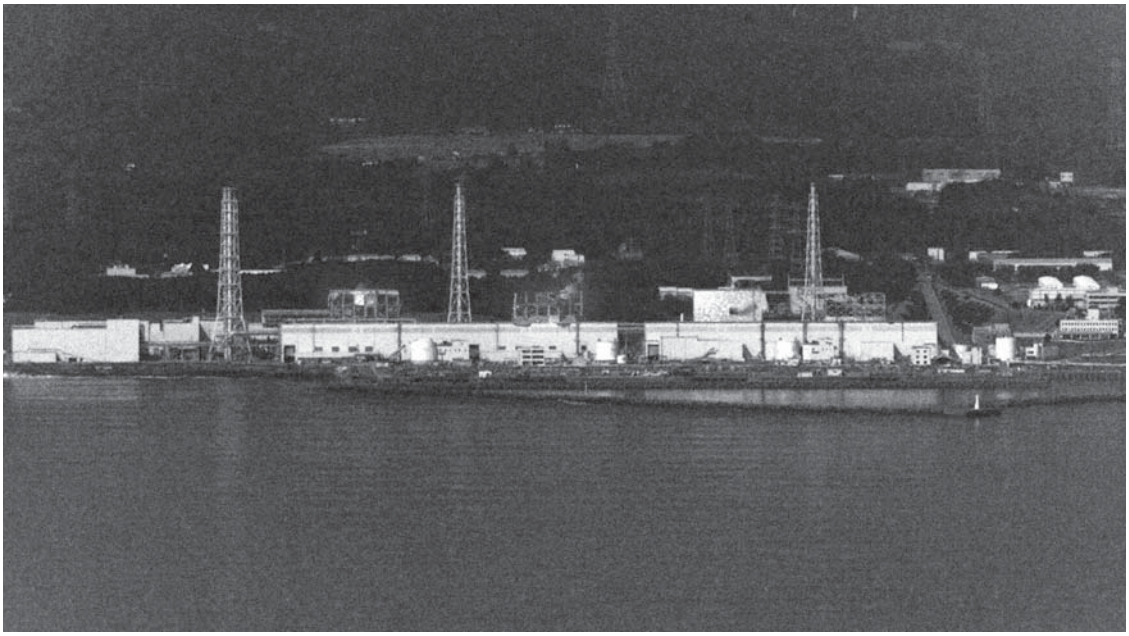
このように生命の中に過去の永遠と未来の永遠が宿っているというのが親鸞の考え方であると思いますが、私はこの考え方に強く惹かれるのです。

八十七歳の私に残された人生はあまりない。あと十年しかないとすれば寂しいことです。しかし、またこの世に生まれ変わってくると思うと、私には希望がわいてきます。

私は四十年ほど前、イギリスの歴史家、アーノルド・J・トインビー博士とお会いし、対談をしました。そこでトインビー博士は私に「科学技術文明を生み出した西洋社会は世界を支配した。この科学技術文明を取り入れない限り、国の発展はあり得ない。日本は賢明に科学技術文明を取り入れ、そして成功した。しかし、二十世紀が終われば、新しい哲学が生み出されなければならない。非西洋諸国が自己の文明の原理に基づいて、新しい世界像をつくらなければならない」と言いました。私は彼に「どのような原理でつくればよいですか」と尋ねると、「それはおまえの考えることだ」とお叱りを受けました。それから四十年経った今、私はようやくトインビーに答えることができるのではないかと思います。

日本は西洋文明の恩恵を深く受けています。しかし、これからはそのような文明の持続的発展を図る思想が必要になります。そのような思想を西洋以外の文明から西洋社会に提供しなければならない。それによって世界の平和が初めて可能になると私は思います。

今日、私は一つの日本の伝統思想に基づいた、新しい人類の平和的発展を目指す思想を語ることができたのではないかと思います。ご静聴ありがとうございました。（拍手）



東京電力福島第1原子力発電所（提供：毎日新聞社）

SYMPOSIUM

シンポジウム

テーマ

被災者に宗教者は如何に向き合ってきたか

8月3日(金)15時30分～17時
国立京都国際会館

◎シンポジウム

被災者に宗教者は如何に向き合ってきたか

（文中敬称略）

SYMPOSIUM

◎**特別ゲスト＝アルベルト・クワトルッチ氏**
（聖エジディオ共同体事務総長）イタリア

◎**パネリスト**

学誠法師（中国佛教協会副会長）中国

ユスフ・ユルドゥルム氏（キムセヨクム副理事長）トルコ

プラティープ・ウンソンタム・秦女史（プラティープ財団創設者・事務総長）タイ

千葉博男師（宮城県宗教法人連絡協議会副会長・竹駒神社宮司）日本

◎**コーディネーター＝杉谷義純師**（世界宗教者平和会議国際委員会理事長・天台宗宗機顧問）

◎**進行役＝小林祖承師**（実行委員会総務部長）

【小林】ただいまよりシンポジウムを始めたいと思います。本日は「被災者に宗教者は如何に向き合ってきたか」をテーマとしてご議論していただきます。

コーディネーターをつとめていただきますのは、世界宗教者平和会議日本委員会理事長・天台宗宗機顧問、杉谷義純師です。それでは皆様、よろしくお願いいたします。

【杉谷】それではシンポジウムを始めさせていただきます。

ただいま司会者より、本日のテーマは「被災者に宗教者は如何に向き合ったか」ということでございますが、ご高承のとおり近年、大災害が世界中で起こっております。スマトラ沖大地震は、記憶に新しいところだと思います。地震はタイも襲い、またタイでは先年、大洪水もございました。さらにトルコ、中国、イタリアでは大地震が起きて多くの被災者を出しております。日本においては昨年の三月十一日、東日本大震災と未曾有の津波が発生しました。

そういうなかで、まずそれぞれ宗教者はどういう立場でどのような救援活動をして、またどのように被災者に寄り添い、将来的に大震災というものにどう立ち向かっていったらいいか。それぞれの被災地で目覚ましい活動をされてきた先生方にきょうは登壇いただいております。それぞれのお立場から、まず五、六分、基本的なお考えを伺い、さらにそれぞれ具体的なご自分の立場においての経験、それから将来の方向性等々、いろいろお伺いできれば大変ありがたい、このように思っております。

まず最初にご発言いただきますのは、聖エジディオ共同体事務総長のアルベルト・クワトルッチさんです。どうぞよろしくお願いいたします。

◎ゲストスピーチ

いかにして諸宗教の代表者が自然災害の被害者にアプローチするか

聖エジディオ共同体事務総長

アルベルト・クワトルッチ氏

一九八七年比叡山で行われた初めての宗教サミットより二十五年も経ち、宗教間の協力は確実に育っていきました。東では天台宗の山田恵諦猊下よりはじめられた比叡山でのサミット、西では聖エジディオ共同体の「人間と諸宗教」によって始められたサミット。この二つのサミットは、一九八六年、偉大な前教皇ヨハネ・パウロⅡ世が望まれたアッシジでの会議の精神に則っています。年々会議と対話の道は広がっていきました。しかし時代は変わりました。今日、インターネットですぐに情報が伝わる反面、人間の意識に何も触れることができないようなグローバル化した

我々の社会に於いて、宗教の役割とはいったい何なのでしょうか。

各国内の事情に悩み、経済及び精神の危機で病んでいる欧州、そして目的が定まらず未来への新たな道を見出そうとしている東の国々を前に、諸宗教の代表者たちは更なる責任があると確信しています。その責任とは、現代社会に充満している深刻な疑問――表明されているものも、心の奥底に秘められている疑問も含む――に対し、「希望」という勇気をもって応え、人々の心に語りかけることです。

これを背景に、今回選ばれたテーマ「自然災害の猛威と宗教者の役割」は、適切だと思われます。二〇〇一年から二〇一一年の間、地震、洪水、津波、といった自然災害が年々ひどくなっていくのを目の当たりにしてきました。二〇一一年の東日本大地震と日本人、二〇〇九年のイタリアのラクィラと最近エミリア・ロマーニャ州で起きた災害とイタリア人、インド人、シンハラ人、二〇〇四年の悲劇とインドネシア人、二〇一〇年のハイチ人、ビルマ人、アメリカ人……この悲しきリストは尽きることがありません。自然災害を免れた民族などありません。この一〇年間で、地震という災害だけで七十八万人の被害者が出ています。この災害の多くの、いや多分これら全ての災害の原因は、多かれ少なかれ人間でしょう。

その例を一つ挙げると、二〇一〇年四月、メキシコ湾に流れ出した重油の「黒い波」は、世界のあらゆる海を汚染しました。寓喩的に、まさに人間の責任を象徴しています。狂ってしまった経済が作り出した悪が人間を「無」にし、命の価値を奪います。市場の法則は全てを支配しています。人間は自然を犯し欲望のまま巧みに操り、自己利益のために利用したがりました。

日本の国会原発事故調査委員会がすでに公式に認めたように、福島の原子力発電所の事故は、津波によっただけでなく人間のおざなりな態度にもよりました。調査委員会は、「人間による事故」とさえ書いたほどです。

多くの人が宗教家に、「もし神が人間を愛するのであれば、なぜこのような悲劇を起こすのでしょうか」と問いただしました。古今を問わず、他の者たちは、「このような災害は、神のお告げであり人間が行った悪事に対する罰である」とも解釈いたしました。

しかし、神が決して「悪」を望んでいるのではなく、人間をあらゆる辛さ・悲しみから救うことを望んでいる、と我々はよく知っています。自然災害は、神の思し召しではなく、人間の選択――従って人間の責任――による「悪」の結果なのです。神は自然災害の悲劇に与しますが、それは受身であります。いわば、人間と忍耐を分かち合うわけです。信仰を持つ男女は、全ての災害の被害者に神が身近にいることを証明するという向上的な責任、打ちひしがれる人々に慈悲を感じるよう人類を促す責任、及びあらゆる形の連帯感を推進するといった責任を持っています。

事実、近年起こった自然災害を前に、世界的なレベルの連帯感が生まれました。東日本の地震・津波の際、世界各国からの支援活動が良い例だと思います。この東日本の悲劇に於いて特に意味深くなおかつ効果的だったのは、諸宗教間の連帯感のもとに行われた具体的な作業やボランティア活動です。いかなる悲劇状況においても、信仰を持つ人々が介在することによって、重要かつ特別な役割を果たすのです。

実際このような自然災害に於いて、信仰を持つ男女は、時には

政治家や自治政府当局よりも重要な役割を果たすことができると強く確信しています。苦難により傷ついた者たちは自らの姿――人間としての尊厳――を取り戻すために神の「姿」になれます。また、苦しむ人々の孤独を打ち壊し、新しく連帯感を作り出す神の「手」にもなれるのです。

このようにして聖エジディオ共同体は、イタリアでの数多き地震災害や二〇一〇年ハイチでの地震、及び二〇〇四年インドネシアの津波災害に対応してきました。同じ時期にインドのタミル・ナドゥ州で家や十五もの小学校を再建設し、それらは九千五百人の児童を受け入れました。日本では、三月十一日から一ヶ月経ったとき、東北地方を訪問しました。一年が過ぎた今年、陸前高田市の市長を協定を結び、建築家隈研吾氏設計による高齢者のための集会所を計画しています。そして、この企画の実現に向けて、皆さんの資金援助を募っているしだいです。

最後に、自然災害を前に、諸宗教の代表者の方たちは、未来につながる希望のメッセージを発信しつつ、全世界に慈悲と連帯の道、及び「神の道」をしるすべく生きなくてはならないと思います。

【杉谷】クワトルッチさん。ありがとうございました。聖エジディオ共同体の世界各地における救援活動等をご紹介いただきました。

続きまして、中国仏教協会副会長の学誠法師にお願いをいたします。

被災者に宗教者はいかに向きあってきたか

中国佛教協会副会長
学誠法師

宗教は、天地自然や宇宙法則という未知の分野への畏敬の念より生れてきました。

人類は、大自然の猛威に直面したとき、絶望的な無力感を覚えます。人類は産業革命以来、科学技術の発展に力を注ぎ、近年では「人類の力で自然を自由にコントロールできる」という傲慢な考え方をするに至りました。確かに科学的な予測により、自然災害の被害を最小限に抑えられることも可能にはなりました。しかし、一方で人類が自然を破壊し、地球温暖化を引き起こすことにより、大災害が引き起されています。ならば科学技術の進歩は、かえって人類にマイナスといわざるを得ません。

私たちは、地球に生きる大家族の一人です。特に、宗教者は、その思いを一層深くしなくてはなりません。なぜならば、宗教者は、大災害の被災者を救援することにより多くの責任を負うからです。

まず大災害が発生すれば、宗教者は、被害者が苦しんでいる直近の問題を解決しなくてはなりません。負傷者の治療、住居の復興、生活基盤を再生させることなどです。自然災害に見舞われた人は、生きる基盤を一瞬のうちに奪われ、身心ともに絶望にうち

ひしがれています。宗教者は信徒たちと共に被災地へ入り、できる限りの貢献をしなくてはなりません。同時に、被災者と良好な信頼関係を結ぶことが、長い支援の中で必要不可欠なことです。

次に、宗教者は被災者の心のケアに重点を置くべきです。体の傷が癒え、従来の生活が戻ったとしても、被災者の心は大きな傷を負っています。そのリハビリは、肉体的なリハビリよりよほど難しいものです。被災者の多くは、肉親や友人、また財産や仕事を失っています。心のケアが必要なのです。そのケアがないと、これからの人生にトラウマを残し、深刻な影響が出ます。宗教は、人々に安心を与えます。ですから、宗教者は被災者の心理的ケアにおいて、重大な責務を負っています。

第三に、宗教者は被災者の人生の再生を手助けすべきです。被災者の心身の傷を癒すのみならず、被災者が新たな人生を歩むために協力すべきです。災難は人々を苦しませますが、また一面で、その試練によって人々を成長させます。困難のない人生はありません。特に激しい試練に直面した人は、深遠な智慧が身につきます。人々が経験したこともないような災いは、無常を知らせ、改めて命の大切さを教えもします。

第四に、宗教者は被災者と共に成長していくべきです。一般的に被災者は弱者と見なされます。しかし、支援する者と、支援される被災者との間に強弱はありません。みな平等なのです。支援された人々は感謝の気持ちで援助を受け入れるべきでしょう。同様に、支援する側も、慈悲の真心で働くことにより、感謝される喜びを体験します。その喜びが、今後の幸せの指針となることでしょう。宗教者のみならず被災者を支援する人々が、感謝と慈悲の気持ちで働くならば、被災者をサポートすると同時に自分自身をも助けることになります。

自然災害は、人間が最も恐れるものです。しかし、これらの災いによって我々は「平和」の大切さに気づきます。また、元気で生きていることがどんなに素晴らしいものであるかを実感します。

人類は、世界中のどの国、また民族を問わず、大震災に見舞われた地域があれば、即座に駆けつけ援助を惜しみません。その思いやりの心こそ、人類を結びつけるものでしょう。

【杉谷】どうもありがとうございました。宗教者の果たすべき役割等について非常にわかりやすくお話をいただきました。

続きまして、トルコからお見えになったキムセヨクム副理事長のユスフ・ユルドゥルム氏にお話をいただきます。

宗教指導者は自然災害の被災者とどのように向き合うべきか

キムセヨクム副理事長
ユスフ・ユルドゥルム氏

この十年、世界各地で発生する自然災害の件数は徐々に増えてきており、しかもその大半は第三世界で発生しています。災害が発生すると多くの場合、食糧やその他の物資といった物理的な支

援の提供により多くの関心が払われ資源が投入される一方で、被災者の精神的、心理的なケアの必要性についてはそれほど注意が向けられていないのが現状です。こうした危機的状況のなかで宗教、信仰コミュニティ、宗教指導者が果たす役割とは何でしょうか。

自然災害の被災者が精神的、心理的な回復を遂げていくなかで宗教指導者が一役を担うことは言うまでもないことですが、どのような方法で被災者の回復を支援していくべきかについては未だ手探りの状況です。そのため、宗教指導者が被災した地域社会と個人の両方に支援を提供できる方法についていくつか述べてみたいと思います。

宗教指導者が被災者に手を差し伸べるために活用できる方法について考察する前に、自然災害の被災者が負った心理的、精神的ダメージを明確に認識することが不可欠です。多くの被災者は壊滅的な自然災害の後、過酷な心的外傷性ストレスを抱えることになります。被災者は信頼を喪失しがちになり、愛情深く慈愛に満ち、この世に秩序と保護を与えてくれる存在である神への信仰心を失ってしまっている可能性があります。被災者の大多数は生きていく上での意味や希望を見失い、力をなくし、無力感に苛まれるようになります。

ハロルド・コーニックはその著書である〝In the Wake of Disaster: Religious Responses to Terrorism and Catastrophe〟のなかで、心的外傷を伴う経験は被災者の力を確実に奪い、被災者を極めて傷つきやすい状態に追いやってしまう傾向があると述べています。そのため、自然災害が発生した後に心理的、情緒的、精神的な回復を図るなかで、秩序を回復させることがより強いパワーとなります。

宗教指導者は心的外傷によって被災者の心に空いた穴を埋める努力をしなければなりません。このために災害発生後の状況のなかで次の二つの重責を担わなければなりません。

宗教指導者が担うべき重責の一つは、強力な信仰コミュニティを構築して、被災者の精神的、心理的回復を後押しするための支援システムを整備することです。信仰コミュニティは社会的、精神的支援を提供するための基本的手段です。被災者は自然災害という思いもかけない厄災によって大切なものを失い、苦悶するなかで孤独感を募らせていくことが多いため、社会的支援の提供には信仰コミュニティが絶対に必要です。信仰コミュニティによって得ることができる集団的協力と相互依存の感覚は、被災者にとって社会的なセーフティネットとなり、力の源泉となります。

災害救助における宗教指導者の存在はおのずと神の存在の確信へとつながり、苦難を抱えている人たちにとって大いなる安らぎを与えることになります。災害対策の様々な段階で宗教指導者はその存在感を示すべきです。自然災害発生直後、救急救命が行なわれている段階で、宗教施設を救援物資の配送拠点として開放することができます。その後の救援活動の段階では宗教指導者はできるだけ多くの被災者にできるだけ多くの援助が届くように他の災害救助機関と連携して活動することができます。

ここで強調しておきたいことは、地元の宗教指導者が救援活動のなかで果たす役割がいかに重要であるかということです。地元の宗教指導者は多くの場合、高度の社会資本を有しており、そうした社会資本は災害後の状況のなかで救援活動を効果的に行なうためには不可欠です。とはいえ、大々的な救援活動を行なうため

の資本を宗教指導者が持っていないこともありますが。また、特に第三世界の国々では宗教が社会において中心的な役割を果たす傾向があり、人々は他のＮＧＯから派遣されてきた外部の人たちよりも、地元の宗教指導者により強い信頼を寄せる傾向があります。そのため、多くの人にできるだけ多くの支援を届けるためには宗教組織と救助機関が協力し合わなければなりません。

次に宗教指導者は被災者と直接向き合って精神的、情緒的支援を提供しなければなりません。このように一対一で精神的な支援を提供するために使用できる方法は二つあります。宗教的対処による方法と神の意志に委ねる方法です。

調査結果から、自然災害など生活にとって主要なストレスとなる要因に直面した時、人々はこれまで自分が信じてきた宗教を肯定的に見直す場合と否定的に見直す場合があることがわかっています。自分の信じる宗教を肯定的に捉える人たちは前向きな宗教的対処法を身につけており、深い宗教的精神性（スピリチュアリティ）により神との確固たる関係を築くことができる人たちです。逆に、自分が信じてきた宗教を悲観的に捉える人たちは、否定的な宗教的対処法を身につけているため、神との精神的つながりが弱い人たちです。

臨床心理学者であるケニス・パーガメントとその仲間が実施した調査では、前向きな宗教的対処をする人たちは災害後もストレスが少なく、精神衛生上の問題も少ないことが証明されています。さらに人は生まれつき、悲観的な宗教的対処ではなく前向きな宗教的対処をする傾向が強いこともわかっています。

この情報を踏まえた上で、宗教指導者は被災者による前向きな宗教的対処を手助けすることによって被災者の精神的回復を促すためのイニシアチブを取るべきです。この場合に使用できる方策としては、被災者が発生した自然災害を潜在的に有益なものとして見直す手助けをすることや、宗教的寛容さを促して、被災者が宗教から導きを得て、心の痛み、怒り、不安を解き放つことができるようにすることなどが考えられます。

非常に重要なことは、被災者が自然災害の影響にばかり目を向けるのを止めて、宗教を生活における要として位置づけるように導く責任が宗教指導者にはあるということです。

精神的な救済を与えるもう一つの重要な方策は神の意志に委ねることです。宗教指導者は、絶望することを止め、神を全面的に信頼して、神に委ねるように被災者を促すべきです。神の意志に委ねるとは、被災者が現在直面している困難に立ち向かう方法を神が与えてくださると信じることです。現在は絶望のなかにあっても神は神の下僕である私たちに将来、必ず報いてくださると信じることです。

イーストテネシー州立大学の教授たちによる心理学調査から、神の意志に委ねることで、宗教への忠実性が強くなり、その結果、知覚されるストレスレベルが下がることがわかっています。

また、神の意志に委ねることで被災者は神への揺るぎなき信頼に根差した新たな希望を見出し、楽観的になり、その結果、心理的、精神的回復も加速されていきます。

宗教指導者は災害救援活動において非常に重要な役割を果たします。第三世界における自然災害の発生件数は増えており、その第三世界では宗教的概念と信仰を軸として社会組織が築かれる傾向があることに注目することが重要です。

こうした状況に備えて宗教指導者は将来の自然災害のストレス

と心的外傷に耐え得る強い信仰コミュニティを構築し、被災者が最終的に回復するために宗教が確固とした拠り所としての役目を果たすことができるように自分たちの立場をフルに活用すべきです。

【杉谷】 ありがとうございました。

それでは続きまして、タイから参加されたプラティープ財団創設者のプラティープ・ウンソンタム・秦女史にお願いいたします。

自然災害の被災者に宗教指導者はどう向き合えばよいか

プラティープ財団創設者・事務総長
プラティープ・ウンソンタム・秦女史

このサミットの目的は、一致結束することの力の強さを示す、すなわちすべての宗教の教えに、世界の世論と人々が宗派を超えて関心を持ち、その教えを日々の日常生活の中に生かすようアピールすることだと思います。それが叶えば、人類は平和な日々と暮らしを達成出来ます。そしてこの呼びかけは、今年は特に意義があります。今年は仏陀の生誕二千六百年の記念の年にあたるとされており、仏陀の教えを改めて確かめ、高め合う一段と意義深い呼びかけになると思います。

さて、「被災者に宗教者は如何に向き合ってきたか」というテーマは、私にとってどんな意味を持つかをお話ししたいと思います。

そのためにまず第一に「指導者」とは何かの定義づけをしましょう。指導者とは、物事の先行きを明示する能力、すなわち他者よりも先んじて進むべき行く手を見る努力をし、文字通りそのビジョンを指し示し、導くことが出来る人ではないでしょうか。そうすればその指導者は、人々を導き、適切な助言を与え、必要であれば様々な意見を束ねて共通のゴールへ向かうことが出来るでしょう。よき指導者とは、自らに従ってくれる人々に信頼を置いており、だからこそ何が起こり、どんな結果が生じるかを見通せるのではないでしょうか。

自然災害は、いつも突然起こり、予測出来ない壊滅的な変化を人間の生活にもたらします。愛する者たちの命が奪われたり、重傷を負い、家々は破壊され、大切にしてきた財産や貴重な品々も瞬時に失います。それを悲しむいとまさえありません。

しかし、そうした災害が起きるたびに、私は仏陀の三つの教えを思い起こします。一つ目は、「念」。すなわち、私たちの身の回りで起きることの真相をつかんで自覚し、気づくこと。二つ目は、「定」。最も大切な真相に集中出来ること。そして三つ目は、「智慧」。すなわち災害がもたらしている物的、人的、さらには人々の心にもたらしているものは何かを見抜く。これらのことが出来れば、私たちは災害がもたらすさまざまな苦難から脱却することが出来ると仏陀は教えているのではないでしょうか。

二〇一一年は、幾つもの国々が自然災害に直面した年でした。私の国タイでは大洪水が押し寄せ、日本では大地震と大津波に見

舞われました。多くの命が失われ、家や働き場など人々が築き上げてきたものが広大な範囲と規模にわたって破壊されました。そして人々の間に、なぜこんな恐ろしい、悲惨なことが起きてしまったのかとの疑念を生じさせました。

この疑念に対しては、消極的な答えと積極的な答えの二つがあろうと思います。　消極的で否定的な答えは、これらの災害は、罪深き人間に天が罰を下したのだという考えです。一方、積極的な答えとは、これらの災害は私たち人間の力を試す機会だと受け止める考えです。数え切れないほど多くの人々が一連の自然災害で深刻な苦難や悲しみを経験し、その苦しみは今も続いていますが、それにもかかわらず被災者の方々は「念」と「定」の気持ちを失わず、復興と自立の努力を続けておられます。そのご努力を拝見していると、きっと多くの困難を克服されて、人間としての新たな叡智を達成されるに違いないと思えてなりません。

こうした実践を見つめていると、すべての宗教の指導者が、「四無量心」を唱えた仏陀の弟子であることは間違いないと言えるでしょう。

「四無量心」とは「慈悲喜捨」の四つの教えです。一つ目の「慈しみ」とは、すべての生あるものに対して、深く慈しむ心を持つこと。二つ目の「悲しみ」は、すべての生きとし生けるものに共感し、共苦する思いやりの心を持つこと。三つ目の「喜び」は、すべての人々の心の幸せを見て、これを妬まず、共に喜ぶ心を持つこと。そして四つ目の「捨」とは心の平静のことで、あらゆる執着、我執を捨てて自由となる心を持つこと。すなわち、過度に喜び過ぎたり、悲しみ過ぎたりせずに心を平静に保つよう心がけることです。たとえ最悪の状況に直面し、人知ではコントロール出来ないような事態に直面しても、この教えを身につけておれば、人々は心を和らげ、落ち着いて行動できるのです。

だからこそ、この四つの教えは、危機的な困難にさらされている時に、人々の心を癒し、社会に安らぎと平和を取り戻すための、極めて大切な教えであると思います。

東日本大震災からちょうど一年経った二〇一二年三月十一日、私はあらためて「慈しみ」に始まる仏陀の教えを思い起こしていました。大震災が起き、大津波が襲った時、世界中の国々の人々が東日本に関心を寄せ、さまざまな救援、支援活動を行ったではありませんか。

大災害が発生すると、天台宗の皆さま方は、ふだん瞑想の場としていたホールや施設を直ちに開放して、近いところはもちろん、遠いところからも被災された人々を受け入れられたではありませんか。それらの避難所は、あなたは受け入れる、あなたは受け入れないといった差別は一切なく、すべての人を受け入れられたではありませんか。

私たちは、大洪水が起きたタイでも同じような光景を目にすることが出来ました。宗派を超えて、食べ物や日用品を被災者のもとに届け合いました。日本やタイでのこうした行いは、次の時代を担う若者たちにもっともっと伝え、アピールしてよいと思います。

天台宗の皆さま、四半世紀に及ぶ比叡山宗教サミットの長い、長いご努力、本当にご苦労さまです。そして今回の記念すべき会議に国内外からご出席された皆さまに、あらためて心から敬意を表させていただきます。この会議が、アジアと世界の国々に生きる人々の力を束ね、協力し合い、絆を結んで共に生きてゆく契機

になるであろうと、私は固く信じております。

ご静聴、ありがとうございました。

【杉谷】 ありがとうございました。

宗教間の連帯、また国際的な支援があちこちの災害に寄せられ、特に東日本大震災においても世界各地から支援の手が差し伸べられました。次は、震災に襲われた宮城県において諸宗教をおまとめになって、救援活動を率先されてきた竹駒神社宮司、宮城県宗教法人連絡協議会副会長の千葉博男先生にスピーチをお願いいたします。

被災者に宗教者は如何に向き合ってきたか

宮城県宗教法人連絡協議会副会長
宮城県神社庁長・竹駒神社宮司
千葉博男師

昨年の三・一一東日本大震災で最も被害の大きかった宮城県の宗教者の一人として、神社界と私が関係する宗教団体での諸活動の一端について、宮城県神社庁長そして竹駒神社宮司として報告させていただきます。

まず、宮城県宗教法人連絡協議会ですが、県内約二千の宗教法人が加盟している団体で、伝統宗教と新宗教がそれぞれの宗派教派を超えて、会員相互の研鑽と交流とを目的として諸活動を続けております。

今回の大震災で、身元不明者の遺体が仙台市の葛岡斎場で弔われることなく火葬に伏せられていることに心痛めた仙台仏教界が「無料読経奉仕」を始めました。さらに斎場二階ロビーで、仙台キリスト教連合を始めとして当連絡協議会に加盟する宗教者有志が連携し遺族の話を聞く「心の相談室」を設け、遺族の無念の思いと不安を和らげる取り組みを始めました。また内容によっては法律、医療などは専門家に取り次ぐことも致しました。この心の相談室設置後、これを常設し継続しようとの声が挙がり、五月には宮城県宗教法人連絡協議会が後援団体となり、心の相談室は宗教者有志の会として衣替えを致しました。

その活動内容は、自主的に活動する六つのグループで展開されております。

まず一つは、昨年の四月以降毎月十一日、仙台市の葛岡斎場にある身元不明者遺体安置所に於いて、各宗教・宗派の宗教者が持ち回りで、それぞれの教義に基づき弔いの儀礼を行うチーム。次に昨年十月より固定電話二台を設置し、毎週水・日曜日、宗教者が対応する電話相談のチーム。三つ目は、僧侶・牧師などの宗教者が中心となって、直接被災地の仮設住宅等に赴き、移動式喫茶店「カフェ・デ・モンク」を催して、お茶とケーキを提供しながら被災者の「心の声」「心の叫び」を聴く活動を展開しているチーム。四つ目は、悩みを抱えて苦しみ迷っている方が一歩前に踏み出すきっかけとなるように、電波を通じてより多くの人に宗教界や各界の著名人からの支援の言葉、メッセージを伝えるFM放送ラジオ「カフェ・デ・モンク」を企画製作するグループ。五つ目は、公開講演会、被災者支援講演会を企画・実施するグループ。

六つ目は、（財）東北ディアコニアに集約された宗教団体等からの寄附により、東北大学に「実践宗教学」講座を設けたことを受け、心の相談室に寄附講座運営委員会を設け、学外の意見も反映させながら講座の充実を図り、また人々の悲嘆や不安に寄り添う「臨床宗教師」の育成を進めることとなりました。これら心の相談室の活動を実現できたのは、各宗派のご寄付、さらには世界宗教者平和会議からの多大なご寄付の賜物であります。

さて、私が所属する宮城県神社庁の対応といたしましては、全国神社関係者から寄せられた災害支援物資の被災地搬送はもとより、神社本庁が全国神社庁を通じて取り纏められた多額の義捐金等をもとに、流失・大破した神社跡地に社名を記した標柱を立てて、当面の間被災者の祈りの場とした祭祀施設「御柱（みはしら）」の設置。さらに仮設住宅に入居された被災家庭に対して伊勢神宮より提供された簡易神棚と神宮大麻の無償頒布を通じ家庭祭祀の復活等の災害支援策を講じて参りました。

また、御社殿が壊滅的な被害を受けた五十一社については氏子からの支援も困難なため、神社の再建を支援するため、神社本庁からの復興支援金と伊勢神宮から提供される檜木等の間伐材を活用した社殿再建計画を取り纏め、現在、第一次として十月から十一月にかけて六棟の社殿再建工事を行う予定であります。この社殿はわずか三坪程度の仮社殿ですが、氏子の人達が心願成就を始めさまざまな祈願をする祭場として、更に祭典や多年に亘り地元に伝わる伝統芸能等が執り行われることにより、再び氏子の絆が深まり、ひいては故郷再生へと繋がる道標になれば、その意義は大きいものと存じます。

今後も引き続き、第二次申請を受け付け、氏子地域のコミュニティ社会構築を進める上でも、一棟でも多くの社殿再建が果たされるよう力を尽くして参ります。

また、各宗派教団に於いて物故者の追悼儀式が執り行われてきましたが、特に宮城県宗教法人連絡協議会では昨年、百日合同慰霊祭、さらに今年三月九日には「東日本大震災合同慰霊祭」を名取市閖上の日和山で各宗派代表が参列して御魂の平安を祈りました。

更に大震災発生より一年となる今年三月十一日、神社本庁主催によります「東日本大震災物故者慰霊祭」が遺族を始め神社関係者多数参列のもと、石巻市の日和山公園で田中恆清神社本庁総長が斎主となり執り行われました。

また、日本財団、日本文化興隆財団の協力のもと、大津波で流失した宮城県山元町鎮座の八重垣神社で心の故郷鎮守の杜再生のための植樹祭がボランティア五百名が参加して執り行われ、引き続き鎮守の杜流失神社境内で継続して実施する予定であります。

私が宮司を努める竹駒神社では、震災直後、施設を開放し避難者の受け入れを始め支援物資の被災地搬送、各地避難所での炊き出しは申すまでもなく、地元岩沼市内の仮設住宅での生活を余儀なくされている方々約二百名を招待して、心の安寧と一日も早い復興を祈念して「雅楽の夕べ」を昨年九月に開催しましたが、神社庁教化部も各仮設住宅で同様の「雅楽の夕べ」を実施し、被災者から好評を博しております。

この「雅楽の夕べ」は、今年は隣接の名取市において来る十月、仮設住宅にお住まいの方々を招き、名取市震災復興部生活再建支援課主催という形を取り、竹駒神社の雅楽会奉仕による演奏会を行う予定で、仮設住宅で孤立がちな人々に、千二百年の伝統ある

雅楽、舞楽を通じ心の安らぎを与えることができればと日々稽古に励んでおります。

この未曾有の大震災により甚大なる被害を受けた故郷を復興することは、決して容易なことではありませんが、私共宗教者は各宗派教派の教義を超えて互助共生の精神をもって被災者の心に寄り添い、一歩一歩復興への歩みを進めていく覚悟であります。

結びにあたり、世界平和達成のため比叡山での宗教者平和の祈りを通じ、大いなる成果と発展を心からお祈り申し上げます。

【杉谷】 ありがとうございました。

千葉宮司さんには具体的な救援活動等にも触れていただきました。震災においては物的な支援と同時に心の打撃が大きい人々に対して心の救済、そういう二本柱が救援活動の中心になろうかと思います。

そういう救援活動を通じて特にいろいろどういうところに問題点があったか、どういう点は非常にうまくいったか、物的な支援、心の支援等について、例えば行政府、政府や地方行政府との連携がうまくいったり、あるいは非常に難しい問題が出てきたりと、そのような体験もいろいろあろうかと思います。物心の両面にわたる救援の中で具体的にどういう問題があったか。また、どのように解決していったか。そういうことについてお話をさらに伺えればありがたいと思います。

それでは、クワトルッチさん、よろしくお願いします。

【クワトルッチ】 二つののポイントがあります。

苦悩している被災者を私たちは助けなければいけない。また、連帯の心を持って物質的な支援をしなければなりません。そのためには政治、あるいは市民社会と共に宗教が加わることで相乗効果が生まれます。

その相乗効果が出せなければ、いろいろな機会が失われます。ここ十年に過激な自然災害がたくさん起こりました。そういう場

合、物質的にもまた精神的にも、被災者を助けなければなりません。同時に、精神面でのサポートがなければうまくいかないのです。

被災者の方々にはただちに洋服が必要です。でもそれだけではなくて、友情や希望が必要です。それがなければ、誰も生きていくことができません。被災者の方々がただ生き残るのではなく、これからも実際に生きていくために、それらは不可欠のものです。

私たちはお金に過剰な信頼を寄せ過ぎています。お金はそんなに価値があるものでしょうか。お金がなくても、宗教指導者にはできることがあります。逆にお金だけあっても、精神的なものがなければうまくはいきません。

一つの集落を人間的なものにすることができれば、世界そのものを人間的なものにできるでしょう。

聖エジディオ共同体では、次の集いを九月にサラエボで開きます。これは紛争から二十年ということで開くのです。「将来のために共に生きる」というのがテーマです。その中のパネルの一つに「人間を見つけるために神を探そう」というテーマがあります。共に一緒にやっていくために、人間を再び見つけるために神を探そうというテーマで議論をするんですが、そういう意味で私たち宗教指導者には果たせる役割があると思います。

【杉谷】 宗教者の果たすべき役割についてお話をいただきました。

続いて、学誠さん、いかがでしょうか。中国においての四川の大地震について、具体的にどのような救援が佛教協会として行われてきたか。また、どういう点で難しい壁にぶつかったことがあるか。そんなことをご紹介いただきたいと思います。

【学誠】 二〇〇八年には我が国の四川省におきまして大きな地震がありました。そのときには全日本仏教会をはじめ、各国が心のこもった支援活動をしてくださいまして、誠に感謝の気持ちでいっぱいです。

去年の三月十一日に東日本大震災が起きたときには、我が中国佛教協会としては伝印会長が団を率いて日本国に来ました。そのときには東京と京都という二つの場所で追悼法要を行いました。また、中国佛教協会としても募金をいたしました。

大震災、大災害が起これば、いかに支援活動を展開していくか、またいかに人々を救うかという気持ちは、どんな宗教でも同じではないかと思われます。

大震災が起きた場合には、けが人、そして地震で生き埋めになった人々を一刻も早く救い出し、病院まで運ぶことが急務です。また、犠牲になられた人々の慰霊を荘厳にすべきでしょう。

被災地の人々の不安や、心の傷を払拭するための努力も必要です。特にお年寄りの方、また子供たちには特別な思いやりを寄せる必要があります。各宗教は信者に呼びかけ、救援活動を展開すべきです。

私が住職をしている北京龍泉寺には、北京仁愛基金会があります。四川大地震の時には基金会が十七ヶ所の小学校をつくりました。また北京の学校の先生たちに呼びかけ、被災地域の小学校、中学校の先生たちに地震についての訓練を行いました。更に、心理的なリハビリもしました。中国政府からは、その時の救援活動により貢献賞を授与されています。

宗教の大きな財産は、思いやりの精神、そして慈愛の精神、信者の人々だと思います。

【杉谷】 今、非常に貴重な具体的体験のお話もいただきました。先ほどクワトルッチさんのお話にも、希望を与えなければいけない、生きる希望というものが大事である、というお話がありました。

更にユスフ・ユルドゥルム氏からは、いわゆる信仰コミュニティを被災地域に確立しなければいけないというようなお話もございました。具体的に、信仰コミュニティというのは、今ある教会というかムスリムの教会の組織とは別に、何かおつくりになるのか。どういうような意味合いか、もう少し具体的にご説明をいただければと思います。

【ユルドゥルム】 誰もが信仰を持っております。イスラームであれキリスト教であれ仏教であれ、人々は何かを信仰しなければ生きていけません。そして、それによって感情を共有することができます。

自然災害があった場合には、思いやりを示すことができます。食品や衣服など被災地に必要なものを送ることができます。しかし、父や母、夫や妻、あるいは兄弟姉妹を亡くした人に対しては、それだけがニーズではないわけです。

私どもの組織では、精神的ななぐさめを与えることを心がけています。これが地元の宗教指導者の役割ではないかと思うのです。地元の宗教指導者は、地域社会に対して強い力を持っています。また地域社会は宗教指導者に非常な尊敬を寄せています。地元の宗教指導者は、被災者がより快適に過ごせるようにすべきです。

トルコの東部で地震があった時に、政府もＮＧＯも地震から復興するためにいろいろな人が様々なことを行いました。私どもの団体組織は、地元の指導者と協力をし、被災者が孤立して孤独の中に生きるのではなく、そのコミュニティにおいて神を信じ、神が何らかの形で助けてくれると信じることができれば、生活はより快適なものになると指導しました。そういう意味で信仰コミュニティという言い方をしたわけです。

【杉谷】 ありがとうございました。

宗教者が勇気、希望を与えていく。これは非常に重要なことであろうかと思います。

もう一つ、震災被害について、何よりも大きな敵と言ってはおかしいんですが、そういうものがあるのではないかと思います。それは何かと申しますと、忘れるということです。そういう事件があった、大震災があった。時がたつと当初の救援、支援の心が薄らいで、だんだん被災を受けていない人々の心の中から被災に苦しんでいる方を忘れていく。これは本当に重要な問題だと思います。

これを防いでいくにはどうしたらいいか。そういうことについてプラティープ・ウンソンタム・秦さん、何かお考えがあったら教えていただきたいと思います。

【秦】 我々が災害の備えとして何ができるのか、社会のために、国のために、あるいはコミュニティに対して何ができるのかということを考えますと、災害に対応できる人々をどのように訓練す

るかということです。

また、新しい文化をつくり出していく必要もあるでしょう。隣の人を愛し、慈しみ、思いやるという新しい文化を作り出すことです。

例えばタイでは、七年前に津波と洪水がありした。愛する人を失った、また財産も失ってしまった人々は、心の傷（トラウマ）を抱えています。彼らは何かおしゃべりをする人、友達になれる人、自分の悲しみを分かち合える人を必要としています。

タイでは仮設住宅がコミュニティになりました。お互いの住宅が向き合うように建てられたのです。それは仮設住宅に住む人々がお隣の人に、「こんにちは、きょうは体の調子はどう？」ということを互いに話しかけられるようにするためでした。心の痛みをいやす会話ができる、誰かと話を分かち合うことができるためにそうしたのです。

タイの津波の際には、ボランティアの訓練を行いました。電力、ガス、水などのライフラインが壊滅した時に、どのように人々に対応するのか。負傷した人をどうするのか等々を訓練して、被災地へ送り出しました。

我々は生き抜いていかなければいけません。生活で起こったことを乗り越えて、幸せに過ごしていく、そのために訓練が必要だということです。

【杉谷】 ありがとうございました。

忘れないということ。災害に対して訓練をする。これは起こってくる災害に対しての訓練であると同時に、災害を忘れない。それが単に被災者を物的に救援する、けがをした人等を救済するだけでなくて、前向きに生きていく、希望を持って生きる、そういう生き方の訓練も必要であるというようなお話をいただきました。

これで最後になりますけれども、千葉宮司さんにお尋ねします。被災地の現場におられて、被災地以外の方々の記憶が薄れていく。大変切ないことであろうかと思いますけれども、そういうことを防止するというんでしょうか、何か発信をしていかなければならない。そういうようなこともお考えかと思います。

【千葉】 仮設住宅に入っておられる人たちが今、大変窮屈な生活をしておられます。そういう人たちのためのコミュニティ社会をつくるということが、今一番大事だと思っています。

今、家を流された方々がたくさんいらっしゃいますけれども、神社界ではそういった方々に家庭での祈りの場を提供するために神棚、それからお伊勢さんの御神符を無償で提供しております。日々家庭の中で祈りをささげるということを復活させていくべく、取り組んでいます。

神社界だけで申しますと、宮城県の場合は六七〇社くらい被害がございまして、そのうち完全に流されたり壊れたのが五十一社あるのです。ですから我々としては、それをまず復興することが宗教者としての使命だと思っております。幸い、神社本庁やお伊勢さんからいろんなご支援をいただいて、今再建をしている最中です。やはり被災者にとっては祈りの場を早く復活してあげるということが大事でしょう。崇敬者のお話を承っておりますと、やっぱり信仰を持っている人は立ち直りが早いのです。自分が神様を信じて祈りをささげてお誓いをする。そのお誓いが信仰の力となって復活に多いに役立っています。

石巻にも冷凍設備が全部流されてだめになった会社がありますけれども、そこの信者さんもやはり私どものお宮に来てお祈りをささげ、勇気をいただきましたということで素早く復活しています。

そういう意味では、他人を頼るだけじゃなく、自分もみずから努力をして、神様のご加護を信じて頑張っていくということが、私は一番大事だと思っております。

我々はとにかく神社の復活と、それから被災された氏子の方々が復興した神社に集まってコミュニティ社会をお互いに確認し合う、そのことでお互いにまた結束が強まっていくのだろうと思っております。

【杉谷】 ありがとうございました。

千葉先生のお話もある意味では信仰コミュニティ、先ほどのユルドゥルムさんがおっしゃったことにも相通じますけれども、特に日本において、東京や大都市においては盛んに無縁社会、人が亡くなっても気がつかないとか、亡くなっても家族が誰も弔いに来ないとか、人と人とのつながりが非常に希薄になっているといわれます。

その中で、東日本大震災において、東北地方における人と人とのつながりや絆の強さ、そういうものが再認識され、都会の人間が改めて人と絆が大切だということを思い出し、知らされたというようなお話を聞きます。

その根本にあるのは、今ご紹介いただきました、人を謙虚にし、さらに希望と勇気をいただける祈りである。そういうお話も出ました。そして、それこそが宗教者の原点であり、活動の源泉であろうかと思います。

ちょうど佳境になってきたところで時間が来てしまいました。以上で「被災者に宗教者は如何に向き合ってきたか」シンポジウムを閉じさせていただきます。

ご協力大変ありがとうございました。（拍手）

緊急報告

シリアにおける平和へのロードマップ

シリア正教アレッポ大主教　マー・グレゴリオス・イブラヒム

豊かな歴史と文化を誇り、複数の異なる信条の人たちが健全に暮らし、共存の模範として世界に知られている国であった祖国シリアが二〇一二年三月中旬以降から現在に至るまで、前例のない混乱状態に陥っています。事の始まりは平和的な抗議活動でした。それが徐々に拡大して、幾重にも重なった暴力闘争へと発展していきました。大多数の無防備な国民は大きな打撃を受けています。

シリアの一部の高官による容認できない不正行為が始まったのは一九八〇年代のことです。そうした不正行為は長年にわたって続けられ、野放しにされた不正行為は広範な腐敗を招き、徐々に広がって、シリアの多くの省庁を蝕んでいきました。当然のことながら、こうした状況にシリア市民は深く憂慮することとなりました。根深く続く耐えかねるほどの腐敗にこれまで控えめだった民衆は怒り、最終的に抗議活動に発展しました。

発端は一部の治安部隊が下した専横な決定に対する反発でした。シリア市民は、これらの治安部隊の考え方と行動を新たな弾圧の波と考えました。変革のうねりが生じ、これは「アラブの春」と呼ばれるようになり、ドミノ効果のようにチュニジア、エジプト、リビア、イエメンへと瞬く間に波及していきました。シリア国民はこうした変革の波がもたらす成果を簡単に考えていました。「アラブの春」はシリア社会の腐敗や厄災を一掃し、ひいては民衆の抗議デモを不要にする有効な手段となり得ると考えていました。

最初に火の手が上がったのはヨルダンとの国境近くにあるダラでした。次にその火はシリア中心部の各都市を不安定化し、その後、沿岸都市へと飛び火しました。重大な暴力行為は最初、ハマで発生しました。ハマでは一九八〇年代にも暴動が起き、絶望的な不安定化を招いたことがありました。この不安定化はまもなくシリアの中心である古都ホムス（エメサ）へと波及しました。ホムスでは特定の人物を狙った殺人、暗殺、誘拐、襲撃、略奪、政府建物や公益事業設備への放火が日常茶飯事となりました。こうした暴力行為や大混乱はホムスの人口の基本構造と古代からの共存を崩壊させました。宗教的な扇動と強制退去によりホムスで平和に暮らしていた住民は住み慣れた土地を離れざるをえなくなりました。ホムスはゴーストタウンと化し、住民を失った多くの地区は荒れ果て、廃墟となりました。これらの地区では七つもの歴史あるキリスト教会を含め、多くの礼拝堂が荒廃しました。何千という人たちが家を失い、その多くは医療や人道援助を早急かつ切実に必要としているにもかかわらず、供給は十分ではありません。

七月二〇日以降はシリアの他の都市でも暴力行為が始まりました。シリアの住民が将来どうなるのかを心配して私たちが日夜話し合ったアレッポの地も攻撃を受けました。

抗議運動によりシリアの社会は異常事態に陥りました。以下に述べるような背筋が寒くなるような数多くのシナリオが様々な政治論

議の場で率直に議論され始めました。

一　内戦

宗教、民族、文化、言語が異なっていても調和を維持していた一つの国の国民がそれぞれに自らが大切にする宗教や文化に忠誠を尽くすことにより宗派間や派閥間といった次元で内戦。これまで国民はシリアと呼ばれる一つの国土で何世代にもわたって生きてきました。

二　国連による制裁

国連の指揮の下で課せられる国際的制裁は、現政権よりも国民のほうに多くの痛手を与えます。

三　軍事介入

国連安全保障理事会の下での軍事介入は混乱と混迷を終焉させる試みですが、今日のシリアでは混乱や混迷はさらに広がっています。

四　国家の崩壊

シリアという国家を多くの小さな組織体に分断することによって国家の存立を脅かす悪夢のようなシナリオです。シリアの社会はキリスト教徒、イスラーム教徒、アラブ人、クルド人で構成され、かつては多様な一つの社会のなかで共存し、資源を共有し、国の発展と繁栄のために努力していました。それが宗教、民族、文化、言語の違いによって区分けされようとしています。

この大混乱はシリア国民がそれぞれの宗派や民族に対する忠誠心に基づいて考え、認識し、洞察した結果であることは誰もが認めるところです。しかし、全てのシリア国民は祖国としてのシリアの統一を維持したいということでは意見が一致しているのです。また、民衆の普遍的な共通のビジョンは自由を拡大し、多元的な文化、宗教、宗派、教義を豊かに調和させることです。シリア国民は信仰と選択における自由の枠を広げて、尊厳を取り戻し、公民権の概念を確立したいと考えています。社会的正義、法の支配、市民社会、統一、共存を求めています。シリア国民の誰もが協力し合って、国家を形成している絆を蝕み、国家統一の概念を打ち壊す無秩序や無政府状態を蔓延させようとする人たちに抵抗していこうと考えています。

シリアのさらなる流血を食い止めるための解決策はあるのでしょうか。シリアでは二〇二一年七月十八日の大虐殺による犠牲者を含め、これまでの殉難者の数は三万人を超えています。誰ひとりとして安全を保障されていないし、悪化する一方の暴力から逃れることはできません。

この社会的な危機はシリアの内部における努力に外部からの協力が加われば解決できるでしょうか。全ての党派が互いに容認できる解決策はあるのでしょうか。筋が通っていて、妥当で、効果的で、抗議運動の根本的原因に対処でき、法の役割を有効にし、不安な状況を緩和し、治安と安全と安定性をもたらす解決策はあるのでしょうか。

これまでのところ、シリアに平和と安定性を取り戻すための最も重要な努力はコフィ・アナン氏による国際的イニシアチブだけです。しかしながら、この努力は功を奏していると言えるほどの効果は未だあげていません。アナン氏のイニシアチブでは以下のことを実施する必要があります。

第一に、シリアで交戦中の党派間の永続的な停戦を実現させ、治安を回復し、シリア国民の日常を正常化することです。

第二に、特に国際的な援助組織や機関による援助が現在届いてい

ない地域に、必要とされている人道援助を円滑かつ速やかに浸透させることができるようにしなければなりません。赤十字や赤新月社は、切実に必要とされている人道援助と救済を必要としている全ての人と全ての地域に提供できるようにしなければなりません。人道的なニーズは膨大な範囲に及びます。

第三に、国内の別の地域に強制的に移住させられたか、あるいは国外に強制退去させられた全ての市民が故郷に帰ることができるようにすることです。

第四に、交戦している党派を交渉のテーブルに着かせなければなりません。こうした交渉にはあらゆる領域のシリア国民を巻き込んでいくべきです。シリア内外にいる反対派の代表も参加させるべきです。かかる交渉の主な目的は、シリアの社会を抑圧している悪の手からシリアを自由にすることです。

交渉が成功して、シリアが平和と安定を取り戻すための新しい方程式ができればと願っています。モザイク画のように多数の宗派や民族で構成されるシリアのあらゆる領域の代表が本国で一堂に会する国家会議の実現を願っています。こうした会議が実現すれば、シリアは次の段階に進むことができるでしょう。うまくいけば、このような国家レベルの重要な調停イニシアチブにより、シリアで交戦中の党派間に和議がもたらされるでしょう。

こうした国家会議は次のような優先事項を実現する役割を担うべきです。

一　全ての市民の平等な権利を保証するための憲法原則を策定する。

二　シリアの今後の国内政策ならびに対外政策を策定する。

三　危機的状況がもたらした望ましくない結果に対処する。例えば、分裂している軍を再編成して統合を回復するなど。

四　過去の過ちを二度と繰り返さないようにするためにシリアの治安部隊の行動規範を確立する。

五　あらゆることのなかで最も重要なこととして、全ての市民間に信頼と互いに対する尊敬の念を回復させる。

国家会議はシリア国内ならびに国外にいる反対派を含め、全ての党派を受け入れる国家統一政府を実現する責任があります。

この政府の最重要タスクは以下であるべきです。

一　新しい国会のために自由で公正な選挙が行なわれるようにする。

二　個人、政党、宗教団体の覇権の概念を排除し、多くのアラブ諸国で模範となるような近代的で恒久的な憲法を策定するための専門委員会を設立する。

三　新生シリアの政治への参加を規制するため、政党に関する法律を新たに定める。

四　シリアの利益を守り、シリアを安全で安定し安心できる状態に、そして平和で民主主義的な状態に戻すことができる指導者としての新しい大統領を新憲法により選挙で選ぶことができるように準備する。

最後に誠実で高潔な全てのシリア国民から世界各地の平和を愛する人たち、特に比叡山のこの集いにご参会の皆様にお願いがあります。シリアの流血を食い止めるためにご助力ください。シリアとシリア国民に平和と繁栄と尊厳と安らぎをもたらすために力を貸してください。

二〇一二年八月三日　京都にて

F O R U M

フォーラム

テーマ

原発事故が提起した エネルギー問題と宗教者の立場

8月4日(土)9時30分～11時30分
国立京都国際会館

フォーラム

原発事故が提起した エネルギー問題と宗教者の立場

（文中敬称略）

FORUM

◎パネリスト

マイケル・イプグレイブ師
（英国国教会ウーリッジ教区主教・カンタベリー大主教特使）イギリス

ウィリアム・F・ベンドレー氏
（世界宗教者平和会議国際委員会事務総長）アメリカ

ディーン・シャムスディーン氏
（インドネシアイスラーム最高評議会副議長）インドネシア

パロップ・タイアリー氏
（世界仏教徒連盟事務総長）タイ

イヴォ・フーバー師
（バイエルン福音ルーテル教会エキュメニカル部門担当者）ドイツ

山崎龍明師
（武蔵野大学教授・浄土真宗本願寺派法善寺住職）日本

◎コーディネーター＝**吉澤健吉氏**
（京都新聞総合研究所特別理事）

◎司会＝**黒住宗道師**
（実行委員会会議部長）

【黒住】 ただいまよりフォーラムを始めさせていただきたいと思います。

本日のテーマは「原発事故が提起したエネルギー問題と宗教者の立場」です。これは宗教者として避けては通れない非常に重要なテーマだと思います。パネリストの皆様方のご発言をしっかりお聞きいただいて、皆様ご自身のこの問題に対するお考えにいかしていただきますようにお願いいたします。

本日のコーディネーターは京都新聞総合研究所特別理事の吉澤健吉様です。それでは吉澤様、よろしくお願いします。

【吉澤】 日本は福島の原子力発電所の事故から一年と五ヶ月がたちました。非常に悲惨な事故が起きて世界を震撼させ、そして日本でもこれまで我々が安全だと思ってきた原子力発電というものが、果たしてこれでよかったのかという大きな疑問を突きつけられました。きのうの梅原先生のご講演に「日本がとってきた原子力政策というのはもう一回、反省して見直さなければいけない、再生可能エネルギーにもっと真剣に取り組まなければいけない」というようなお話がありましたが、確かにそのとおりだと思います。

比叡山宗教サミットでこうした問題を取り上げるのも初めてです。特に原子力問題というのはナーバスな問題で、日本でも今、国論を二分する大きなテーマになっております。経済界や政治家のフォーラムではよくありますが、宗教指導者が集まって原発事故についてどう考え、宗教者がどういう役割を担わなければいけないかというフォーラムは非常に珍しいものです。

きょうは世界各国の宗教指導者にお集まりいただいて「原発事故が提起したエネルギー問題と宗教者の立場」というタイトルでお話をお聞きしたいと思います。最初にお話をいただき、その後またディスカッションをしていただきたいと思います。

まず最初に、イギリス国教会ウーリッジ教区の主教様でいらっしゃいますマイケル・イプグレイブ様からご発言をいただきたいと思います。

三重の責務を果たすために

英国国教会ウーリッジ教区主教
カンタベリー大主教特使
マイケル・イプグレイブ師

ご紹介にあずかりましたマイケル・イプグレイブです。今日、このような場所で皆さんにお話しする機会をいただき、大変光栄に思っております。今日の私の話は次の三点に集約されるか

と思います。

まず、昨年の東日本大震災と津波、及び、その後の福島第一原子力発電所の危機に際して人々がとった反応についてお話しします。次に、このような状況で求められている宗教指導者とはどのようなものなのかを明らかにしたいと思います。その前に、まず最初に、そのようなリーダーシップが発揮される礎となる世界とはどのようなものなのかを手短にお話しします。

私は、キリスト教徒として、世界は全ての人々を育み、安心して住める家として神様によって創造されたことを信じております。そのような場所で、私たちは創造の摂理を敬う分別ある生き方をすることによって繁栄してきているのかもしれません。このような世界像は、私たちの前途にある理想的な舞台であり、私たちが目指すべきゴールです。そのような理想の地は現在私たちが生きている世界においては、まだ実現していないかもしれませんが、イエス・キリストの教えのなかには、平和と正義と調和の神の御国が訪れるという確かな誓約があります。全ての人々はその御国の世界で真の我が家に暮らせることになるのです。

私はキリスト教的な言葉づかいをしてきましたが、全ての人々が安全に暮らすための家としての世界観は、他の宗教にも当てはまります。東北地方の津波による被害の中心地である松島湾を見て、私は俳人松尾芭蕉が描写した言葉を思い出します。芭蕉は、「奥の細道」で次のように綴っています。「松島湾にはたくさんの島々がある。……まるで親が子や孫を抱いて可愛がっているように、小島を背負っている島もあり、小島を前に抱いている島もある」と。芭蕉は、人々を育み、守る家としての環境を人間の言葉として語っています。

人々はこの自然災害とエネルギー危機に対して、どのような反応をしてきたのでしょうか。

私は、三つのことが考えられると思います。それは、苦しみの体験、振り返りの動き、居場所を失ったときの根底にある感情です。

第一点目の苦しみの体験についてですが、人々は今回の災害後、ひどく苦しんできましたし、現在もその苦しみは続いています。津波によって、これまで住んでいた場所が壊滅的な被害を受けた人たちがいます。また、住居の被害は直接的にはなかったものの、原発事故によって、避難生活を余儀なくされている人たちもいます。大量の放射能を被爆することで私たちの身体にどのような影響が出るのか、今までのところ私たちには知らされていません。さらに、私たちは、今回の災害や、将来また起きるかもしれない災害がもたらす、かなりの精神的な苦痛や心の痛みも考えなければなりません。今回の災害は、自然災害と人的災害が結びついた恐ろしいものでした。このような苦痛は、将来が見えないことや専門的な知識がないことなどで、さらに大きくなっています。このような凄まじい状況下におかれているごく普通の日本人の勇気、尊厳それに団結力は世界中の人々に深く感銘を与えてきました。

第二に、今回の災害の重大性とその原因を省みる動きが次第に大きくなってきています。これは、心に大きな傷を残す出来事に対して自然にわき起こる反応であり、それぞれのケースに

よって異なった形として現れます。純粋な自然災害が発生すると、西欧の神学や哲学では、「神様はどのようなお考えにより、このような自然災害の発生をお許しになられたのでしょうか？」という問いを投げかけます。

しかし、今回の場合は、自然災害と人為的災害の区別をつけることはそれほど容易なことではありません。そのため、振り返りのプロセスは、抗議や疑いの様相を帯びてきています。会社側の不十分な対応や、原子力発電所をどこに設置するか、原子力そのものを廃止すべきか、エネルギーの消費レベルをどうするか、といったようなことに疑問を投げかけるようになりました。福島第一原子力発電所事故が起こったことで、これらの疑問が湧いてきましたが、このようなことは日本に限ったことではありません。

苦痛と不安の体験や疑いと抗議の動きの根底には、居場所を失ったときに心の奥底で感じる思いがあると私は思っています。松尾芭蕉の詩的な描写とは対照的に、被害に遭った人たちは、もはや、環境を、心から「わが家」と呼ぶことができるものとは感じられなくなってきています。私たちを喜んで受け入れ、育んでくれるような場所、安心感を与えてくれるような場所、とは感じられなくなっているのです。これまで暮らしてきた住まいと人々を結びつけるはずの「絆」を断絶させたのは、人間の行いによるものではないかと感じています。

こういった「居場所」を失ったときに感じる強い思いは、洋の東西を問わず、今、私たちの文化のなかで増大しています。そのような思いは、原子力について疑問を投げかけると同時に、広い意味ではエネルギー利用の問題を考えるきっかけともなっています。

こういった様々な反応のなかで、宗教指導者の役割は、どのようなものなのでしょうか。キリスト教の指導者は、イエス・キリストを手本としています。伝承的には、イエスの御業を預言者、聖職者、そして王の「三重の職務」として説明しています。聖職者として、イエスは、悩み苦しむ人々に手を差し伸べます。預言者としては、社会に真理を述べ伝えます。そして、王としては、この世界が神の御国に作り変えられることを示されます。このイエスの「三重の職務」は、福島で起こっている甚大な被害に真剣に取り組もうとする全ての宗教指導者に大きな意味を持つと思います。

聖職者として課された職務は、苦しんでいる人達に手を差し伸べること、家を失った人々に住まいを提供すること、亡くなられた方々に対してお祈りをすること、不安を抱える人々を元気づけること、また、社会の弱者に対して特別の愛情をもつことです。社会の弱者とは、例えば、精神的な問題を抱えている方、お年寄りや、少数グループの人達などです。エネルギー問題が緊急の課題となってきている現在、社会の末端にいる人々の苦しみはますます大きくなっています。そのような人々を助け、慰めることは我々の仕事です。我々宗教団体が果たす役割は、昨年の大災害に際して宗教団体が中心となって対応したたくさんの事例で、はっきりと示されています。

次に、預言者としての職務は、自然界における人間の「持ち場」というものを我々の社会に思い起こさせることです。そして、

国のエネルギー政策を問い掛けることも必要です。こういった問題は、場所が異なれば、問題も異なってくるでしょう。日本の原子力の問題は、イギリスの問題とは異なります。しかし、全てのどの状況においても、普段何気なく想定していること、期待していること、そして普段の生き方に対して疑問を投げかける必要があります。そういった問いかけは、社会や我々自身にとって、あまり好ましくない、厳しいものであるかもしれませんが、必要なことです。

最後に、王としての職務について話しますと、王国つまり御国の来訪の誓約というのは、キリスト教徒にとって、未来への希望です。どのような宗教においても、宗教には共有する希望の源があります。自然災害や人的災害に慄(おのの)き、またエネルギー危機に直面し、人々は、居場所を失ったと感じています。宗教指導者として、希望の姿を示すのが我々の役目です。世界とは、我々を育み、常に守ってくださる、本当の意味での「家」なのですから。

ご清聴ありがとうございました。

【吉澤】 イプグレイブ先生、どうもありがとうございました。

それでは引き続き、今度は世界宗教者平和会議国際委員会事務総長のベンドレーさんからお願いいたします。

原発事故のリスク許容は宗教的道徳的に許されない

世界宗教者平和会議国際委員会事務総長
ウィリアム・F・ベンドレー氏

はじめに、日本の方々に対する追悼の意を皆様と共有したいと思います。三月十一日の東日本大震災の直後に、地震と津波で壊滅した町を訪問したときのことです。私は、行方不明の夫や子供の写真を膝に乗せ、目の前で大変静かに、そして控えめに座っていた多くの女性に出会いました。その痛ましい姿を、決して忘れることはないでしょう。耐えがたい苦しみの中にいたこの女性たちに、私は、どういうわけか教えられ、慰められたのです。実際、全世界が、悲しみに満ちた目で、この計り知れない苦しみを見守っただけでなく、並はずれて高潔な日本人の精神を、驚きのまなざしで見つめ、誇りにさえ思いました。ですから、親愛なる日本の皆様、どうか私の純粋な称賛と尊敬の言葉を受け入れてください。

私に割り当てられたテーマは、福島原発事故の観点から見たエネルギー問題です。この点に関して、宗教指導者たちは何をすべきなのでしょう。これは大きなテーマですので、私にできるのは、ほんの幾つか意見を述べることだけなのです。

第一に、宗教指導者は、エネルギー問題の精神的・道徳的局

面に焦点を絞ることができます。私たちの慣習にはそれぞれ、精神的・道徳的な信頼性を培ってきた歴史があります。このような慣習は非常に貴重なものです。エネルギー問題と私たちの慣習をうまくかみ合せるには、専門的な問題を細部に渡って研究する必要があります。それでも、専門的な理解だけでは不十分です。私たちは、専門家としての役割を果たすだけでなく、精神的・道徳的な人間として行動することが求められます。しかし、エネルギーに関して賢明に行動するとはどういうことなのでしょう。精神的・道徳的な私たちの遺産の力を借りなければ、そのような行動はできそうにありません。

では、エネルギー・経済専門家と宗教指導者の共同委員会を構成するのが賢明でしょうか。それは、現在入手可能な最高の技術データがあればうまく行くかもしれませんし、本物の精神的・道徳的な言葉の中にある選択肢を投げ掛ける可能性もあります。そうなればおそらく、私たち全員の助けになるかもしれません。

最も基本的な言い方をすれば、皆にとって、現在のエネルギー抽出法が、人間をはじめとする生命の営みにおいて生じる自然のプロセスそのものを、どのように損ない、徐々に蝕んでいるのかを問う必要があるのです。原子力を利用する社会は、これまで起きている、そしてこれからも継続的に起きるであろう原発事故のリスクを許容することが、道徳的に許されるかどうかを自問しなければなりません。また、原発事故以上に、最大百万年に渡って未来の世代が管理しなければならない有毒廃棄物を発生させることが許容できるのでしょうか。

第二に、エネルギー問題に関する精神的・道徳的な局面を明確にするという課題の上に構築されるのは、より多くの人々を啓蒙するというさらなる課題である、ということが挙げられます。そこから、あらゆる宗教教団が、信徒とともに重要な役割を果たすことができるのです。さらに、複数の宗教が協力することにより、私たちはこの重要な課題において力を合わせ、メディアを関与させることができるのです。

重要なことは、精神的・道徳的な啓蒙とは、単に、政府や企業などの他者が何をすべきかということに留まるものではありません。関係者だけでなく、私たち一人一人がエネルギーを利用する上で何をすべきかということを謙虚に問うことから始めることも重要なのです。

第三に、共通の利害をもつ競合団体を一つにするという現実的な課題があります。これらの団体の中には、独自の狭い利害を有するもの、充分の資金を有するもの、政治権力にかなりのコネを持つものなどが存在します。これらの特別な利益団体と市民団体の間の利害の衝突を、私たちは度々経験しています。これほど多様な団体にとって「公平な土俵」となる公開討論の場を、誰が提供できるというのでしょう。おそらく宗教指導者なら、少なくともこのニーズに応える一翼は担えるのではないでしょうか。

しかし、正直に申しますと、充分な資金のある利益団体が、近視眼的な目的を達成した時には、ひどい落胆を感じます。政党が国民の利益よりも自分たちの生き残りを優先した時には、深い失望を感じます。そこで、とりわけ、私たちの宗教的遺産

から力を引き出す必要があるのです。では、比叡山の歴史にとって特に重要な宗教的遺産であり、大いに勇気づけられる例を引用して、締めくくりたいと思います。それは法華経薬草喩品第五の引用で、永遠の過去から永遠の未来に至るまで降り注ぐブッダの慈悲の心を語ったものです。

Going or coming, sitting or standing,(去来坐立)
I never get weary or downhearted.(終に疲厭せず)
I have nourished the whole world,(世間に充足すること)
Like the rain that enriches everywhere.(雨の普く潤すが如し)

Eminent and humble, high and low,(貴賤上下)
Precept-keepers and precept-breakers,(持戒毀戒)
Those of great character(威儀具足せる)
And those who are imperfect,(及び具足せざる)

Those of correct views and those of wrong views,(正見邪見)
Quick witted and dully witted,(利根鈍根)
I have the Dharma rain equally on all,(等しく法雨を雨らして)
Without sparing or neglecting any.(懈倦なし)

【吉澤】 ベンドレーさん、ありがとうございました。
次は、インドネシアのシャムスディーンさんにお願いします。

持続可能な安全技術の開発を奨励すべき

インドネシアイスラーム最高評議会副議長
ディーン・シャムスディーン氏

現在世界はエネルギー危機という重大な問題を抱えています。石油、ガス、石炭等が再生不能であるため、人類はエネルギー不足に直面しています。科学技術が進歩し、人類はエネルギーを大いに必要としています。原子力は電気への高い需要を満たすための代替エネルギーとして使われてきました。他のエネルギーや技術全般と同様に、原子力にも常にプラスとマイナスの両面が存在します。まさにこの人類の文明化による問題を克服することが我々の課題であり、それによりプラス面でマイナス面を克服することができます。この点において、宗教の果たすべき役割は何でしょうか？

エネルギーの安全保障と人類

エネルギーは、発展と日々の生活の燃料であり、エネルギー無くしてはいかなる活動も何一つ存在しえません。
人類の進歩により高まるエネルギー需要を満たさなければなりません。エネルギー需要は加速度的に増加しています。国際

エネルギー機関（ＩＥＡ）が出した「世界エネルギー展望二〇一一」によれば、短期的な経済的成長の見通しが不確実であるにも関わらず、「新政策シナリオ」はエネルギー需要が飛躍的に増え、二〇一〇年から二〇三五年までの間に約三十％増加するとしています。世界の人口は十七億人増加し、経済は年平均で三・五％成長し、エネルギー事業と移動性への一層高い需要が生まれると仮定しています。

この高いエネルギー需要を満たすために、エネルギーを最大限に開発することに科学技術の重点が置かれてきました。再生不能エネルギーの枯渇と再生可能エネルギーの開発により、代替の「クリーンで環境に優しい持続可能なエネルギー」を探し出す科学的取り組みが進められてきました。

福島における災害後の原子力の危険性への懸念

持続可能な代替エネルギー源として見られてきた原子力ですが、原子力については賛否両論の議論があります。

チェルノブイリや最近では福島での事故などが起きましたが、本来これらは未然に防ぐことが可能だったかもしれません。

二〇一二年七月二十三日に発表された最新の報告（東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会による最終報告書）では、福島の原子力発電所で起きた悲劇は、「人為的災害と結論づけることができるかもしれない」と述べられています。この報告書の中で、建設から非常事態の対応に至るまで、発電所の物理的構造はこの災害に耐えられる十分な強度がなく、業界はこの状況に対応しておらず、その結果一般市民を何の準備もないまま無防備な状態にさらすことになったと述べています。

原子力については、核の安全性と核の安全保障という二つの根本的な問題が未解決のままになっています。一つ目の核の安全性とは、予期せぬ状況や事態により認可されている原子力発電所の活動が放射性物質の放出に繋がる問題です。それは主に核そのものの問題や危険性に関係しています。二つ目は、非国家的集団が核やその他の放射性物質を危害を加えるため悪用することを見据えた、国際的な核の安全保障の問題です。これは主に、物質や施設への外的脅威に関係しています。

すなわち、核の安全と安全保障のリスクは非常に高く、最も安全で核技術の経験が高いと信じられている国でさえも、核災害が起きる危険にさらされているのです。

環境面においても、現代の技術を持ってしても使用済み核燃料の貯蔵は非常に危険を伴います。未来の世代への核の影響を考えなければなりません。

宗教指導者の役割は？

宗教には精神的、道徳的、そして倫理的な力があります。こうした力を通し、信仰を持つ人は、豊かで、平和で、意義深い人生をよりよく送れるのかもしれません。宗教指導者には、それぞれのコミュニティーがこうした価値観を実感できるよう導く責任があります。宗教的教義と説教により宗教コミュニティーを豊かで、平和で、意義深い人生へと動かす必要があります。イスラーム教の観点から、人間の最も重要な使命はこの地上において神の代理人になることです。それは人類は倫理的かつ道

徳的な文明を復活させ、発展させるための活動に従事しなければならないということです。決して破壊したり、有害となるものを作り出すための活動ではないのです。

原子力問題に関して、宗教指導者はal-amr bi al-ma、ruf wa al-nahy ʻan al-munkar（良いものを発展させ、悪いものは防ぐ）というイスラーム教の教理を取り上げてもよいかもしれません。そうすることで、宗教指導者は原子力が人類の生活に恩恵をもたらす限りは支持し、もし人類の生活を脅かす場合はそれを防ぐのです。

そのため、人類は現実から目を背けてはならないのです。原子力発電所の発展を含む科学技術上の難題でさえも、善処すべきなのです。原子力の開発はそれ自体の安全と人類の生活の安全を保証するものでなければなりません。宗教指導者は安全な技術の開発と意義ある持続可能な開発を奨励すべきです。そして再生可能で持続可能、かつ環境にやさしいエネルギー源への投資を支持するべきです。

よって宗教指導者は、グリーンエネルギーを用いて環境を守ろうということを訴える活動を始めるべきです。すなわち地球は次世代のものであり、我々は地球を彼らから借りているだけなのだからそれを守っていかなければならない。だからこそ安心で安全な原子力技術を開発すべきだ、ということです。

【吉澤】 シャムスディーンさん、ありがとうございました。

続きまして今度は、世界の仏教徒を代表いたしまして、世界仏教徒連盟事務総長、タイのパロップ・タイアリーさんにお願いしたいと思います。ではタイアリーさん、お願いいたします。

母なる自然と調和し核に対して「ノー」と言う

世界仏教徒連盟事務総長
パロップ・タイアリー氏

無数の痛ましい自然災害や人工災害を目の当たりにし、私たちは、「唯一無二の地球をより居住に適した慈愛深い場所にする」という信念のために、ここに集まっています。

振り返ってみれば、自然災害および、宗教対立、領土紛争、テロリズム、犯罪、生態学上の問題等の人工災害など、その一部を挙げるだけでも数多くある問題が、影のように身近に存在することを認識するのはそれほど難しくないでしょう。私たちが暮らすこの世界が非常に悪い状態であるのは明らかです。世界は、平和と調和をひどく必要としているのです。

私たちは、調和して暮らせていないだけではなく、無謀にも、世界の自然の調和を完全に乱しています。飽くことを知らない自分たちの要求や渇望を満たすために、自然を征服し、その天然資源を搾取しようとして、私たち自身の存在を支える正にその資源を破壊し、平和へと続く道のりを進む代わりに、皮肉にも、

意図的にその真逆のことを行っているように思われます。すなわち、平和への道から遠ざかっているのです。

私たちは常に、自分たちの発明を誇りに思ってきました。そしてそれ故、わずか六十年ほど前には、発展という名において、発電に原子炉を利用するという技術的勝利に祝杯をあげていました。数十年前には、原子力発電が、人間の無限の需要や貪欲さを満たすための最も良い解決法であると考えていました。ほどなくして、チェルノブイリ原子力発電所事故を目のあたりにし、その後、多くの原発事故が起きています。最近では、人類の技術的勝利が招いた結果が、福島原発事故によって嫌というほど証明されています。実際、私たちがこの脆弱な地球のはずれに暮らしているということを、どれほどの人がわかっているのでしょう。自然災害に対応するだけでも大変なことだというのに、その破壊力を増している人工災害の原因を作ることを、私たちが止めることはないのです。

一体私たちはどうしてしまったのでしょう。その答えは、私たちがまだ、自分自身を真に抑制、あるいは支配することができていないということなのです。過去数世紀に渡り、自然を征服するのに執拗な努力を行うことで手いっぱいで、自らを抑えるすべを学んで来なかったのです。自然の危機に対応するすべは学んできましたが、自らの行動や思考に潜む邪悪な本質に対処する方法は、充分に学んではいないのです。日常生活の物質的な側面を発達させるために科学技術を活用してはいても、自分自身の内面の発達には注意を払っていないのです。したがって、言い争い、憎み、略奪し、戦い、殺すことさえしてしまう私たちは、古代の野蛮人とそれほど変わらない存在ということになります。合理的な理由や知恵に訴えるべき時に、衝動的に行動してしまうのです。

混沌とし、予測不能で、ひどく混乱したこの私たちの世界では、物事は常に極端な方向に進んできました。人が極端論者になるのは、宗教の世界に限ったことではありません。日常生活のほぼ全ての側面で、結果的に極端論者になっているのです。人類の進歩という名において、母なる自然に恐ろしい被害を与えるほど極端に自然を搾取するために、科学技術を利用し、多くの生物の種を絶滅に追い込み、豊かな熱帯雨林を激減させ、毒性化学薬品で自分たちの井戸や小川、河川、海辺、海洋などを汚染し、大気を汚染し、成層圏の一部に被害をもたらしているのです。人類の肉体的および精神的な健康と動物の生存の両方が、深刻な危機に晒されています。これらの無節操な人間の行動の全てが、生活の質を向上させるための人類の進歩という名において行われているのです。

私たちは、科学技術における功績については充分過ぎるほど進歩していますが、平和の構築については、あまりにも遅れているのです。平和や自然の調和へと続く道をはっきりと見ることができるよう、真理の光を灯しましょう。自分自身と和し、隣人と和解し、そして世界中の人々と和を結びましょう。そして、それに加えて重要なのは、母なる自然と調和することなのです。核に対して「ノー」と言いましょう。そして革新的なエネルギー源を求めましょう。そうすれば、私たちは真の平和を手にするでしょう。それは正に本当の平和なのです。

三宝の祝福により、全人類が導かれ、守られるよう願っております。

【吉澤】 タイアリーさんの力強いご発言、ありがとうございました。

次に、ドイツ・バイエルン福音ルーテル教会エキュメニカル部門担当者のイヴォ・フーバー先生にお願いします。ドイツは脱原発に関しては世界の先端を行く国ですので、いいお話を聞けると思います。よろしくお願いいたします。

核物質半減期の責任を何世代にも負わせることはできない

バイエルン福音ルーテル教会
エキュメニカル部門担当者
イヴォ・フーバー師

福島の大惨事は、原子炉の事故がどのような壊滅的な結果をもたらすのか世界に知らしめました。自然の脅威の中では、限界ある人間がコントロールを失った時、引き起こされる結果には限界が見えません。原子炉における核反応で核物質が放出され、その一部の半減期は一万年を超えます。聖書の中では世代で物事を考えることは常ですが、ひとつの原発事故の後、何世代が自分の父親の罪を背負うことになるのかを言及するのは、この半減期の観点からほとんど不可能に近いのです。

福島の大惨事後、私たちの教会は繰り返し、人間の有限性と責任のほぼ無限性の間にある矛盾を指摘してきました。この責任の無限性は、原発事故の場合に限って言えるのみならず、それこそ通常の原子炉の運転で発生する、半減期の長い高レベル放射性廃棄物であるプルトニウムにもあります。ドイツでは実際のところ相当の時間、このような寿命の長い高レベル放射性廃棄物の最終処分場について、そしてまた私たちの後に続く百世代目であっても、このような廃棄物がどれほど危険なものかが認識できるように、どのように標識をつけておくのかという疑問について議論しています。

どんなハイレベルな技術をもってしても、あらゆる知識と良識をもってしても、マルティン・ルターの「すべての人は、罪を犯した」という言葉が適用されます。私たちは限界ある、過ちを犯す人間であり、あり続ける—されば私たちは、そういった限界のない責任を負うことができるのでしょうか。教会の代表者は、福島の大惨事の後、この問いを何度も繰り返しました。

高位の教会の代表は、ドイツとヨーロッパにおけるエネルギーの移行についての議論にも厳しく参与していますが、教会関係者の役割は、再生エネルギー源による供給は、私たちのライフスタイルを批判的に再考する心構えがあってこそ成功するのだという点を、繰り返し指摘することにあります。どこでもっと効率よくエネルギーを使うことができるか、どのエネルギーが本当に必要なのか、どこでより少なく、あるいは、どこが充

分か、あるいはもっと必要か？　エネルギーの移行における教会の役割はまた、厳しく建設的に、言うならば預言的な導きにあります。

希望の兆しで結びたいと思います。私が住んでいる街、ミュンヘンでは学生のための教会の寮があります。この寮に数年来、ある日本人の学生が住んでいます。福島の事故の少し前、この学生はもう何年も帰っていなかった日本へ初めて帰省しました。事故の二日前に日本へ帰って行ったのです。他の学生らがこの事故を耳にした時、どれほど心配したか容易に想像できることと思います。突然遠い福島の災害が、個人的な次元のものになったのです。彼は無事だろうか？混乱に巻き込まれてしまっていないだろうか？まだ生きているのだろうか？

日本から無事の知らせがあった時は、本当にほっとしました。しかし、ミュンヘンの学生たちはもっと何かしたいと考えました。あっという間に国際的な祈祷会が構成されました。何週間にもわたり毎晩、寮の学生たちは礼拝に集まり、祈り、そして情報を交換し、この寮に以前住んでいた世界中の多くの卒業生たちが、この祈祷会に参加しました。すべての参加者たちの間に強い絆が生まれ、信じられない大惨事の前に、もうまったく力なく立っているだけでなく、一緒にそれに立ち向かっていく、苦しみの中で一緒に強くなり、そして新しい力を得ようとする気持ちで結ばれました。それは多くの参加者たちにとって、ほとんど奇跡に近いものでした。

数週間前この寮では、日本から夏祭りにいらした方々をお迎えしましたが、この力強いサポートに対して日本からの感謝の意を伝えてくださり、私たちは本当にどれ程嬉しかったことでしょう。

大切なことは二点だと私は考えます。

第一に、教会の預言的声で、生活を変え、重い腰を上げて、私たちの手にゆだねられた神の創造物に対する責任をまず果たすことを、この地球上の人間に呼びかけること。この声は、大きく、特に模範的な自らのライフスタイルで裏付けされなければなりません。

第二に、大惨事の暗闇の中で勇気を失わず、新しい出発のための希望の光を灯すために、苦難の時の中で精神的なつながりを持つこと。このつながりは、切れることなくすべての善意ある人々を包み込まなければなりません。なぜなら私たち人間が、その大部分を自ら引き起こした大惨事から学べた教訓は、実行に移すことは難しく、持続力を必要とし、そして、神の創造物と私たち人間の環境の中で、平和を大切にする世界を望む力をもって支えなければならないからです。

【吉澤】　イヴォ・フーバーさん、ありがとうございます。特にミュンヘンの日本人の学生について心配して祈っていただいたことに感謝したいと思います。

それでは山崎先生にお願いします。山崎先生は武蔵野大学の教授で、浄土真宗本願寺派（西本願寺）のご住職でもいらっしゃいます。

原発は反いのち

武蔵野大学教授
浄土真宗本願寺派法善寺住職
山崎龍明師

二〇一一年三月十一日の東日本大震災はどのような言葉をもっても尽くせない大惨事でした。大自然の猛威の前で、なす術を知らない人間の無力さをあらためて痛感いたしました。

この大震災に対して「天罰」論を展開した人もいました。思いあがった、傲慢な人間に対する鉄槌であるというわけです。しかし私はこの考えに与するものでは有りません。「天罰」などではなく、天災と呼ばれるべきものだと私は考えます。悲しいかな、さまざまな縁の和合によって起こった、災害と見るのが正しい認識ではないでしょうか。そこから災害をのり越える智慧と力が与えられ、道が開かれる筈です。

経典に「花は咲く縁が集まって咲き、葉は散る縁が集まって散る。ひとり咲きひとり散るのではない」「すべてのものが、縁によって生じ、縁によって滅びるのは永遠不変の規則である。それ故、うつり変わり、つねにとどまらぬということは、天地の間に動くことのなきまことの道理であり、これは永久に変わらぬ」（『華厳経』）とあります。私の人生の中で大切な言葉となっています。

大地震、津波は文字通り天災です。しかし、原子力発電所の事故は、明らかに人災といわなければならない性質のものです。世界で起こる地震の一割が日本列島で起こるといわれ、四つのプレート上にある日本列島に、五十四基もの原発を作ったのは、いったい何のためなのでしょうか。安定的な電力供給という名に隠れた「金儲け」と考えるのは、あまりにも恣意的といわれるでしょうか。

原発はエネルギー問題である前に、経済の問題であった、ということです。「最も安全でクリーンな、二十一世紀のエネルギー」が、原発設置のキャッチフレーズでした。この言葉のもとに、企業（電力会社）、政府、官僚、学者、メディア、司法、そしてアメリカの国策等が一体となっておよそ五十年間「安全神話」をふりまきました。しかし、それが悉く誤りであったことが、明らかになりました。超多額な金銭をばらまいて人心を分断し、地域振興のための原発どころか、地域社会を根底から崩壊させたのが原発でした。このままでは原発立地県のこどもに未来はありません。炉の寿命が尽きて廃炉となり、やがて廃村となることは火を見るよりも明らかです。わたしたちおとなは、そのことに手を貸し続けてきたのです。

私事で恐縮ですが、私はかって高速増殖炉に、仏教の説く智慧と慈悲の象徴である文珠ボサツ、普賢ボサツのなまえをつけたとき深い怒りと悲しみを覚えました。電力供給と共に放射能をまき散らす危険なものにボサツの名をつけて得々としている人々、仏教者に強い違和感を否定することができませんでした。重ねて申します。原発はエネルギーの問題というよりも「お金

儲け」の道具、高度経済成長を支えるための基幹産業であったのです。私は世界の公害病といわれた水俣病と原発は、その根底において共通しているという知見を持っています。石油資源の二百万倍の効力という言葉のもとに、使用済み燃料の問題も考えず、次々と増設され列島中が、いや、世界中が放射能の危険にさらされています。今、世界は原発設置に向けて動いています。このままでは人類の未来はありません。

およそ五十年間、日本はエネルギー問題を放置し、企業利益のため「いのち」よりもお金を優先して原発設置を進めてきました。その愚は厳しく問われなければなりません。そして責任の所在も明確にしなければなりません。

私たち宗教者はこの悲惨な事実を正しく洞察し、信仰課題として担っていかなくてはなりません。世界中が脱原発社会へ向かって歩みを共にする日のくることを強く念じます。

【吉澤】 山崎先生、ありがとうございます。原発当事国の宗教者としての力強い発言に感謝したいと思います。

きょうのフォーラムは「原発事故が提起したエネルギー問題と宗教者の立場」というテーマです。ちなみに昨日は、自然災害に対して、起きたときに宗教者がどう寄り添っていくのかというのをテーマに話し合いをいたしました。今日は、この原発事故、それから新エネルギー、これからのエネルギーを一体どうすればよいのかがテーマになっております。

今六人の先生方のお話をお聞きしますと、基本的なトーンとしては、各宗教それぞれ言葉が違いますけれども、大自然の秩序を乱すようなエネルギーが果たしてよいのかということに、疑問を呈されていることは共通していると思います。

新エネルギーの問題にも触れていただきたいと思うのですが、福島の原発事故があって、その後、各国がいろいろ原発政策に対して変更を行うというニュースが世界中に流れました。

オーストラリアはちょうどギラード首相が「労働党としては原発を不要と考えている。オーストラリアに原子力産業をつくる考えはない」というふうに明言されました。イスラエルのネタニヤフ首相も、イスラエルにおける原子力発電所の建設計画の中止を発表されました。イタリアもこの全ての再開の計画を事実上無期限凍結という発表をされています。そしてスイスも二〇三四年までの脱原発政策を決定されました。そしてドイツが二十二年までに国内全十七基の原発を停止するということを盛り込んだ脱原発の国策を決定されました。

日本も原発の直後に、菅総理が脱原発社会を目指すということをおっしゃられたんですが、その後、政権がかわって野田総理になられてからはちょっと趣が変わり、当然産業界とかいろんなご意見があったわけですけれども、福井県の大飯原発一号機再開、二号機再開、関西電力は今度は高浜原発も再開したいということを言い出して、非常に日本国内も大きく揺れているわけでございます。

ドイツの場合は大体、再生可能エネルギーを二〇五〇年までに八〇％にしたいということをおっしゃっています。特に風力発電を再生可能エネルギーの中心に据えたいということをおっしゃっているんですけれども、難しいのは送電網の整備とか、

太陽光発電をどれだけやっても三％しか伸びないとか、いろんな課題があるということをお聞きしております。

そこで、ぜひともフーバー先生にドイツの宗教者の代表、指導者として、こういう今のドイツの脱原発政策、そしてこれからの新エネルギーの課題、新エネルギーについてどういうお考えなのかお聞きしたいと思います。フーバー先生、よろしくお願いします。

【フーバー】 私はドイツで原子力エネルギーに対するデモが多発していた頃に大人になっていきました。私が学生だった頃は、原発をめぐるデモがあり、議論もすごかったんです。原発に関しては本当に長い間ディスカッションが行われました。私たちの教会の意見も割れ、国民の意見も二分されたのです。余りにも激しい議論が社会のあらゆるところで行われていました。

原発賛成派は、「これは社会のためによいことをしているんだ。世界のためによいことをしているんだ」「これはクリーンなエネルギーであり、世界にとって大きな有望なエネルギー源である」と、そう言います。キリスト教の人たちもそうかと考えて、この原発を好んだ人もいるんです。別に悪意があったわけではありません。

こうしたディスカッションは永遠に続くかと思われたのですが、重大な原発事故が起こりました。私がまだ二十代のときでした。毎日毎日シャワーを浴びましたが、それでリスクが減っているのかどうかということもはっきりわかりませんでした。

そんな恐ろしい出来事が起こった後、ドイツの国民の間で、特に社会民主党政府のときに原発をやめようということになったのです。脱原発です。二〇二〇年までには廃止しようとしました。けれども政権交代があり保守政権になると、脱原発は二〇七〇年までいいのではないかと言い始めたんです。

でも「フクシマ」が起こって全てがまた変わりました。フクシマの後、多くのドイツ人は「もう脱原発だ。それしか道はない」と一致したのです。十一基ある老朽化した原発は廃炉にしよう、そして二〇二二年までに全ての原子力発電はやめようと決まったのです。

今、どのようにしてエネルギーを削減していくのかディスカッションが行われています。もちろんもう石炭を燃やすことに戻るわけにはいきません。

しかし、私たちは必要なエネルギーを生産することができるのでしょうか。議論がずっと続いています。私も自分の家は太陽光発電をしているんですけれども、私の家族全員が必要とするだけのものはまだ発電できていません。風力発電はどうだろうか。沿岸地域に風力発電を設けたらどうだろうか。送電網をつくって、沿岸地域から工業地帯に電力を運んでくることができるのか。その中で、みんなが少しずつ自分たちなりに何かしなければいけないと思っています。ライフスタイルを変えていかなければ、エネルギー需要を満たすことはできないのです。

脱原発の結果がどういうものになるかはまだ私たちにはわかりませんが、全員が何かをしなければいけない。それはドイツの政府だけではなく、教会や宗教団体の責任でもあります。我々も議論に参加して、私たちの視点でビジョンを出していかなけ

ればいけない。世界的な議論が必要です。ドイツだけではなくて、世界的な世論が必要なのです。

【吉澤】 それでは同じヨーロッパのイギリスでは、このエネルギー問題そして新しいエネルギー問題、こういう問題についてどのようにお考えなのかお教えていただけますか。

【イプグレイブ】 まず最初に、そうですね。イギリスもヨーロッパの一部なんですね。余りこれはイギリスでは知られていないようなのですけれども（笑）。

二つの問題が絡んでいます。ひとつは、どうやってエネルギーを生み出すかという問題です。二つ目は、私たちはどの程度のエネルギーを使っていいのかということです。

まず最初に、原発を使ってエネルギーを生み出し続けるかということに関しては、それぞれの国で状況は違うと思います。例えば日本の状況とドイツの状況でも歴史が違います。イギリスとでは地理的な状況も違うし、人々の原発に対する姿勢や態度も違います。イギリスは日本のような津波や地震があるという地理的状況にありません。ですから、イギリスには原発を政治問題化してきた歴史がありません。

ある面では、イギリスは時代におくれているのかも知れませんが、原発の議論は実際にまだ始まっていないのです。英国国教会でも原発に関してまだ真剣に議論をしたことはありません。この点は日本聖公会から学ばせていただきたいと思っていますし、ドイツのルーテル教会からも学ばせていただきたいと思い

ます。

二つ目の、どれぐらいのエネルギーを我々は発電すればいいのかという問題です。それは、どれだけ電力を作っていけばいいのか、どれぐらいのエネルギーを私たちは使ってもいいのかということです。

イギリスに「そこに行くのなら、ここから始めない」という格言があります。AからBに動きたいときには、Aから始めない方がよいということです。Aから始めるととても長い道のりになる。

今、私たちが今いる場所は、もうエネルギーが持続不可能になりそうな世界です。ここからエネルギーの消費を減らす地点までの道のりはとても難しいものです。特に民主主義の国ではそういうことがとても難しくなっていきます。短期的な利益が優先されるからです。人々が何か変えなければいけないということがわかっていても、民主的な政治体制の中では、その変化が短期的な利益をもたらさない時、改革をなし遂げることは至難の業です。議会政治は短期的なものです。次から次へと選挙もあります。

教会がここで果たし得る役割は、私たちの知恵というのは一世代に限られたものではなくて、それは長い時代を通した知恵が溜まっていったものであり、それを共有しているということなのです。

私たちはその蓄積された知恵を、非常に短期的な議論の中にも盛り込んでいかなければなりません。そのためにはまず、我々自身が模範を示してやっていかなければいけないと思うのです。

私たちの英国国教会では、フットプリントを縮小するというプログラムをやっています。エネルギーを製造していくために、我々が使っている環境の負荷を減らしていくということです。私たちの使う電力、それからガスの消費をいかに減らしていくかということです。最終的には、地元で小さなレベルでもエネルギーをつくり出していくようにするということです。これは小さな一歩ではありますけれども、そのようなメッセージを出して、私たちは地元の人々と共にやっていこうとしています。

【吉澤】 ドイツ、イギリスの次はアメリカといきたいのですが、アメリカはスリーマイル島原子力発電所事故を起こして、日本も非常に大きなショックを受けました。しかし、フランスと並んで原子力発電は大きな比重を占めていて、福島第一、第二原発事故の原子炉はアメリカのゼネラル・エレクトリック社から日本が購入したものです。それが事故を起こしたわけですが、アメリカの宗教者として、新しいエネルギー、そして我々人類はこれからどうしていかなければいけないのか、お考えをお聞かせください。

【ベンドレー】 私はWCRPの国際事務総長という立場であり、必ずしもアメリカ人だけを代表しているわけではありません。アメリカという大きなファミリーの一部にしかすぎません。ただ私が感じるところを幾つかご紹介したいと思います。

まず最初に、スリーマイル島の事故です。これはアメリカの国民の眠りを覚ましました。原発は安全だと言われていたのに、

信頼が崩壊することで、規制する側とされる側との関係が問われました。

英語で「キツネが鶏を監視する」という表現があります。誤った信頼がどうやって維持されてきたのか、国民に対する責任体制はどうだったのかというような議論が必然的に起こりました。それが核兵器についても言及されました。冷戦時代から日本は核兵器に反対していました。核兵器が無差別に使われることになると、善良な市民も犠牲になるからという理由でした。

しかし冷戦時代には、自由主義陣営では核兵器を所有することは必ずしも非道徳的なことではないという考え方がありました。一方で、ヒューマンエラーという要因を無視することはできないという考えもありました。

人類は過ちを犯すものです。自らがつくったシステムを、完全にコントロールできないのなら、核兵器を所有することが本当に道徳に反しないと言えるのか。我々はエンジニアシステムを完全にコントロールすることはできません。したがって、事故が全く起こらない、事故ゼロという可能性というのはないのだ、という前提で検討が行われました。

核燃料廃棄物の問題もありました。私も指摘しましたし、フーバーさんのほうからも指摘がありました。アメリカ合衆国では廃棄物をどこに持っていけばいいのかという議論が行われています。今は使用済みの燃料棒を原子炉のすぐ横に貯蔵しています。日本と一緒です。地質学者がこの地質に埋めるほうがいいと言っても、そこの住民は「ここには埋めないでくれ。あっちに埋めてくれ」と言うわけです。

廃棄物は百万年管理していかなければいけないということになっています。信じられないような数字です。

次に、経済という面から見てみたいと思います。私は原子力に基づいた経済は変わってきていると思います。フーバー先生は、ドイツが脱原発の方向性とそこに至るために実際にどう動いていけばいいのかについて議論されていると言われました。

フィナンシャル・タイムズ紙は、大規模な天然ガスが発見され、ガスの価格が下がったという記事を掲載しています。天然ガスは自然の炭素からできているもので、それほど公害を出しません。原子力から再生可能エネルギーへ移行する一つのチャンスがあるのではないかと思います。

宗教者の役割は経済や技術を、道徳や精神的な側面からとらえることです。

豊富な天然資源に恵まれている国はそれに感謝をすべきでしょう。逆にエネルギー資源を持たない国は不利に思うかも知れません。オランダの経済学調査は、北海にかなりの埋蔵量の石油が発見されたと指摘しています。今、それに頼り利用したとしても、いつの日にかいずれはそのツケを払わなくてはなりません。そうなりますと、その時には経済効率が落ちるのです。

ですから我々は今、まさにしなければいけない作業があるのです。我々は今、移行を遂げていかなくてはなりません。その移行を専門的、経済的な問題と共に、道徳、精神的な信仰に裏打ちされた方向へ導く必要があるということです。

【吉澤】 貴重なご提言ありがとうございます。

次はディーン・シャムスディーン先生にお聞きしたいのですが、先ほど冒頭のご発言の中で、宗教指導者は持続可能なエネルギーへの投資を支持すべきであるということをおっしゃられました。例えばインドネシアの場合ですと、この新しいエネルギーというものをどのようにお考えになられているのか。これは別にインドネシアということでなくても、シャムスディーン先生のお考えでも結構ですがお聞かせいただきたいと思います。

【シャムスディーン】 私も政府を代表しているものではありません。私は私どもの謙虚な理解、宗教的な観点、イスラームのほかの同胞とはちょっと違った意見かもしれませんが、半ば私見をご紹介してみたいと思うのです。

インドネシアはエネルギーに対する需要が極めて大きい国です。インドネシアはもはや石油の輸出国ではありません。輸入国に転じています。再生可能なエネルギーでは、政府は波力や風力、地熱エネルギーなどを考えています。インドネシアは世界で最も大きな島国であり熱帯にありますので、こういったエネルギーの資源があるのです。

しかしそれでも、インドネシア政府は原子力発電をスマトラ、ジャワ、そしてカリマンタン島に建設しようとしています。私はインドネシア政府に対して、原子力を日本から輸入してはどうかということを奨励しようかと思っていたのです。

インドネシアのイスラーム最高評議会の中で原発問題を深刻に検討したことはありません。ただイスラームの観点からすれば、神は地球と人類をつくり賜い、それも大きな潜在的可能性を持つものとしてつくり賜いました。ですから、いわゆる人間の文明、生活がよりよい方向に向かうために、科学技術をどういうふうに使っていくかということが重要だと思うのです。

科学と技術というのは、プラスの部分とマイナスの部分、あるいは長所と短所があるのです。この二つの相反する要素を、より便益の大きな人間の文明のためにどう使うのかということを考えるべきです。

科学技術を人間の文明、また道徳、倫理的な観点から使っているのかということを考えなくてはなりません。インドネシアにおいては持続可能な開発を倫理的、道理的な価値観からどういうふうに選ぶのかということが重要なのです。

言ってみれば中庸、中道ということです。しかし、現実から逃避することはできません。また課題とチャンスを避けて通ることもできないでしょう。

お聞きしますが、本日の議場の照明、これは原子力から来ているんでしょうか?。

【吉澤】 この照明は実は福井の原発から流れてきている原子力も一部入っているというふうに思います。

次に、パロップ・タイアリー先生にお聞きしたいと思います。

先ほどのご発言で、仏教者の立場から人類の欲望、運命に対する大いなる反省と、それと人間が自己抑制ができていないんじゃないかということをおっしゃられました。我々日本でも、例えば仏教の教えの中に「少欲知足」というのがあります。欲望を減らして足るを知るという言葉です。我々人類は産業革命

以降、まず最初に石炭を食い尽くし、次は石油を大量に使い、それでも足りないからといって、今度は原子力に手をつけたわけです。しかし、今回のような事故が起きました。仏教の教えでは、この欲望を肥大させていくんではなくて、逆に自己を律することで欲望を減らして、こういうエネルギーを過剰に消費する社会をとめようということになるでしょうが、タイアリー先生はどのようにお考えでしょうか。お願いします。

【タイアリー】 タイは仏教徒が九〇％です。タイの人々の暮らしを見ていきますと、大体みんな同じような態度を持って暮らしていると思います。

タイの仏教徒は、生活に長期的な知恵を取り込んでいくということを重視しています。タイというのは、今のような原発の問題がありません。インドネシアの原発使用に関心はありますが、タイには今のところ原発問題はありません。しかしほかの問題はいろいろあります。例えば津波の問題です。そして最近では洪水もありました。去年の終わりごろ、ひどい大規模な洪水に見舞われました。仏教徒として、回避できるものと回避できないものがあると考えています。ダルマ（業）です。

私たちは、自分たちの教義を守って生きていくことが重要であると考えています。これが一番重要なことです。助け合いの精神も重要です。タイの仏教は、これまでは人道的な活動というものに余りかかわってこなかったのですが、最近は人道活動にも参加しており、人々の生活を長期的に改善していくことにかかわっています。

【吉澤】 さて、山崎先生にお尋ねします。

先ほどありました脱原発、反原発のご意見はよくわかりましたが、原発問題でいきますと日本国内で総論賛成、各論反対というのが多いです。例えば今、政府が各タウンミーティングのようにして各都市を回っている意見聴取会というのがありますが、最近開かれたところでも原発が将来二〇三〇年までに〇％にするのか、それから一五％にするのか、二〇から二五％にするのかというので国民から意見を聞いていますが、大体今どこでも七〇％が反対、ゼロにしようということを言います。しかし、そうなると当然のように次の新しいエネルギーが見つかるまでの間に、我々国民は節電というか、先ほどの少欲知足が大事になってくるというふうに思うんです。

これまでの電力会社の言い分は、要は日本の経済成長は右肩上がりで上がっていくから電力が必要なんだと、だから原発もとめられないというようなことも言ってきましたけれども、そういう自分たち、我々国民がどういうふうにしていかなきゃいけないのかということも含めて、ちょっと新エネルギーについてご意見をお聞かせいただきたいのですが。

【山崎】 僕は少欲知足は昔はあんまり好きではなかったんです。といいますのはどちらかといえば、本来の意味と違って、宗教者が相手に欲望を制することを求めていると思うからです。上を見ると幸せな人もいるけれども、下を見ても切りがないので、この程度で我慢しなさいというようなことが、日本の仏教界で

横行していたと思っていて、あんまり好きではない。

だけど原発に関して言うなら、少しでも一〇を八にするような形でしかこれを乗り越える方法はあるまいということが私の中では大変強くあります。それから、パーセンテージの問題ですが、はっきり申しますと私は政府を信用していません。私は宗教者というのは、国家というもの国というものをきちっと看視することが宗教の尊厳だと思っております。反目するという意味じゃなくて、きちっとこれを看視していくと。この看視というのは、僕は看護師さんの「看」に「視る」という字を使いたい。きちっとまなざしを持って、政府のこのことがおかしいと看視する。

パーセンテージの問題でも、もうこれは国民がうるさいからあちこちで発言させておけみたいな、ガス抜きみたいなもの以外の何物でもないのではないかということを、実は国民が全部知っている。ものすごい勢いでデモが国会を取り巻いている。かつての三十年前のデモと全く違います。毎週この炎天下に七十歳、八十歳の方々が、公園に二時間も座ってデモンストレーションをするというのは、もうどうしようもない状況にきているのではないか。そういうものを受けとめられない、あるいは受けとめようともしない政治家というのは一体何なんだろうかということに対する思いが私には大変強くあります。

そしてエネルギー問題にしても、原発を輸入する側の問題性、輸出するという側の問題性、双方にこのことを論じなきゃいけない。安易に輸入、輸出なんていう、そんな悠長な問題ではないということを、原発という問題は我々に示しているんだということの認識は大変大事なものです。そういう思いがあります。そして、まずとにかく再生可能なエネルギーの開発、研究、実はこういうのは民間レベルで随分なされています。しかし、政府は全くやる気がありませんから法規制がひどいです。地熱発電だって法改正をしなければできませんが、それをしようとしません。それは電力会社等々に目が向いているからでありましょう。

あるいは二番目は、廃炉に向けての具体的なビジョンを一日も早く構築することです。数十年かかって何兆円かかるということであるにもかかわらず、その方向が全く見えない。

第三点は使用済み核燃料です。よく言われることですが、快適なレジデンスにトイレがないんですよね。使えるでしょうか、こういうレジデンスは、僕は使えないと思います。要するに世界中でその処理ができないものを、こうしている間にもどんどんどんどん生み出しているということの無責任性を指摘したい。

使用済み核燃料をロケットで宇宙へ飛ばすというのがありました。これは危険だということになると、南極に埋めるという説もありました。もっとひどいのは海底に埋めるというのもありました。もっとひどいのは、金を出すからモンゴルへ行って埋めるという話もありました。これが悲しいかな、日本政府の実態ですね。そういう非倫理的なことを、私たち宗教者はどういうところからとらえていくべきだろうかという大きな問題がある。

ですから、再生可能エネルギーを可能にするための方法論を、我々自身がやっぱり一人一人模索しながら政府を動かすような

方法でいかないと、これは不可能ではないかという思いが私はします。それが今当面のエネルギーに関する課題です。だからおっしゃったライフスタイルの転換と、それからエネルギー革命、これしかないと思います。

【吉澤】 ありがとうございました。

きょうは世界から集まった六人の先生方から貴重なお話をお伺いしました。

お話を聞いているうちに、日本の子供を育てているお母さんのような方から一言ご発言がいただけないかと思いまして、皆様にお許しいただき、きょうお見えになっている四児のママに、日本の主婦の立場からご発言をお願いいたします。庭野光祥さんです。

【庭野】 ありがとうございます。立正佼成会の庭野光祥と申します。

私には四人の子供がおります。大震災、津波の後の福島にも、またそれぞれの被災地にも行かせていただきました。きょうの皆様のお話を聞かせていただいて、私たちは原発を越えて本当の意味で豊かな人間としての生き方というものを模索している機会をいただいたんだというふうに思います。そして、ただ単に反対するとかということだけではなくて、本当にそのことをみんなが一致してやっていくことがすごく大切だと思いました。

現実に福島で子供を持つお母さんたちは、外で子供たちを遊ばせていいのだろうか、成長期の子供たちを外で遊ばせていいのか、この水を飲ませていいのだろうか、そして自分たちが授乳しているこの母乳は安全なんだろうか、という本当に切実な問題を抱えておられます。それに対する一人一人の考え方には いろいろな差があると思うのですけれども、その考え方が違うと、今まで仲よくしていた家族同士、また母親同士の関係までが分断されてしまう。単なるエネルギー問題ではなくて、本当に社会がエネルギー問題、また原発、放射能の問題にどう対するかということで分断されてしまうという、そういう悲しい現実があります。私はそういう問題に直面したときに、エネルギーだけではなくて本当に生き方の問題だということを実感いたしました。

そしてまた、東京電力で働くご主人を持つお母さんにもたくさん会いました。本当に自分たちが、特に私たちと何か違うことをしたわけでもないけれども、多くの懺悔の気持ち、申しわけないという気持ちを持ちながら、そして自分もその放射能の問題におびえながら生きている、そういう現実で暮らしていらっしゃいます。

私たちは本当にその原発、放射能とか、また百万年、十万年の子孫に対する責任ということも考えながらも、現在、今そこで生きている人、また今そこで働いている人のためにも、単に反対ではなくて一緒に解決していこうという、そういう祈りの

気持ちが必要だなということをいつも考えています。

ですから世界の方々にぜひ、今現実にその問題に対応している方たちに対する祈りもいただければ、大変ありがたいかなと思わせていただいています。

ありがとうございました。（拍手）

【吉澤】 ありがとうございました。

きょうは二時間にわたって「原発事故が提起したエネルギー問題と宗教者の立場」というテーマで、世界から集まっていただいたキリスト教、ムスリム、そして仏教の指導者の皆さんからお話を伺うことができました。

世界の宗教者がこのように一堂に集って、そしてエネルギー問題について語り合う。大体皆さん原子力からそろそろ転換して、持続可能な新しいエネルギーに向かわなきゃいけないんじゃないかということでは一致したというふうに思います。そういう意味で非常に記念すべきフォーラムになったと思います。

きょうは六人の先生方、本当にありがとうございました。（拍手）

CEREMONY

平和の祈り式典

主催者代表あいさつ

平和の祈り登壇者名簿

8月4日(土)15時～17時

比叡山

主催者代表あいさつ

天台座主　大僧正　**半田　孝淳**

有史以来、人類は大自然の豊かな恵みによって生かされると同時に、その猛威に脅かされてきました。その猛威を克服すべく、科学技術の発展に力を傾注してきたのが人類の歴史であると申してもよいでしょう。

しかし、いかに科学技術が進歩したとはいえ、人類は未だに自然の前には無力であることを、近年世界中で猛威を振るう自然災害によって改めて思い知らされております。

特に、日本におきましては、昨年三月十一日に国難ともいうべき東日本大震災が発生し、マグニチュード九・〇という大地震、また未曾有の大津波により二万人近い尊い生命が失われました。さらにこの津波により、東京電力福島第一原子力発電所が破壊され、大量の放射性物質が漏洩するという重大な原子力事故が引き起こされました。その結果、周辺地域の住民は、住居や仕事を放棄し長期にわたる避難生活を強いられ、今なお日本全国、また周辺諸国の人々は放射性物質の及ぼす健康被害に脅えています。

大地震、大津波は人智では止めることのできない、いわゆる仏教でいう「諸行無常の理」で

はあります。しかし、今回の原発事故は、人間のあくなき欲望を満たそうと突き進むあまり、大自然に対する畏敬の念を軽んじたことが根本にあるように思われてなりません。

我々宗教者の重大な使命は、大自然の猛威によって亡くなった方々の霊を鎮めることにあることは申すまでもありませんが、同時に「亡くなった人の分まで生きる」と決意した人々に寄り添い、共に生きることでありましょう。

大自然の猛威に打ちのめされて、表面的には気丈に見えていたとしても、その喪失感、無力感、また現実の生活の悩みにうちひしがれている人々と共に歩むことが、我々の立場ではないでしょうか。

世界は、今もテロリズム、民族対立、独裁など依然として憎悪と対立を繰り返しさらなる拡大化の兆しをみせております。また地球環境破壊や食糧危機、人権抑圧、貧困、饑餓なども重大な問題であり、どれもが平和をもたらすためには解決されねばならない問題であります。

そしてまた、大自然の猛威に肉親や生活を奪われた人々が一日も早く平安を取り戻し、安寧に暮らすことができるように連帯して、救援の手を差し伸べ続けることも我々宗教者の重大な使命でありましょう。

ここに比叡山宗教サミット二十五周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」を迎えるにあたり、真剣な祈りを捧げ、平和のために働く決意を新たにするものであります。

平和の祈り登壇者名簿（国内）

◎仏教

役　職	名　前
全日本仏教会副会長	前田　定戒
天台真盛宗宗務総長	川合　歳明
天台寺門宗宗務総長	座間　光覺
真言宗智山派総務部長	芙蓉　良英
浄土真宗本願寺派所務部長	東森　尚人
臨済宗妙心寺派総務部長	松山　英照
曹洞宗責任役員出版部長	石川　順之
曹洞宗大本山永平寺副貫首	南澤　道人
法相宗大本山薬師寺長老	安田　暎胤

◎キリスト教

役　職	名　前
駐日ローマ教皇庁大使	ジョセフ・チェノットゥ
日本カトリック司教協議会会長 / カトリック大阪大司教区大司教	池長　潤
日本キリスト教連合会委員長 / 日本福音ルーテル教会総会議長	渡邊　純幸
日本聖公会首座主教	植松　誠

◎イスラーム

役　職	名　前
日本ムスリム協会会長	徳増　公明
日本ムスリム協会理事 / 前会長	樋口　美作
日本ムスリム協会理事	水谷　周

◎新日本宗教団体連合会

役　職	名　前
新日本宗教団体連合会名誉会長 / 円応教教主	深田　充啓
新日本宗教団体連合会常務理事 / 妙智會教団理事長	宮本けいし
新日本宗教団体連合会理事 / 真生会会長	田中　庸仁
新日本宗教団体連合会理事 / 立正佼成会理事長	渡邊　恭位
新日本宗教団体連合会評議員 / 崇教真光事務局長	佐々木堯章

平和の祈り登壇者名簿（国内）

◎教派神道連合会

役　職	名　前
神習教教主	芳村　正徳
黒住教副教主	黒住　宗道
扶桑教責任役員	宍野　史生
御嶽教責任役員	井上　慶山

◎神道

役　職	名　前
御香宮神社 宮司	三木　善則
吉田神社 権禰宜	室川　善幸
熊野神社 宮司	岸本　匡美
賀茂別雷神社 権禰宜	鳥居　昭典
田中神社 宮司	山田　敦子

◎諸宗教

役　職	名　前
世界連邦日本宗教委員会会長	田中　恆清
世界宗教者平和会議日本委員会会長	庭野　日鑛
世界宗教者平和会議日本委員会参与	宝積　玄承
世界宗教者平和会議日本委員会理事	森脇友紀子
天理教表統領室次長	永尾　信雄

平和の祈り登壇者名簿（海外）

◎仏教

役　職	名　前
世界仏教徒連盟事務総長	パロップ・タイアリー
プラティープ財団創設者・事務総長	プラティープ・ウンソンタム・秦
ベンガル仏教会会長	ビック・ボーティパラー
中国佛教協会副会長	学　誠

◎キリスト教

役　職	名　前
ローマ教皇庁諸宗教対話評議会名誉局長	ピエル・ルイジ・チェラータ
シリア正教アレッポ大主教	マー・グレゴリオス・イブラヒム
バイエルン福音ルーテル教会エキュメニカル部門担当者	イヴォ・フーバー
英国国教会ウーリッジ教区主教・カンタベリー大主教特使	マイケル・イプグレイブ

◎イスラーム

役　職	名　前
インドネシアイスラーム最高評議会副議長	ディーン・シャムスディーン
サウジアラビア王国イスラーム問題・寄進・宣教・指導大臣顧問	アブドゥラー・アルレヘダン
キムセヨクム副理事長	ユスフ・ユルドゥルム

◎諸宗教

役　職	名　前
聖エジディオ共同体事務総長	アルベルト・クワトルッチ
聖エジディオ共同体アジア地域責任者	アゴスティーノ・ジョバンニョーリ
世界宗教者平和会議国際委員会事務総長	ウィリアム・F・ベンドレー
フォコラーレ運動諸宗教対話センター共同代表	クリスティーナ・リー

D A T A

資料

実行委員会名簿

新聞報道記事

比叡山宗教サミット25周年記念
「世界宗教者平和の祈りの集い」実行委員会名簿

名誉顧問

氏　名	役　職	
半田　孝淳	全日本仏教会会長	天台座主
芳村　正徳	日本宗教連盟理事長	神習教教主
渡邉　純幸	日本キリスト教連合会委員長	日本福音ルーテル教会総会議長
北白川道久	神社本庁統理	
深田　充啓	新日本宗教団体連合会名誉会長	円応教教主

顧　問

氏　名	役　職	
出口　紅	大本教主	
黒住　宗晴	黒住教教主	
小林　正道	全日本仏教会理事長	
松長　有慶	高野山真言宗管長	
寺田　信秀	真言宗智山派管長	
加藤　精一	真言宗豊山派管長	
伊藤　唯眞	浄土門主	
大谷　光真	浄土真宗本願寺派門主	
大谷　暢顯	真宗大谷派門首	
河野　太通	臨済宗妙心寺派管長	
福山　諦法	曹洞宗管長	
内野　日総	日蓮宗管長	
池長　潤	日本カトリック司教協議会会長	カトリック大阪大司教区大司教
植松　誠	日本聖公会首座主教	
宮本　丈靖	妙智會教団会長	
庭野　日鑛	立正佼成会会長	世界宗教者平和会議日本委員会会長
岡野　聖法	解脱会法主	新日本宗教団体連合会理事長
保積　秀胤	大和教団教主	新日本宗教団体連合会常務理事
御木貴日止	パーフェクトリバティー教団教主	
田中　恒清	神社本庁総長	世界連邦日本宗教委員会会長
中島精太郎	明治神宮宮司	
小串　和夫	熱田神宮宮司	
九條　道弘	平安神宮宮司	
髙城　治延	神宮少宮司	
徳増　公明	日本ムスリム協会会長	
中山　善司	天理教真柱	

実行委員会

役　職	氏　名	所属役職
委員長	阿　純孝	天台宗宗務総長
副委員長	田中　恒清	神社本庁総長
副委員長	渡邊　恭位	立正佼成会理事長
実行委員	松田　一	大本亀岡宣教センター長
	黒住　宗道	黒住教副教主
	関﨑　幸孝	全日本仏教会事務総長
	鈴川　智信	全日本仏教会国際部長
	岡部　兼海	高野山真言宗総長公室長
	細川　大憲	真言宗智山派教学部長
	増澤　秀丸	真言宗豊山派総務部長
	中村　在徹	浄土宗総務局長
	東森　尚人	浄土真宗本願寺派所務部長
	宮浦　一郎	真宗大谷派総務部長
	松山　英照	臨済宗妙心寺派総務部長
	石川　順之	曹洞宗責任役員出版部長
	渡邊　義生	日蓮宗宗務総長室長
	大塚　喜直	カトリック京都司教区司教
	柳本　昭	カトリック京都司教区司祭
	高地　敬	日本聖公会京都教区主教
	小間澤　肇	神社本庁広報部長
	網谷　道弘	明治神宮権宮司
	中嶋　茂博	京都府神社庁参事
	斎藤　謙次	新日本宗教団体連合会事務局長
	生田　茂夫	新日本宗教団体連合会大阪事務所所長
	宮本けいし	妙智會教団理事長
	根本　昌廣	立正佼成会外務部長
	杉谷　義純	世界宗教者平和会議日本委員会理事長・天台宗宗機顧問
	畠山　友利	世界宗教者平和会議日本委員会事務局長
	田中　朋清	世界連邦日本宗教委員会事務局長
	可児　光永	世界連邦日本仏教徒協議会理事長
	徳増　公明	日本ムスリム協会会長
	樋口　美作	日本ムスリム協会理事
	吉澤　健吉	京都新聞総合研究所特別理事
	武　覚超	延暦寺執行
	阿部　昌宏	天台宗参務財務部長
	小堀　光實	延暦寺副執行管理部長
	小林　祖承	延暦寺一山止観院住職

比叡山メッセージ2012起草委員会

	薗田　稔	秩父神社宮司・京都大学名誉教授
	杉谷　義純	世界宗教者平和会議日本委員会理事長・天台宗宗機顧問
	吉澤　健吉	京都新聞総合研究所特別理事

事務局

事務局長	杜多　道雄	天台宗参務総務部長
事務局顧問	杉谷　義純	世界宗教者平和会議日本委員会理事長・天台宗宗機顧問
事務局参与	徳増　公明	日本ムスリム協会会長
事務局参与	吉澤　健吉	京都新聞総合研究所特別理事

総務部

部　　長	小林　祖承	延暦寺一山止観院住職
次　　長	生田　茂夫	新日本宗教団体連合会大阪事務所所長
事務局員	岩橋　克二	神社本庁国際交流課長
	赤川　恵一	立正佼成会外務グループ次長
	西澤　弘安	立正佼成会外務グループ国内宗教協力実務責任者
	獅子王圓明	延暦寺副執行総務部長
	吉澤　敬順	天台宗信越教区威徳寺住職
	福井　邦彦	天台宗務庁国際課長
	草別　善哉	天台宗務庁総務課長
	横山　和人	天台宗務庁出版室編集長
	武田　功正	延暦寺総務部主事
	志井　浩順	天台宗務庁総務課書記
	赤松　善暢	天台宗務庁総務課書記
	田渕　観海	天台宗務庁国際課書記
	櫛笥　亮恵	天台宗務庁総務課職員

会議部

部　　長	黒住　宗道	黒住教副教主
次　　長	畠山　友利	世界宗教者平和会議日本委員会事務局長
事務局員	藤田　尚三	妙智會教団ありがとう基金事務局長
	和田めぐみ	世界宗教者平和会議日本委員会渉外部長
	南條　雅哉	黒住教学園前教会所所長
	齊藤　圓眞	天台宗参務教学部長
	水尾　寂芳	延暦寺副執行教化部長
	齊藤　哲圓	天台宗東京教区龍泉寺副住職
	草別　善哉	天台宗務庁総務課長
	林　　昌伸	天台宗務庁布教課長
	一色　皓湛	天台宗務庁教学課書記

	矢崎　長潤	天台宗務庁庶務課書記
	赤松　善暢	天台宗務庁総務課書記

式典部

部　　長	松田　　一	大本亀岡宣教センター長
次　　長	小堀　光實	延暦寺副執行管理部長
事務局員	山田　　歌	大本本部亀岡宣教センター国内愛善宣教課長
	佐藤　光春	大本本部亀岡宣教センター企画調整課主幹
	福恵　善高	天台宗参務一隅を照らす運動総本部長
	小寺　照依	延暦寺副執行法務部長
	斎藤　良弘	天台宗務庁一隅を照らす運動総本部次長
	青木　円学	延暦寺法務部主事
	磯村　良定	延暦寺管理部主事補
	池田　尭正	天台宗務庁一隅を照らす運動総本部書記

接遇部

部　　長	根本　昌廣	立正佼成会外務部長
次　　長	中嶋　茂博	京都府神社庁参事
事務局員	鈴川　智信	全日本仏教会国際部長
	柳本　　昭	カトリック京都司教区司祭
	田中　朋清	世界連邦日本宗教委員会事務局長
	佐藤　益弘	立正佼成会京都教会長
	岡安　里佳	立正佼成会外務グループ
	山田　亮清	天台宗参務法人部長
	齊藤　圓眞	天台宗参務教学部長
	大塚　善仁	天台宗兵庫教区本壽院住職
	真嶋　全康	延暦寺副執行参拝部長
	今出川行戒	天台宗祖師先徳鑽仰大法会事務局幹事
	福島　亮俊	天台宗務庁教学課長
	西村　智秀	天台宗務庁庶務課長
	三浦　密照	天台宗務庁教学課書記
	鵜浦　俊成	天台宗務庁庶務課職員

財務部

部　　長	阿部　昌宏	天台宗参務財務部長
次　　長	大角　実豊	延暦寺副執行財務部長
事務局員	福井　邦彦	天台宗務庁財務課長
	星野　貴宣	天台宗務庁財務課書記

宗教者 災害・原発を議論

延暦寺などで8月に「集い」 宗派超え1300人が参加

梅原猛氏

半田孝淳 天台座主

世界三大宗教を含む12カ国の宗教団体代表らが集まる「世界宗教者平和の祈りの集い」が8月3～4日、比叡山延暦寺（大津市）など京都、滋賀3会場で開かれる。宗教間対話での従来の議題は世界平和や紛争解決だったが、今回初めて自然災害や東京電力福島第1原発事故をテーマに定めた。各宗教団体が東日本大震災の被災地を訪れ、「物質的な豊かさの中に幸福を求める現代文明の見直しが問われている」としてテーマを変更した。

全日本仏教会や世界宗教者平和会議など主催7団体が概要を固めた。今年は87年の「比叡山宗教サミット」から25周年に当たり、公開の場で宗教間対話をするのは5年ぶり。昨年洪水被害を受けたタイからパンワナメティ仏教徒連盟会長、インド洋大津波を経験したインドネシアからシャムスディーン・イスラム最高評議会副議長が出席。カトリックやシリア正教の関係者も含め計約1300人が参加する見通しだ。

シンポジウムでは、災害に対するこれまでの宗教者の行動を検証し、原発事故とエネルギー問題を考える会議も開く。宗教者に今何が求められているのか、立場と責任に関する共同メッセージを発表する。哲学者の梅原猛氏が「自然災害と人間の文明」をテーマに講演し、半田孝淳・天台座主らが平和の祈りをささげる。【千葉紀和】

毎日新聞
6日28日

世界の宗教者 被災地に祈り

「自然災害の猛威と宗教者の役割」をテーマにした「世界宗教者平和の祈りの集い」が8月3、4両日、比叡山延暦寺（大津市）などで開かれる。同寺などでつくる実行委員会が6日、発表した。

来月3、4日 延暦寺などで集い

仏教やキリスト教、イスラム教など世界の宗教者が同寺に集まった「比叡山宗教サミット」から今年25周年になるのを記念し、約2000人が参加する。シンポジウムなどで、東日本大震災やタイの大洪水など各地の災害に際して、宗教に携わるものがどう行動し、何ができるかを話し合う。

実行委員会名誉顧問の半田孝淳（こうじゅん）・同寺座主は「亡くなった方々の霊を鎮め、被災者が1日も早く平安を取り戻すよう、祈りをささげる」と述べた＝写真＝。

読売新聞
7月7日

京都新聞
7月7日

宗教者 災害向き合う

比叡山宗教サミット25周年の記念大会の概要を発表する半田孝淳座主（中央）たち
（6日、京都市東山区のホテル）

来月、京で祈りの集い

「世界宗教者平和の祈りの集い」実行委員会は6日、比叡山宗教サミット25周年を記念して京都市内で8月3、4日に開催する記念大会の概要を発表した。「自然災害の猛威と宗教者の役割」をメーンテーマに、地震や津波の被害に遭った12カ国の宗教者計18人を含む約2千人が集い、災害に対して宗教者がどのように行動したかを検証する。

3日は、左京区の国立京都国際会館で、哲学者の梅原猛氏が「自然災害と人間の文明」の題で講演する。続くシンポジウムでは、過去に自然災害に遭った国の宗教者が、被災地支援の経験を話す。4日はフォーラムがあり、宗教者の立場から原発事故を論じる。その後、大津市の延暦寺に移り、自然災害の犠牲者に祈りをささげ、「比叡山メッセージ」を読み上げる。

この日の発表には、天台座主の半田孝淳氏、日本ムスリム協会長の徳増公明氏、カトリック京都司教区司教の大塚喜直氏が出席。半田座主は、福島第1原発事故について「人間のあくなき欲望を満たそうと突き進むあまり、大自然に対する畏敬の念を軽んじたことが根本」と述べた。

「世界宗教者平和の祈りの集い」は毎年8月に開催し、5年に1度、記念大会を催している。

（貴浦成克）

週刊仏教タイムス
7月12日

テーマ 自然災害の猛威と宗教者の役割

比叡山サミット25周年

8月3・4日 祈りの集い
梅原猛氏が記念講演

1987年8月の比叡山宗教サミットから25周年を迎えるのを記念して「世界宗教者平和の祈りの集い」が8月3、4日の2日間、京都市左京区の国立京都国際会館と大津市の比叡山で開かれる。これに先立ち6日、東山区のホテルで半田孝淳天台座主らが出席し記者会見が開かれ「自然災害の猛威と宗教者の役割―3・11大震災と原発事故への反省と実践」をテーマにし、哲学者の梅原猛氏による記念講演、シンポジウム、フォーラムを開催するなどその概要が発表された。

宗教サミット25周年の会見で決意を述べる半田座主㊥

記念の集いには世界仏教徒連盟（WFB）のパン・ウナメティー会長ら海外12カ国から18人が参加。日本側の宗教者らを含めると、のべ約2000人が参加の予定。

日程は初日3日が国立京都国際会館での関会式典に続いて記念講演とシンポジウムを開催。記念講演は梅原氏が「自然災害と人間の文明」と題して行い、シンポでは自然災害に宗教者がどう向き合ってきたか、各国宗教者らがその経験を意見交換する。午後6時からは近くのホテルで交歓レセプションも開く。

2日目4日は午前9時半から同館で「原発非依存」提起したエネルギー問題と宗教者の立場」をテーマにフォーラム。終了後、比叡山延暦寺に移動し、午後3時から根本中堂前で世界平和祈りの式典を開く。この中で2日間の話し合いの成果を盛り込んだ比叡山メッセージを発表する予定。

記者会見で半田座主は「比叡山に集い、世界の宗教者と共に世界平和を尊び、弱い立場の人が救済されるよう真剣な祈りを捧げ、平和のために働く決意を新たにするものであります」と挨拶。また日本ムスリム協会の徳増公明会長は今回のテーマについて「私たちに自然災害の見直し、反省する機会を与える時宜を得たもの」とし、カトリック京都司教区の大塚喜直司教は「私たち宗教者は地球を神仏から人類に託されたことを真摯に受け止め、この災害をどのように考え行動すべきか識別する市民の機会にしなければならない」と意思表示した。

パン・ウナメティー世界仏教徒連盟会長（WFB）パロップ・タイアリー同連盟事務総長プラティープ・ウソンソンタム・タイ国仏教協会副会長マハ・ウチャ・ポンサック・ウドム・ウンマディサ会長ティープ財団創設者マハ・ウドム・ウンマディサ会長シリア正教総主教マイヴィロー・ヨハネ・ヨセフ・ヨハネ・ヨセフ・ヨハネ・ヨセフ

朝日新聞
8月4日

世界の宗教者 京都で集い

自然災害や原発テーマ

世界の宗教指導者が集まり平和や環境などの問題を討議する「世界宗教者平和の祈りの集い」が3日、国立京都国際会館（京都市左京区）で始まった。4日午後には比叡山延暦寺（大津市）で大会メッセージを発表するが、原発への見解をどう盛り込むかで最終的な調整が続いている。

集いには国内の各宗教のほか、中国、米国、トルコなど海外12カ国の宗教指導者ら1200人が集まった。東日本大震災と東京電力福島第一原発事故を受け、今回は自然災害や原発を主なテーマに据えた。

焦点は、4日の「比叡山メッセージ2012」に「脱原発」を盛り込むかどうかだ。記念講演で哲学者の梅原猛さんは「脱原発の方向に進まないといけないという信念を持ち始めた」と述べたが、原発に関する国内の宗教界の考えは撤退から現状維持まで様々。「政治的にデリケートな問題で、発言するのを嫌がる参加者がいる」と関係者は言う。

シリア援助訴え

「世界宗教者平和の祈りの集い」に内戦状態が続くシリアから、キリスト教の一宗派、シリア正教アレッポ大主教のマー・グレゴリオス・イブラヒムさんが参加した。3日、会場で緊急講演し、停戦に向けた国際的な援助を訴えた。

シリア第2の都市・アレッポの教会で要職を務めるイブラヒムさんは「シリアで影響力の強いイスラム指導者を中心にした新たな交渉の土台をつくるべきだ」と主張した。

読売新聞
8月4日

13か国の指導者 災害で意見交換

京都で宗教者の集い

自然災害に対する宗教者の役割を考える「世界宗教者平和の祈りの集い」（実行委主催）が3日、京都市左京区の国立京都国際会館で始まった。仏教やキリスト教、イスラム教など、13か国の指導者が意見を交わした。4日まで。世界の宗教指導者が比叡山延暦寺（大津市）に集った「比叡山宗教サミット」から25周年を記念し、「自然災害の猛威と宗教者の役割～3・11大震災と原発事故への反省と実践」をテーマに開催。初日は約1200人が参加した。

トルコのイスラム教指導者ユスフ・ユルドゥルム氏は「災害直後は宗教組織と救助機関の連携が重要」と強調。内戦状態にあるシリアのキリスト教指導者マー・グレゴリオス・イブラヒム氏は「国際社会の支援と祈りが必要」と訴えた。

産経新聞
8月4日

「宗教 震災で有効な役割」

13カ国から1200人、京都で集い

東日本大震災などの大規模災害に対し、宗教者がどう行動すべきかを考える比叡山宗教サミット25周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」が3日、京都市左京区の国立京都国際会館で始まり、13カ国から仏教やキリスト教、イスラム教などの宗教者約1200人が集まった。4日まで。

開会式典では、世界の災害・紛争犠牲者への祈りを出席者全員でささげた後、ローマ法王ベネディクト16世からの「東日本大震災で宗教者が有効な役割を果たしたのは心強い。サミットがより相互扶助をもたらすと確信している」というメッセージが代読された。

「被災者に宗教者はいかに向き合ってきたか」をテーマに行われた討論では、海外の参加者から「被災者の心に空いた穴を埋める努力をしなければならない」「感謝の気持ちを込めて支援し、ともに成長するべきだ」などの意見が出た。

産経新聞
8月4日（金）

世界宗教者シンポ

「災害時、役割は重大」

学校建設 心のケア 思想交え活動報告

宗教者は災害にどう向き合うべきか――。3日から京都市で始まった「世界宗教者平和の祈りの集い」のシンポジウムでは、世界各国の宗教者が、被災地での支援のあり方などについて意見を交わした。

シンポジウムに参加したのは日本とタイ、トルコ、イタリア、中国の宗教者。

地震国トルコからは、イスラム系人道支援団体キムセヨクムのユスフ・ユルドゥルム副理事長が加わった。大災害時には「宗教施設を救援物資の配送拠点として開放すべきだ」と提言。「第三世界では外部のNGOより地元の宗教指導者に信頼を寄せる」として、救助機関と宗教者の連携の必要性を訴えた。

イタリアのカトリック団体「聖エジディオ共同体」のアルベルト・クワトルッチ事務総長は、途上国の被災地で小学校建設などに取り組んだ経験を紹介。「政治家や政府より、宗教が重要な役割を果たしうる」と語った。

タイ・バンコクのスラムで生活支援をしているプラティープ財団創設者、プラティープ・ウンソンタム・秦氏は、昨年の大洪水の際の支援活動を振り返った。「差別なく被災者を受け入れ、宗派を超えて食料を届けることを心がけた」

東日本大震災で被災した宮城県宗教法人連絡協議会の千葉博男副会長は、火葬場で宗教者が遺族の話を聞く「心の相談室」や、仮設住宅でお茶やケーキを提供して被災者の声を聞く「移動式喫茶店」などの取り組みを紹介。宗教が被災地の復興に果たす役割の大きさを指摘した。

（岡田匠、飯竹恒一）

朝日新聞
8月4日

災害どう向き合う

世界の宗教者がシンポ

宗教者は自然災害にどう向き合うべきか――。3日から京都市で始まった「世界宗教者平和の祈りの集い」のシンポジウムでは、世界各国の宗教者が、被災地での支援のあり方などについて意見を交わした。

シンポジウムに参加したのは日本のほかタイ、トルコ、イタリア、中国の宗教者。地震国トルコからは、イスラム系人道支援団体キムセヨクムのユスフ・ユルドゥルム副理事長が加わった。大災害時には「宗教施設を救援物資の配送拠点として開放すべきだ」と提言。「第三世界では外部のNGOより地元の宗教指導者に信頼を寄せる」として、救助機関との連携を訴えた。

イタリアのカトリック団体「聖エジディオ共同体」のアルベルト・クワトルッチ事務総長は、途上国の被災地で小学校建設などに取り組んだ経験を紹介。「政治家や政府より、宗教が重要な役割を果たしうる」と訴えた。

タイ・バンコクのスラムで生活支援をしているプラティーブ財団創設者、プラティーブ・ウンソンタム・秦氏は、昨年の大洪水の際の支援活動を振り返った。「差別なく被災者を受け入れ、宗派を超えて食料を届けることを心がけた」

東日本大震災で被災した宮城県宗教法人連絡協議会の千葉博男副会長は、火葬場で宗教者が遺族の話を聞く「心の相談室」や、仮設住宅でお茶やケーキを提供して被災者の声を聞く「移動式喫茶店」などの取り組みを語った。宗教が被災地の復興に果たす役割の大きさを指摘した。

（飯竹恒一、岡田匠）

京都新聞
8月4日

災害時の宗教 役割問う

「世界平和祈りの集い」京で開幕

開幕した「世界宗教者平和の祈りの集い」。哲学者の梅原さんが講演し、科学技術に代わる文明の必要性を訴えた（京都市左京区、国立京都国際会館＝撮影・熊谷修）

国内外の宗教・宗派を超えて平和への道筋を探る「世界宗教者平和の祈りの集い」が3日、京都市左京区の国立京都国際会館で開幕した。昨年の東日本大震災を受けて「自然災害の猛威と宗教者の役割」をテーマに掲げ、大災害に直面した社会で求められる宗教の在り方について議論を深める。（3面に関連記事）

1987年に大津市の延暦寺で行われた「比叡山宗教サミット」から25周年を記念した行事。天台宗などでつくる実行委員会が主催し、海外から招かれた仏教、キリスト教、イスラム教の代表者があいさつした。

哲学者の梅原猛さんが講演し、脱炉発の立場を明確にした上で「西洋の科学技術文明は袋小路らしいが、行き詰まっている。解決には日本仏教の思想が大事になる」と語った。シンポジウムでは、宮城県岩沼市の竹駒神社の千葉博男宮司が、宗教団体の連携による支援と復興の取り組みを報告した。最後に、内戦状態のシリアから来日したシリア正教の幹部が登壇し、支援と祈りを呼び掛けた。

4日は延暦寺で式典がある。

（沢田晃英）

日本経済新聞
8月4日

被災者に対する役割議論

■世界の宗教者らがシンポ

世界各国の宗教者延べ約2千人が集う「世界宗教者平和の祈りの集い」が3日、国立京都国際会館（京都市左京区）で始まり、宗教者が大規模災害の被災者に対して果たすべき役割について意見交換するシンポジウムが開かれた。

パネリストは日本や中国、タイ、トルコ、イタリアの宗教者5人。冒頭、宮城県神社庁の千葉博男庁長が東日本大震災に対する各国からの援助に感謝を表明した。

京都新聞
8月4日

「シリア支援を」

宗教者集い 大主教が訴え

世界各地から集まった宗教者に、混乱した国内情勢を報告し、支援を訴えたイブラヒム大主教（京都市左京区、国立京都国際会館）

京都市左京区の国立京都国際会館で3日開幕した「世界宗教者平和の祈りの集い」で、シリア正教のマー・グレゴリオス・イブラヒム・アレッポ大主教が「支援と祈りを必要としている」と訴えた。

シリア正教はキリスト教の宗派の一つ。イブラヒム大主教は「飛行場への道路も封鎖され、参加できたのは奇跡的」とシリアの現状を報告した。「礼拝堂も崩壊し、医療や人道援助の供給も十分ではない。流血を食い止め、平和と繁栄、尊厳と安らぎをもたらすために力を貸してください」と呼び掛けた。

記者会見では、アナン前国連事務総長が辞意を表明した国連などのシリア問題特使について「いろいろな政党や宗派が受け入れるためにも、イスラム関係の人がいい」との見解を示した。（沢田晃英）

読売新聞
8月4日

京都で開幕 世界宗教者平和の祈りの集い

自然との「共生」道標探る

「比叡山宗教サミット」25周年を記念して、京都市左京区の国立京都国際会館で3日開幕した「世界宗教者平和の祈りの集い」（実行委主催）。仏教、キリスト教、イスラム教など13か国の宗教指導者が、東日本大震災を始め、世界で起きる大災害をどう向き合い、被災者を救うために何ができるのかを話し合った。

開会式典では、実行委員長の阿純孝・天台宗宗務総長が「災害は世界各地で発生している。意見交換し、次への備えにしたい」とあいさつした。

海外招待者のうち、ローマ法王庁諸宗教対話評議会のピエル・ルイジ・チェラータ名誉局長が、ローマ法王ベネディクト16世の「日本で起きた地震は痛ましいが、全ての人に希望を与え、支援し、慰めるために宗教指導者が有効な役割を果たしたことを心強く思う」とのメッセージを読み上げた。

仙台市出身の哲学者・梅原猛さんは記念講演で、東日本大震災と福島第一原発事故を科学技術偏重の〈文明災〉と戒め、万物に仏が宿る、とする天台宗の教え「草木国土悉皆成仏」の重要性を説明。

「『共生』は、人類の自然支配による環境破壊を救う思想になる」と訴えた。

シンポジウムでは、登壇者5人がタイ洪水や四川大地震での被災者の救済事例などを報告。宗教施設が被災者を救うコミュニティーを作るべきだ」「運命を神の意志に委ねる考えは、ストレスを減らし、前向きな気持ちにする効果がある」などの意見が出された。

4日は同会館で午前9時半から、フォーラム「原発事故が提起したエネルギー問題と宗教者の立場」、午後3時から大津市の比叡山延暦寺で「平和の祈り式典」が行われる。

「被災者に宗教者はいかに向き合ってきたか」をテーマに議論する宗教指導者たち（京都市左京区の国立京都国際会館で）

毎日新聞
8月5日

宗教サミット 脱原発鮮明に

比叡山

比叡山宗教サミット25周年の「世界宗教者平和祈りの集い」が4日、大津市坂本本町の比叡山延暦寺であった。今回は東日本大震災など自然災害をテーマに開かれ、「原発を稼働し続けることは宗教的、倫理的に許されない。宗教者は強く警鐘を鳴らす責任があったことを率直に反省する」とした「比叡山メッセージ2012」を発表し、脱原発の姿勢を鮮明にした。

半田孝淳天台座主は福島第1原発事故について「人間のあくなき欲望を満たそうと、大自然に対する畏敬の念を軽んじたことが根本にある」と指摘。仏教やキリスト教、イスラム教など、さまざまな宗教の関係者約1000人が参加し、平和への祈りをささげた。

比叡山メッセージも福島第1原発事故に言及。「チェルノブイリやスリーマイル島の事故に謙虚に学ぶ姿勢が余りにも乏しく、安全性を過信した結果。技術の選択に深い倫理性が求められている」と訴えた。【石川勝義】

読売新聞
8月5日

世界の宗教指導者 平和と鎮魂の祈り

延暦寺

世界の宗教指導者が一堂に会した「比叡山宗教サミット」から25周年を記念して開かれている「世界宗教者平和の祈りの集い」（実行委員会主催）は4日、大津市の比叡山延暦寺で「世界平和祈り式典」が行われた。13か国から仏教やキリスト教、イスラム教などの宗教指導者らが集い、約1000人が世界の平和と東日本大震災への鎮魂の祈りをささげた。

震災犠牲者らのために黙とうし、実行委名誉顧問の天台宗・半田孝淳座主が「福島第一原子力発電所の事故は、自然への畏敬の念を軽んじたことが根本にある」などと述べた。その後、「大自然の猛威で亡くなった方々を弔い、最愛の家族・友人を奪われた人々が平安を取り戻すよう、共に歩み続ける」との「比叡山メッセージ」を発表した。

朝日新聞
8月5日

「原発稼働 許されぬ」

比叡山 平和の祈り

「世界宗教者の集い」閉幕

京都市を中心に開かれた「世界宗教者平和の祈りの集い」は4日、各国の宗教者が原発問題について意見を交わした。取り巻く環境によってそれぞれの政府の対応は異なるが、「原発を稼働し続けることは許されない」と脱原発をうたった比叡山メッセージを発表し、幕を閉じた。

各国の宗教者が比叡山延暦寺に集まり、メッセージが発表された＝大津市

京都市であったシンポジウムに参加したのは、日本をはじめ英、米、ドイツ、インドネシア、タイの計6カ国の宗教者。

ドイツは原発の是非を巡り長年国論が二分されてきたが、福島第一原発の事故を受け、脱原発に舵を切った。これを支持する同国のバイエルン福音ルーテル教会のイヴォ・フーバーさんは「再生可能なエネルギーへの転換にあたっては、エネルギーの効率的な使い方などをめぐる議論を宗教者が主導し、ライフスタイルを変えないと」と訴えた。

世界仏教徒連盟のパロップ・タイアリー事務総長はタイ出身。「わずか60年前に原発の技術的勝利に祝杯をあげたが、その結果は福島の事故で嫌というほど示された」とし、「原子力にノーを！」と言い切った。

浄土真宗本願寺派僧侶で、武蔵野大教授の山崎龍明さんも「原発は高度成長を支えた金もうけの道具。世界中が脱原発社会に向かうべきだ」と訴えた。

これに対し、インドネシアのイスラム最高評議会のディーン・シャムスディーン副議長は「原発が人々に恩恵を与える以上は支持する」とした。自国に原発はなく、政府は原発建設を検討中。日本の支援への期待もある。ただ、「原発には両面ある」とリスクも指摘。「安全な技術開発や再生可能なエネルギー源への投資を促すべきだ」と語った。

その後、会場を比叡山延暦寺（大津市）に移して、平和を願う鐘をついて黙禱した。「集い」の実行委員会の名誉顧問を務める半田孝淳天台座主が「原発事故は、人間のあくなき欲望を満たそうと突き進むあまり、大自然に対する畏敬の念を軽んじたことが根本にある」と発言した。

比叡山メッセージは「福島第一原発の事故は科学技術のもたらす安全性を過信した結果だ。廃棄物の安全な処理方法が見いだせない現実一つをとっても、原発を稼働し続けることは宗教的、倫理的に許されない。宗教者は、強く警鐘を鳴らす責任があったことを反省する」としている。

（飯竹恒一、岡田匠）

宗教者の集い 「脱原発」表明

仏教、キリスト教、イスラム、神道、新宗教など国内外13カ国の宗教指導者が参加した「世界宗教者平和の祈りの集い」の実行委員会は4日、大津市の比叡山延暦寺で、放射性廃棄物の処理方法がいまだに確立されていないとして「原発を稼働し続けることは宗教的、倫理的に許されることではない」と表明。事実上の「脱原発」を訴えるメッセージを発表した。

実行委員会には全日本仏教会、神社本庁、日本キリスト教連合会などの幹部が名を連ねている。実行委員長の阿純孝・天台宗宗務総長は「現時点ですぐに原発をやめることは非現実的だが、各国の参加者の討論では新しいエネルギーを求めるべきだという意見が強く出た」と述べた。

朝日新聞
8月5日

京都新聞
8月5日

稼働継続は倫理的に許されず
宗教者ら 原発へ警鐘
延暦寺で集い

「世界宗教者平和の祈りの集い」は4日午後、大津市の延暦寺で式典を行い、「原発を稼働し続けることは宗教的、倫理的に許されることではない」と訴える「比叡山メッセージ2012」を発表した。「脱原発」の文言はないものの、原子力発電への疑問を突き付けた形で、閉幕した。

集いは、「比叡山宗教サミット」25周年を記念して、2日間の日程で開かれた。この日午前は、京都市左京区の国立京都国際会館で、原発問題と宗教者をテーマにフォーラムがあり、6カ国の宗教者が持論を展開した。

討論の結果を反映させたメッセージは、原発稼働が続けられ、宗教者が社会へ警告しなかったことを自省した。

延暦寺での式典には、半田孝淳天台座主やマイケル・イグレイブ英国国教会大主教が参加、根本宮前で、仏教、キリスト教、神道、イスラム教など、各宗教の作法で、戦争や自然災害の犠牲者追悼の鐘を鳴らす責任があったことを率直に反省する」とした。核廃棄物の安全な処理方法が確立されていないまま、「原発を稼働し続けることは宗教的、倫理的に許されることではない」と訴えた。

討論の冒頭、天台宗の僧侶や檀信徒の子どもら250人が、花言葉が「別れた友を思う」とされるジニアリネアリスの鉢を壇上の枠にはめ込み、「結」の漢字を花文字で作った＝写真＝。東日本大震災の犠牲者を弔い、被災者と絆を結べ、という思いを込めた。

続いて、午後3時半から出席者全員で1分間、黙とう。65カ国のコインやメダルを溶かして鋳造された境内の「平和の鐘」が4度鳴り響いた。

平和の祈りでは仏教、キリスト教、イスラム教などの9団体の代表が登壇。仏典やコーランなどの言葉を引用し、我欲を抑え、他者への思いやりに満ちた平和を希求する思いを述べた。

平和実現への宗教者の責任を問う「比叡山メッセージ」が発表された後、武覚超・同寺執行がサミット25周年の節目を振り返り、「『継続は力なり』。教宗派の垣根を越えて共に考え、共に語り、平和を祈るこの行事を不退転の決意で続ける」と、閉会の言葉を述べた。

戦争や自然災害の犠牲者を追悼し、祈りをささげる各国の宗教者たち（4日午後3時半、大津市・延暦寺）＝撮影・山本陽平

（賀浦成克）

読売新聞
8月5日

世界平和祈り式典
宗派越え歩み続ける

「比叡山宗教サミット」から25周年を記念して開かれた「世界宗教者平和の祈りの集い」（実行委主催）の締めくくりとして、大津市の天台宗総本山・比叡山延暦寺で4日に開かれた「世界平和祈り式典」。出席した仏教、キリスト教、イスラム教など13か国の宗教指導者らは宗派の垣根を越えて祈りをささげ、恒久平和の実現のため、四半世紀を迎えた集いの継続を誓った。

式典の冒頭、天台宗の僧侶や檀信徒の子どもら250人が、花言葉が「別れた友を思う」とされるジニアリネアリスの鉢を壇上の枠にはめ込み、「結」の漢字を花文字で作った＝写真＝。東日本大震災の犠牲者を弔い、被災者と絆を結べ、という思いを込めた。

続いて、午後3時半から出席者全員で1分間、黙とう。65か国のコインやメダルを溶かして鋳造された境内の「平和の鐘」が4度鳴り響いた。

平和の祈りでは仏教、キリスト教、イスラム教などの9団体の代表が登壇。仏典やコーランなどの言葉を引用し、我欲を抑え、他者への思いやりに満ちた平和を希求する思いを述べた。

平和実現への宗教者の責任を問う「比叡山メッセージ」が発表された後、武覚超・同寺執行がサミット25周年の節目を振り返り、「『継続は力なり』。教宗派の垣根を越えて共に考え、共に語り、平和を祈るこの行事を不退転の決意で続ける」と、閉会の言葉を述べた。

布地のことなら…
(株)ピーターパン
http://pickup-pandoo.jp
0774-558-7100

朝日新聞
8月15日

震災体験 寄り添えたか

「世界宗教者平和の祈りの集い」25周年

教学論争への違和感／反原発の主張には意義

比叡山延暦寺（大津市）で毎年夏に開かれる「世界宗教者平和の祈りの集い」が、四半世紀を迎えた。「宗教の違いを超え、世界平和を考える」と、1988年に始まった。東日本大震災が起きてから5年目にあたる今年は、4日午前に国立京都国際会館（京都市左京区）でシンポジウムがあり、4日午後に延暦寺に移った。

シンポの議論は、東日本大震災と福島第一原発事故のこと、大津市・延暦寺の宗教者たちが、被災地で、どんな体験をし、日本の宗教者は何ができるのか、原発を含む社会とどのようにかかわるのかなどを問い、立宗は一致した。

東日本大震災の被災地では、寺や神社が避難所になったり、支援物資が集まる拠点になったりした。教団ごとのつながりで、海外から宗教者がボランティアに被災地に集められた。被災地でのボランティア体験を、日本の宗教者は貴重な経験として、自分たちの糧にしようとしている。

被災地・宮城県の神社の宮司、瑞井弘一・仙台市太白区の鹿島神社宮司は、イタリアのキリスト教系の慈善団体事務局長、四川大地震災害を題の過ぎたにしてきた宗教指導者を招いていたからである

週刊仏教タイムス
8月9日

比叡山メッセージ2012（全文）

2012年8月3、4日、比叡山宗教サミット25周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」に参加するため比叡山上に結集したわれわれは、平和を願う世界のすべての人々に心からのメッセージを送りたいと思う。

人類は有史以来、大自然の豊かな恩恵によって生命を維持し、さらにより利便性に富み快適な生活環境を手に入れるため、様々な工夫をこらしてきた。そのことは、やがて科学技術の飛躍的発展をもたらし、物質中心の近代文明が人々の生活を覆い尽くすこととなった。その結果、自然の恵みを享受するという姿勢から、自然を利用し、また改造して、より一層人間の生活を豊かにしたいという、飽くなき欲望を充足させる道をひたすら求め続けることになった。

そのようなとき、世界各地で自然災害が頻発、その甚大な被害の前に人々は為すすべもなく、呆然と立ち尽くす外なかったのが実状であろう。すなわち、科学技術が生んだ知見によって自然災害を防ぎ得るどころか、かつて日本の物理学者、寺田寅彦（1878―1935）が指摘したように、文明が進むほど自然の猛威による被害はその激烈さの度を増すという、冷厳なる事実を突きつけられたからである。

その結果、ややもすれば自然を収奪し、思うままに利用しようとしてきたことが、いかに傲慢なことであるかに気付かされたといっても過言ではない。

特に昨年3月11日の東日本を襲った大地震と大津波によって引き起こされた福島第一原子力発電所の放射能汚染事故は、チェルノブイリやスリーマイル島の原発事故について謙虚に学ぶ姿勢が余りにも乏しく、科学技術のもたらす安全性を過信した結果である。われわれは、技術の進歩の成果を無条件に受け入れるのではなく、その選択に深い倫理性が求められていることを知るべきである。

古代ギリシャ神話が物語るように、人類に火を与えたプロメテウスに、ゼウスは生きながら内臓を鷲に喰らわせるという罰を与えた、という。それは、すでに文明が人類に幸せをもたらすばかりではなく、厄災を内包するということを示唆しているのではないだろうか。

核燃料から生じる危険な廃棄物の安全な処理方法が、未だに見出せない現実一つをとっても、原発を稼働し続けることは宗教的、倫理的に許されることではない。われわれ宗教者は、このことに強く警鐘を鳴らす責任があったことを、率直に反省するものである。

あらゆる宗教は、欲望の充足が幸福をもたらすのではなく、まず日々の生活の中に平安を祈り、共に生かされて生きることを神仏に感謝することを説く。今や人類は物質文明に押しつぶされそうになっている現実に目を開き、誤りのない道を選ぶ岐路に立たされていることを知るべきであろう。

一方、自然災害が発生するたびに、自らの生命をも顧みず救援活動に従事する人々の崇高さ、黙々とボランティア活動を続ける人々の気高さ、また直接被災地に駆けつけることは叶わぬまでも、物心両面にわたって支援し続ける人々の心の温かさに、人類の未来を見る。われわれ宗教者も、災害発生と同時に、各地で被災者支援に努力を傾注してきたが、甚大な被害を前にして、まだまだ至らぬことを痛感せざるを得ない。

宗教者の重大な使命は、大自然の猛威によって亡くなった方々を弔うことにあると同時に、最愛の家族・友人を一瞬のうちに奪われた人々が、一日も早く平安を取り戻し、安寧に暮らすことができるように祈念し、共に歩み続けることである。ここに集うわれわれは、諸宗教の連携を深めながら、この使命を全うすることを誓うものである。

2012年8月4日
世界宗教者平和の祈りの集い参加者一同

比叡山宗教サミット25周年「平和の祈りの集い」

自然災害と原発テーマに

《メッセージ2012》世界へ発信

原発稼働 宗教的、倫理的に許されず

1987年8月の比叡山宗教サミットから25周年を迎え、海外12カ国から宗教指導者15人を招いて「世界宗教者平和の祈りの集い」が3、4日、京都市左京区の国立京都国際会館と大津市の比叡山で開かれた。昨年の東日本大震災・福島原発事故を受けて、集いは「自然災害の猛威と宗教者の役割―3・11大震災と原発事故への反省と実践」をテーマに、哲学者・梅原猛氏の記念講演、シンポジウム、フォーラム、祈りの式典を開催。2日間の意見交換を経て「原発を稼働し続けることは宗教的、倫理的に許されることではない」とし、また宗教者の使命は被災者が「安寧に暮らすことができるように祈念し、共に歩み続けることである」などとする《比叡山メッセージ2012》を発表して閉幕した。シリアの宗教指導者から内戦終結への支援要請もあった。

海外・日本の宗教者代表が登壇し、芳村正宗教法神道連合会理事長によって《比叡山メッセージ2012》が読み上げられた（4日、延暦寺根本中堂前）

シリア宗教指導者 内戦終結へ支援要請

集いは、日本宗教連盟傘下の5団体が中心となって組織した実行委員会が主催。初日国際会館での開会式典では実行委員長の武純孝天台宗宗務総長が、日本や世界が経験した自然災害に「宗教者がいかに取り組んできたかを、また、宗教者はどのように対処すべきかについて、宗教者同士で意見交換していただき、次の自然災害に対する備えにしたい」と述べ、開幕した。

記念講演は梅原氏が「『草木国土悉皆成仏』という思想」と題して行い、天台本覚思想の今日的意義を力説。「西洋文明は行き詰まりをみせている。東洋の智慧が必要ではないか」とし、動植物だけでなく鉱物にも成仏をみとめる「『草木国土悉皆成仏』の思想を基げ、西洋の自然支配の哲学とは違う」と訴えた。

引き続いてのシンポジウムでは「被災者に宗教者は何ができるか」をテーマに4人の海外宗教者と、この夏の震災で「宮城県宗教法人連絡協議会」の会長として被災者支援にあたった千葉博明・駒神社宮司が発言。宗教者の役割として「精神的心理的ケアの必要性が強調され、チェルノブイリ原発事故の教訓を生かすべきだ」などとの意見が出た。

記念講演で天台本覚思想の今日的意義を話した哲学者・梅原猛氏

フォーラムは「原発事故が提起した エネルギー問題と宗教者の立場」をテーマに5人の海外宗教者と本願寺派伽倶の山崎龍明武蔵野大学教授が発言。海外宗教者からは核廃棄物を未来の世代へ管理させることの倫理的な問題、安全性確保への懸念、再生可能エネルギーへの転換について発言があり、山崎教授は「原発事故は明らかに人災」とし、地震の多い日本列島に原発を設置したのは「金儲け」と断じ、「世界の宗教者が脱原発社会へ向けて歩みを共にする日の実現に私は努めたい」とした。

このあとは比叡山延暦寺へ移動し根本中堂前で、「平和の祈り式典」を執行。紛争と自然災害犠牲者の追悼のため参加者全員で黙祷し、金日本仏教会会長の半田孝淳天台座主が「大自然、大津波は人智では比べることのできない、いわゆる仏教でいう『諸行無常の理』であります。しかし今回の原発事故は、人間のあくなき欲望を満たそうと奪き進むあまり、大自然に対する畏敬の念を軽んじたことが根本にあるように思われたのであります」と述べ、また平和のために働く決意を新たにした。

宗教界に祈りが捧げられたのに続き《比叡山メッセージ2012》を芳村正神教法神道連合会理事長が発表。「核燃料から生じる危険な廃棄物の安全な処理方法が、未だ見出せない現実一つをとっても原発を稼働し続けることは宗教的、倫理的に許されることではない」とした上で「われわれ宗教者は、このことに強く警鐘を鳴らす責任があったと、率直に反省するものである」とした。また災害に対する宗教者の使命としては徒手空拳で「友人を一瞬のうちに奪われた人々が、一日も早く平安を取り戻し、安寧に暮らすことができるように祈念し、共に歩み続けることである」と世界へ発信した。

初日開会式典には約1200人、2日目の祈り式典には約1000人が参加した。

週刊仏教タイムス
8月9日

読売新聞
8月16日

信仰と希望 つなぐ使命

世界宗教者平和の祈りの集い

自然災害の猛威と宗教者の役割

比叡山宗教サミット25周年を記念した「世界宗教者平和の祈りの集い」が今月3～4日、国立京都国際会館（京都市）と比叡山延暦寺（大津市）で開かれた。13か国から宗教指導者が集まり、「自然災害の猛威と宗教者の役割」をテーマに討議した。大地震や津波は人の力の及ばないものとして、被災者の心の救済に重点を置く考え方が共有された。原発事故については「人災」として、文明のあり方を問い直す意見が相次いだ。（渋谷聖都子、藤岡博之）

■寄り添い続ける

シンポジウム「被災者に宗教者はいかに向き合ってきたか」には5人が登壇した。

スマトラ島沖の地震・津波（2004年）やハイチ大地震（10年）などの際、現地で活動した宗教対話組織「聖エジディオ共同体」のアルベルト・クワトルッチ事務総長（イタリア）は「宗教者は政治家や自治政府より重要な役割を果たすことがある。時には神の『手』にならなければならない」と話した。

タイの仏教団体のプラティープ・ウンソンタム・奏事務総長も、昨年の大洪水の体験を紹介しながら「災害を、困難を克服して新たな叡智を達成する機会ととらえられるように、心をケアしていく必要がある」と強調した。

災害に見舞われると、信仰していた宗教をマイナスにとらえる人とプラスにとらえる人に分かれる、と指摘したのはトルコのイスラム指導者ユスフ・ユルドゥルム氏。「自分の信じる宗教を肯定的にとらえ、自然災害を有益なものとして見直すための手助けをすべきだ」と言う。

東日本大震災の被災地からは、宮城県宗教法人連絡協議会の千葉博男副会長が報告した。身元不明の遺体が弔いもなく火葬されていることに心を痛めた僧侶たちが始めた「無料読経奉仕」や、有志の宗教者が設けた「心の相談室」などの事例を伝え、「宗派・教派を超え、互助共生の精神で被災者の心に寄り添っていきたい」と決意を語った。

四川大地震（08年）の後、17校の小学校再建に尽力した学誠・中国仏教協会副会長は「宗教者は、被災者の心を癒やす中で、共に成長することを目的にすべきだ」とし、息の長い支援を訴えた。

いずれも、物質面だけでなく精神的なサポートが求められているという視点は一致。「信仰を生きる希望につなげられるよう、導いていく使命と責任がある」という立場を確かめ合った。

世界各地の宗教者が集まった「平和の祈りの集い」（3日、国立京都国際会館で）＝川崎公太撮影

原発問題 賛否超え解決図ろう

■科学技術の検証

原発をめぐるフォーラムでは、世界仏教徒連盟のパロップ・タイアリー事務総長（タイ）ら多くの参加者から、原発の今後に否定的な意見が出た。事故のリスクに加え、放射能の半減期が2万年を超すプルトニウムなど廃棄物の処理にも懸念が示された。

22年をめどに脱原発を決めたドイツからは、バイエルン福音ルーテル教会のイヴォ・フーバー師が出席。「（命に）限界があり、過ちを犯す人間が、限界のない責任を負うことができるのか」と問いかけ、再生可能エネルギーの利用を柱にした模範的なライフスタイルを、宗教者自らが示す必要があると説いた。

「宗教者がエネルギーや経済の専門家と共同委員会を作るべきだ」と提案したのは世界宗教者平和会議国際委員会のウィリアム・F・ペンドレー事務総長（米国）。英国国教会ウーリッジ教区のマイケル・イプクレイブ主教も「経済や政治は短期的利益を追求する。宗教が蓄積してきた倫理面・精神面の知恵を盛り込まねばならない」と賛同した。

浄土真宗本願寺派僧侶の山崎龍明・武蔵野大教授は、原発を「金もうけ優先」と強く批判。今あるものを分かち合う「少欲知足」の経済学を確立すべきだと主張した。

一方、国情の違いから原発を容認する声もあった。インドネシアイスラム最高評議会のディーン・シャムスディーン副議長は、スマトラ島沖の地震と津波を経験したものの、世界4位の人口を持つ需要面から原発建設が進む現状を説明。「良いものを発展させ、悪いものは防ぐ」というイスラムの教理をもとに「原子力が人類の生活に恩恵をもたらす限りは支持し、脅かす場合は防ぐ」と述べた。

会場から発言した立正佼成会の庭野光祥・次代会長は「原発の問題では、仲の良い家族でも考え方が違い、関係が分断された。単に反対するのではなく、一緒に解決していこうという祈りの気持ちが必要だ」と呼びかけた。

議論に耳を傾ける宗教者たち

カトリック新聞
8月19日

震災、原発に宗教者は

比叡山宗教サミット25周年記念
「世界宗教者平和の祈りの集い」

8月3日と4日、比叡山宗教サミット25周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」（主催＝同集い実行委員会）が京都市の国立京都国際会館などで開かれた。「自然災害の猛威と宗教者の役割―3・11大震災と原発事故への反省と実践―」をテーマに諸宗教者によるシンポジウムや祈りの式典が行われ、脱原発を指向する文言を盛り込んだメッセージも発表された。

比叡山

今回、日本以外からはイタリア、タイ、中国、トルコ等13カ国の宗教者が参加した。

初日、京都国際会館で開かれたシンポジウムのテーマは、「被災者に宗教者は如何に向き合ってきたか」。東日本大震災の被災地での取り組みにも触れながら意見交換し、一般参加者を含む1200人が耳を傾けた。

4日午前には、「原発事故が提起したエネルギー問題と宗教者の立場」をテーマにパネリスト6人が話し合った。

午後からは、比叡山延暦寺（滋賀県大津市）で平和の祈りの式典が行われ、1千人が参列した。平和の鐘が鳴らされ、全員で黙祷をささげた。

主催者代表あいさつでは、実行委員会名誉顧問の半田孝淳師（天台座主）が福島の原発事故に言及し、人間の飽くなき欲望と、自然への畏敬の念を欠いたところに原発被害の根本原因があると指摘。祈りで世界平和と人類の救済を願うとした。

続いて、仏教、キリスト教、イスラム、神道等、7宗教団体が順次、平和の祈りをささげた。カトリックからは、来日中の教皇庁諸宗教対話評議会前局長、ピエル・ルイジ・チェラータ大司教と、駐日教皇庁大使のジョゼフ・チェノットゥ大司教、日本カトリック司教協議会会長の池長潤大司教が登壇した。

七つの宗教団体が祈りをささげた平和の祈りの式典

最後に「比叡山メッセージ2012」が発表された。参加者の意見調整を経たもので、「核燃料から生じる危険な廃棄物の安全な処理方法が、未だ見出せない現実一つをとっても、原発を稼動し続けることは宗教的、倫理的に許されることではない」などと述べている。

日本カトリック司教団は、昨年11月に即時の原発廃止を訴えるメッセージを発表したが、今なお国内外にはさまざまな見方がある。

実行委員の大塚喜直司教（京都教区）は、諸宗教者で脱原発を指向するメッセージを発表したことは「大きな成果」だと評価した。集い全体を通して、災害で崩壊したコミュニティーで人と人が関係を結び合っていくことの大切さが注目され「地域社会における宗教者の役割」が示されたことも印象深いと語っていた。

京都新聞
9月4日

世界宗教者 平和の祈りの集い

比叡山宗教サミット25周年

比叡山宗教サミットの開催25周年を記念する「世界宗教者平和の祈りの集い」が8月3、4の両日、京都市と大津市で行われた。シンポジウムとフォーラムでは、世界各地の宗教者が、災害や原発に宗教者としてどう向き合うのかを議論し、その内容を集約した「比叡山メッセージ2012」を発表した。

向かう

信仰コミュニティー 強く

3日は、哲学者の梅原猛さんの講演に続いて、シンポジウム「被災者に宗教者は如何に向き合ってきたか」があった。近年に大規模な地震や洪水が起きたイタリア、タイ、中国、トルコ、日本の宗教者が、災害の受け止め方や精神的な支援の大切さを語った。

被災者が感じる「なぜ悲劇が起こったのか」との疑念に対し、イタリアの宗教対話組織・聖エジディオ共同体のアルベルト・クワトルッチ事務総長は「神は悪を望んでいるのでない。自然災害は神のおほしめしではなく、人間の選択、人間の責任による悪の結果である」と、経済優先による自然の酷使が要因との考えを示した。

また、タイのスラムで教育支援に取り組む財団のプラティープ・ウンソンタム・秦事務総長は「（災害は）罪深き人間に天が罰を下した」とする捉え方を消極的とし、積極的な受け止め方は「人間の力を試す機会」であるとした。仏教の「慈悲喜捨」の教えに基づいて心を平静に保っていれば、「人知でコントロールできない事態に直面しても落ち着いて行動できる」と信仰心の大切さを説いた。

四川大地震の後、現地で学校建設などを支援した中国仏教協会の学誠副会長は「現実的な苦しみへの対処から着手すべき。今までの生活を取り戻し、負傷者を癒やすというプロセスを通じて被災者と良好な関係を結ぶことが、その後の支援の土台となる」と早期の関与が重要と指摘した。

トルコの支援団体キムセヨクムのユスフ・ユルドゥルム副理事長は「第三世界の国では外部から派遣された人よりも宗教指導者に強い信頼を寄せる」とし、「宗教が確固としたよりどころとなるため、指導者は災害時のストレスに耐えうる強い信仰コミュニティーを築かねばならない（イスラム社会では）地域の宗教指導者の役割が不可欠」と述べた。

宮城県宗教法人連絡協議会副会長を務める千葉博男・竹駒神社宮司は、東日本大震災後の宗派連携による支援の内容を報告した。震災で工場冷凍設備を失った人が神社を参拝後、「勇気をもらった」として仕事を再開した事例に触れ、「信仰を持っている人は立ち直りが早い。他人を頼るだけでなく、自ら努力し、神の加護を信じて頑張る」と、自身への決意も込めて語った。

（沢田亮英）

初日のシンポジウムでは、地震や洪水被害を受けた5カ国の宗教者が、被災者支援の在り方を話し合った（8月3日、京都市左京区・国立京都国際会館）

世界へ発信

比叡山宗教サミット

まだ東西冷戦下にあった1987年8月、比叡山宗教サミットは仏教、キリスト教、イスラム教など主な宗教の代表者を中心に国内外から約600人が参加し、大津市の

比叡山宗教サミットでパチカン代表とあいさつする山田恵諦天台座主（1987年8月）

宗教を超えて世界平和を祈る集まりは、当時の山田恵諦天台座主の強い思いから実現した。81年に来日したローマ法王ヨハネ・パウロ2世（当時）が、延暦寺を開いた最澄の言葉を引いて宗教協力を呼び掛けたことに感動し、86年に法王がイタリア・アッシジで開いた平和祈願の集いに出席した。その精神を継ぐ意義をサミットに込めた。

サミットで採択されたメッセージは、平和を祈る宗教者の営みを世界各地で繰り広げることの大切さを訴えている。88年以降、毎年8月に延暦寺

災害、原発にどう立ち

核にノー、新エネルギーを

4日開催のフォーラム「原発事故が提起したエネルギー問題と宗教者の立場」では、東京電力福島第1原発事故が与えた影響について、6カ国の宗教者が意見を交わした。

浄土真宗本願寺派僧侶の山崎龍明・武蔵野大教授は、毎週金曜に国会周辺で行われている脱原発デモに参加している。国の政策を「企業利益のために命よりもお金を優先して原発設置を進めてきた」と非難し、原発の運用継続について「使用済み燃料は、世界中で処理ができない。この無責任性、非倫理的なものを宗教者はどう捉えるかだ」と訴え、信仰面から問題を提起できるとした。

ドイツは昨年7月、国内にある17基の原発を2022年までに全廃することを決めた。同国のバイエルン福音ルーテル教会のイヴォ・フーバーさんは福島事故の後、「どんなハイレベルな技術をもってしても、マルチン・ルターの『すべての人は罪を犯した』、つまり私たちには限界があり、過ちを犯す人間であり続ける」と問い続けたことを明かした。

世界宗教者平和会議（WCRP）国際委員会のウイリアム・ペンドレー事務総長は、1979年のスリーマイルアイランド原発事故で米国の「安全神話」が崩れたと指摘し、「核兵器を所有することが道徳的に許されるのか。原発もコントロールできるものではないとの認識が広がった」と話した。

新エネルギー開発の必要性については、世界仏教徒連盟のパロップ・タイアリー事務総長が「核に対してノーと言い、革新的なエネルギー源を求めるべきだ」と述べ、インドネシアのイスラム最高評議会ディーン・シャムスディーン副議長も「宗教指導者は、持続可能で環境に優しいエネルギーへの投資を支持すべきだ」と呼び掛けた。

一方、英国国教会ウーリッジ教区のマイケル・イブグレイブ主教は、英国では原発が政治問題化しておらず、国教会でも深い議論が始まっていないことを説明し、原発をめぐる各国の温度差を感じさせた。（賀浦成克）

原発について意見を交わしたフォーラム（8月4日、左京区・国立京都国際会館）

比叡山メッセージ2012

要旨

8月4日に天台宗総本山延暦寺で発表された「比叡山メッセージ2012」の要旨は次の通り。

世界各地で頻発した自然災害の甚大被害を前に、自然を収奪し、思うままに利用しようとしてきたことが、いかに傲慢なことかに気付かされた。

東日本大震災に伴う福島第1原発事故は、チェルノブイリやスリーマイルアイランドの原発事故を議虚に学ぶ姿勢が乏しく、科学技術のもたらす安全性を過信した結果だ。技術の進歩の成果を無条件に受け入れるのではなく、その選択に深い倫理性が求められる。

核燃料から生じる危険な廃棄物の安全な処理方法が、いまだ見いだせない現実一つをとっても、原発を稼働し続けることが宗教的、倫理的に許されない。宗教者は、このことに強く警鐘を鳴らす責任があったことを率直に反省する。

宗教者は、災害発生と同時に各地で被災者支援に努力を傾注してきたが、まだ至らぬことを痛感する。宗教者の重大な使命は、大自然の猛威によって亡くなった方々を弔い、最愛の家族や友人の命を奪われた人たちが安寧に暮らすことができるよう祈念し、ともに歩み続けることだ。

こころ

延暦寺と京都市左京区のホテルで開かれた。で世界平和を祈る集いが開かれており、節目には記念事業も催してきた。米国同時多発テロの翌年にはイスラム教への理解を深めるテーマを設定するなど、宗教者の相互理解にも取り組み続けている。

比叡山宗教サミット25周年記念
世界宗教者平和の祈りの集い
発行日　平成二十四年十一月二十日

発行所／発行人　滋賀県大津市坂本四―六―二　天台宗務庁内
比叡山宗教サミット25周年記念
「世界宗教者平和の祈りの集い」実行委員会
電話　〇七七（五七九）〇〇二二
印刷所　ヨシダ印刷株式会社

比叡山宗教サミット25周年記念
「世界宗教者平和の祈りの集い」実行委員会